家庭教師ヒットマンリボーン　　－宵の口－

Pety

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家庭教師ヒットマンリボーン　一宵の口一

【Ｎコード】
Ｎ１２７３Ｘ

【作者名】
Ｐｅｔｙ

【あらすじ】
安らぎを奪われ、代わりに地獄に落とされた。　存在を否定され、代わりに狩る楽しさを知った。　地獄を歩いていたら楽しそうな世界を見つけ、初めてマトモに触れあった。　再び安らぎに包まれるその日まで・・・・私は吸い尽くして狩り尽くす。　楽しく愉しく生きていく。　この手に灯る炎と共に・・・・・。
処女作です。　思いつきです。　暇潰しです。　そして駄文です。
上記で明らかですが、作者は中二病です。　そして続くかどうかか

なり不安です。　作者の滑稽な努力を、暖かく、もしくは生暖かく、あるいは冷めた目で見守っていてくださいｍ（　）ｍ

プロローグ（前書き）

どうも初めまして、Ｐｅｔｙと申しま～す。

初めての小説制作で、文才皆無なうえに何となくで始めた作品なのでお目汚しになると思いますが、何卒ご容赦くださ～～い。

プロローグ

初めて目が覚めたのは暗闇の中・・・・・
欠片程の光すらも無い黒一色・・・
自分の体すら見えない闇の中で・・・・・
今にも途切れそうな薄い意識で・・・・・
ただ暗闇の先を見据えていた・・・・・

気が付けばどこからか声が聞こえていて・・・・・
それは独り言であったり・・・・
時には私に語りかけていた気もする・・・・
一人だった声が二人になって・・・・
時には三人だったり、もっと沢山だったり・・・・

とにかく多くの声を、闇の中で聞いていた・・・・・

うるさいうるさいうるさいウルサイウルサイウルサイウルサイ・・・・・

喋らないで欲しい・・・

語りかけないでほしい・・・・

私は静かでいたいから・・・・・

私を包む闇の中で・・・・・

ただ静かに包まれていたいから・・・・・

これ以上私の安らぎの世界を乱さないでほしい・・・・・

私は闇の先にいる者たちに訴えようとする・・・・・

しかし何も言えない・・・・・

言えないなら体を動かす・・・・・

見ることの出来ない腕が動いた・・・・・

闇の先に手を伸ばす・・・・・

何かに触れた・・・・

すると何故かもっとウルサクなった・・・・

静かにして欲しくてさらに動かす・・・・

もっともっとウルサクナッタ・・・・

・・・・・・・・メンドウダ・・・・・・・・

目を閉じる・・・・・

開けても閉じても真っ暗な場所で・・・・

必死に動かした手で耳を塞ぎながら・・・・

いったいどれ位そうしていただろう・・・・・

突然私を包んでいた闇が蠢いた・・・・

さらには今までで一番ウルサイ声が響いた・・・・

声というより悲鳴・・・・・

頭が痛くなる・・・・

何かに引き寄せられる・・・・・

安らぎの世界が悲鳴を立てながら激しく蠢く・・・・・

段々と悲鳴が近くなる・・・・・

目を開けて先をみると・・・・・

・・・・・光？・・・・・

・・・ありえない・・・・・

恐い恐い怖いこわいこわいこわいコワいコワいコワいコワいコワい

私はそっちに行きたくない・・・・・

この安らぎの世界から出たくない・・・・・

必死にもがいて抵抗する・・・・・

悲鳴がさらに大きくなった・・・・・

私を引き寄せる力も・・・・・

イヤだ・・・・・

やめろ・・・・

放してくれ・・・・

光は大きくなり続けて・・・・

私は・・・至高の安らぎから引きずり落とされた

プロローグ（後書き）

なんのこっちゃって感じですねｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

プロローグなんで少し抽象的でもいいかな～って思ったんでこんなふうになっちゃいました（＞▽＜）＞テヘッ

一話からは勿論こんな訳わからん文章にはなりませんのでご安心を

第一話（前書き）

さあ続いて一話目です。

プロローグの時点で「あっ、これダメだわつまんねぇ～」って感じでさよならされていそうで怖いです（（（（；゜Д゜））））

ではどうぞ。♪

第一話

安らぎから引きずり落とされてから五年が経った。
一年で歩くことを覚え、二年で話すことを覚え、三年で学ぶことを覚え・・

そいて四年で・・・・・・・狩ることと燃やすことを覚えた。

脈絡がないの仕方がない。
だって親がおかしいのだから。
最初は嬉しそうにしていたのに、年が重なる程、笑顔が恐怖に変わっていったから。

『死ね！　この化け物！！』

しまいには私を殺そうとまでしてきた。
ただでさえ煩わしい奴らだったのに、この一言で殺意が沸いた。

殺す？　お前らごときが私を？
私を安らぎの世界から引きずり出しておきながら？
その責任すら取らずに？

「ふ～ざけ～るな？♪」

生かしておいたのは誰だか教えてやろう

生かされていたのは誰だか教えてやろう
もうとっくにコイツらの価値は無いのだから。

イタリアのとある森の中

「う〝お〝おい！　この先の集落かぁ？　例の［首狩り魔］が出たってのはぁ？」
「そうみたいだよ、張り込んでた隊員の連絡も五分前に途絶えたし。」
「まじ？　ししっ、たぁんのしみ～♪」
やたらと声の大きい白髪ロン毛の男に、空中に浮かぶ赤ん坊、前髪で目が隠れていてティアラを頭に付けた少年。

ツッコミどころしかない一行が早足で進んでいる。

「やっと尻尾をつかんだんだぁ、しくじって逃がすんじゃねぇぞぉ？！」

「もちろんさ。　ボクらがいつまでも手間取っている訳にもいかないしね。　これ以上金にならない仕事の延長は御免だよ。」

「俺らの追跡半年も逃れるとか半端じゃねぇもんな。」

「ったく！！　んな厄介なヤロウを生け捕れなんざ、うちのクソボスはまた面倒なことさせやがる！」

逃すなと言いつつ一番に気づかれそうな大声を張り上げ、歩く速度を上げるロン毛男、その後ろについて行く赤ん坊と少年。

その内森が開け、目的の集落が見えた。

「っ！！　う〝お〝ぉい・・・こいつぁ・・」

「ムムッ・・・これは・・」

「ししっ・・すんげぇ・」

集落は既に廃墟となっていた。

家という家は全て燃え上がり、あちこちに死体が転がり、全体が血の海になっていた。

しかし、三人が息を呑んだのはそれが理由ではない。

彼らにとってはその程度は日常であり、立ち止まる理由にはならない。

なら何故とまったか？　それは――――

「現場を見るのは初めてだが、不気味だぜぇ。」

「幻覚の類だと思ったけど、そうでもないね。」

「なんかテレビの早送りみてぇ～だなぁ」

ただ燃えているならばいい、その色が灰色でなければ・・・・
死体があるのはいい、目の前で恐ろしい速度で腐って骨が見えていなければ・・・・

少年が言っていたように、まるでテレビの早送りのように溶けて腐っていく死体。
いくら血まみれの日常を送る彼らからしても異常な光景だった。

「ここで考えても埒があかね〝ぇ、さっさと［首狩り魔］んとこいくぞぉ！」
「そうだね、少し興味も出たし。」
「ししっ、早く殺りてぇ～♪」
「生け捕りだっつってんだろうがぁ！」

死体をよけて廃墟の中を進む一行、途中で自分らと似た服を着た骨があったが無視。
二分程歩くと広場に出た。
ここまでの道で見たのとは比べ物にならない程のおびただしい数の死体が積み重ねられ、その上にボロい布を纏った人物が座っていた。
顔は隠れていて見えず、長い黒髪が足元まで垂れ下がっている。
体全体が血まみれで、ボゥっと空を見上げているようだ。

「ししっ、いたいた♪」
「こっちに気づいてない？　それとも・・・」
「んなもんどっちでもいい、う〝お〝おおぉぉい！！　これやったのはテメェだなぁ？！」

ロン毛の声に振り返る［首狩り魔］、心の中でだけ身構える一行。

「そうですよ〜〜？　貴方達は誰ですか〜？？」

予想に反し、間延びした声。
というより力の抜けそうなテンションで答える首狩り。

（この声は女かぁ？　しかも体格見る限りベル並にガキじゃねぇか）
（殺気も何も感じないね、本気でボクらに気づいてなかったみたいだし）
（早く殺りてぇなぁ、まだかよ）
「俺たちゃあヴァリアーの人間だァ、テメェに用があってきたぁ」
「うわぁお？　ヴァリアーって言えばボンゴレの最強部隊でしたっけぇ？　すんごい大物さん達に会っちゃいましたねぇ〜〜〜？」

可笑しそうにケラケラと笑う首狩り、死体の山を降りて三人の四メートル程前で止まった。

「それでご用はなんですかぁ〜〜？」
「ウチのボスがテメェを生け捕りにしろって言ってんだぁ、俺らと一緒に来い。」
「そうですか〜〜、ちなみに断るとどうなります？」
「力ずくってことになるね。」
「最悪ここであの世行きだね、ししっ♪」
「そういうことだぁ。」

案外すんなり事がはこびそうな雰囲気に若干気が抜けそうになる三人

「へぇ〜あの世行きですか〜〜？　貴方達がですかぁ〜？」
「「「・・・はぁっ？」」」

少女の一言で場に一瞬で緊張が、いや、殺気が充満した。

「う〝お〝ぉい、死にてぇのかぁ」
「いい度胸だね。」
「刻み決定♪」

各々が武器を構える、首狩りを除いて。

「いきますよぉ？　頑張って生きてください？」
「武器はどぉしたぁ？」
「さっき壊れたんで、素手です～。」

首狩りは手をヒラヒラと振って武器を持ってないことをアピールする。

「それなら。」
「さっそくバイビ～♪」

赤ん坊と少年がそう言った直後、突然首狩りの足元から火柱が出現した。
間髪入れずに少年が火柱の中、首狩りがいた位置に向かって手に持った複数のナイフを一気に投擲した。

「ししっ、ハイ終了～♪」
「拍子抜けだね。」

まったく反応せずにマトモに受けた首狩り、二人は勝利を確信したが・・・・

「まだだぁ！！」
「その通りで～す。」

「「っ！？」」

ロン毛が叫んだ瞬間、火柱の中から首狩りがとてつもない速さで飛び出し、一瞬で赤ん坊と少年の目の前に接近する。

「ムッ！？」

「やべっ！！」

慌てて距離を取ろうとする二人だが、既に首狩りの手が二人の眼前に迫っていた。

「まずは二人で・・・・」

グウゥゥゥ～～～～ギュゴゴゴォォォォォ～～～～

突然の謎の音により、場が静止する。

「「「は？」」」

「・・・・・・・・・あ～・・・」

ドサッ

そして倒れる首狩り。

「う〝お〝ぉぉい！　どういうことだぁ！？」

「知らないよ」

「死んだんかよ？」

全く動かない首狩りを見て、ゆっくり近づく三人。

「うっ・・・・・・うぅ〜〜。」
「「「おっ」」」
「は・・・・」
「「「は？」」」
「ハングリ〜・・・・ガクッ」
「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」

今度こそ気絶したらしい。

「・・・・とりあえずアジトに運んだほうが良さそうだね。」
「そうだな♪　そんじゃあスクアーロよろしく〜。」
「う〝お〝ぉぉい！　何でおれだぁ？！　テメェがやれぇ！！」
「やらないよ、だって俺王子だもん。」

さっさと帰る二人を、首狩りを肩に担ぎながら追いかけるロン毛だった。

第一話（後書き）

どうでしたでしょうか？　解りにくかったらすいません。

次回は主人公の名前出せたらいいな～～～？

第二話（前書き）

二話目です。いつになったらスクとベルとマーモンは名前で表記されるんだｗｗｗｗ

ではどうぞ。

第二話

暗闇の中にいると心が安らぐ・・・・

これ以上ない程に穏やかな気持ちでいられる・・・・・

でも、今のこの闇は一時のものでしかない・・・・

あの日奪われてから、ずっと仮りそめの代用品・・・・・

現に今も段々と薄れて行く・・・・・

光にかき消されていく・・・・

私を置いて、消えて行く・・・・・・・

「うっ・・・・・・う～ん・・・」
顔に差し込む光に私は目を覚ます。
「どこだよここ～」
見回せば素人目にも金が掛かっていそうな広い部屋。
その窓際にある大きなベッドで私は寝ていたみたいだ。
めっちゃフカフカだ。
「とりあえず何があったんだっけ～？」
たしかお腹が空いたから近くの集落にいって～～
道端でチンピラに絡まれて～～
あまりの空腹にイライラしてたからつい殺っちゃって～～
そしたら周りがうるさくなって～～
警察とか呼ばれたら面倒だからとりあえず全殺しして～～
その時上手く加減出来なくて食料も燃やしちゃって～～
途方にくれてたら変な三人組が来て～～
それで・・・・・・・
「バトったんだっけ？」

駄目だ、三人が来た辺りから視界が霞んでよく見えず、さらには半分意識が飛んでた状態だったから
記憶がぼやけて思い出せない。

「まぁいっか・・・・それよりもお腹すいた～～～」

空腹だったのを思い出したら腹の虫が再び叫び始めた。
お腹と背中がくっつきそうとはまさにこの事だ。

「っ！！　・・クンクン・・・・こっ、これは！？」

ベッドの上で唸っていた私に突如として漂ってきたこの魅惑的な香り。
これは間違いなく・・・・！！

「ご飯の臭い！！！！」

シーツを跳ね飛ばし、入口まで全力疾走、しかしドアの前で止まり、慎重にドアを開けて周りを見回す。

「またあの三人に出くわすとも限らないしね～～。」

左良し、右良し、前良し、監視の気配も無し！

「それじゃあ、ゴー？」

臭いを嗅いで発生源を探索、目標に向かって駆け出す。
慎重に、かつ迅速に、しかし足音は一切出さずに走る。

「しかし部屋もそうだったけど、随分立派な屋敷だね～。」

どうやらかなりの金持ちに拾われたようだ。
三人との会話を思い出せればここがどこだか解るかもしれないけど、
今はそんなのどうでもいい。
とにかく今は、美味しいご飯を頂戴するべし！！

「ここか・・」

目的の場所に到着、臭いはますます強くなり、それに比例して腹の
虫どもが悲鳴の大合唱し始める。
断末魔の叫びに変わるのはもはや時間の問題だ。

「いざ！」

先程と同じく慎重にドアを開ける。
どうやら厨房のようだ、当たり前だが。
奥の方に人の気配がある、一人だけのようだ。
何か作っている最中らしく、鼻歌が小さく聞こえてくる。

「よし、好都合。　さ～て、お目当ての物はっと？」

部屋中を見回すと、ドアのすぐ横にある料理を運ぶワゴンの上に目
標を発見。

「おおおぉぉぉ～～～～～～！！！！」

それはまさにヘブンだ。　料理一つ一つが光り輝いて見える程の歓
喜が湧く。
スッッッゲェ！！　ヤベッ、我慢出来ないっ！　頂きま～～す！！

！！！

「ガツガツうまうま・・・～～～！？　何コレ超うめぇーーー！！」

マジヤバイ！　空腹は最大の調味料って本当だ！！

私の人生現在食欲の絶頂期や～～～～！

「いやぁこんな美味しいご飯食べられるなんて、ここに来てラッキーだったな～～？」

「あらそう？　そんなに褒めて貰えるとアタシも作った甲斐があったわ？　まだまだあるからどんどん食べてね？」

「え、そうですか～？？　それじゃぁお言葉に甘え・・・・・・・・て・・・・・・・・・」

私、誰と喋ってるんでしょうか？

頬を冷や汗を垂らしながら振り返るとそこには・・・・・・

顔先十センチにオカマの顔があった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

「以上で終わりだぁ。」
「・・・・・」

少女が寝かされていた場所とは違い、豪華な家具が並べられた一室に二人の男がいた。
一人は首狩りに出会ったロン毛、スクアーロと呼ばれていた男。
もう一人は、大きな机に、同じく大きな椅子に腰掛けながら足を投げ出して手元の報告書に目を通していた。
常に不機嫌そうに眉を寄せ、睨むような目付きをしている。
スクアーロの口頭での報告が終わっても、しばらく沈黙が続いた。

「マーモンの幻覚が効かなかった・・・か・・」
「そうだぁ、燃えるどころか焦げ跡一つ付いていやがらなかったぁ。
ベルのナイフもかすりもしなかったみてぇだしなぁ。」

口を開いた男の呟きに、スクアーロが答える。
すると男は引き出しから一枚の紙を取り出し、スクアーロに差し出す。

「なんだぁこれはぁ？」
「入隊書だ、書いて自分で持って来させろ。」
「はぁっ！？　そりゃぁどぉいう事だぁＸＡＮＸＵＳぅ！！」

いきなりの話について行けないスクアーロが目の前の男、ＸＡＮＸＵＳに聞き返す。

「うるせぇカス、さっさと行け。」
「んだとゴラァ！！」
「・・・・」
「シカトしてんじゃねぇぇ！！！」

スクアーロが騒ぎ立てるが、ＸＡＮＸＵＳは無視し続ける。

「ちっ！　あとで必ず聞かせてもらうからなぁ！！」

一旦退くことにしたスクアーロは、捨て台詞を吐いて部屋を後にした。

目に見えてイライラしているスクアーロが、ズンズンと音を立てながら大股で歩いている。

首狩りの少女の眠っている部屋に向かっている途中だ。
「終わったみたいだね。」
「ししっ♪　どうだった？」
「お前らかぁ。」
少女と戦った赤ん坊と少年、ベルとマーモンが向かいから歩いてきた。
「奴の見張りはどうしたぁ？」
「ルッスーリアが見てる筈だよ。」
「見張りとかつまんねぇし。」
・・・・・・・
「お゛ぉい、ルッスは奴の飯作るんじゃねぇのかぁ？」
「「・・・・・あっ」」
・・・・・・・・・・・・・・・・
「う゛お゛ぉぉぉぉぉい！！！　そんじゃ誰も監視してねぇのかぁ！！？」
「そういうことになるね。」
「ししし、失っ敗♪」
「言ってる場合かぁ！　さっさといくぞぉ！！」
走り出す三人（マーモンは飛んでる）、もし逃がせば面倒なことになるのは火を見るより明らかだ（主にＸＡＮＸＵＳとかＸＡＮＸＵＳとかＸＡＮＸＵＳとか）
ものの十秒足らずでたどり着き、勢い良くドアを開ける。

しかしベッドに目的の少女の姿はなし。

「くそがぁ！」
「ホントに居なくなってやんの♪」
「マズイね。」
「まだそう遠くには行ってねぇはずだぁ！　各部隊に通達して・・」
『ぎゃあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！』
「「「っ！？」」」

三人が部屋を出ようとした矢先、響きわたる叫び声。
女の声であることはかろうじて解るが、まさに断末魔のような恐怖がありありと感じ取れる悲鳴だった。

「ししっ♪　これってあいつの声じゃね？」
「そのようだね。」
「厨房の方からだぁ、ルッスと遭遇でもしたか。」
「なるほど。」
「あのカマとバッタリ出くわしたら確かに叫ぶかもな。」
何故か妙に納得しながらも移動し、厨房に到着。
勢い良くドアを開き、中へと入った。

第二話（後書き）

展開が遅いな（汗

もうちょい早く進めるように、そしてもう少し長く書けるようにしたい。

頑張ります。

次回こそは、次回こそは！

主人公の名前をだしてみせるっ！！！！！

第三話（前書き）

眠いよ～、瞼が重いよ～。

誤字脱字注意報の三話目です。

第三話

「んもうっ！　失礼しちゃうわっ！！」
「本っ当に申し訳ありませんでした。」

厨房の床に土下座する私。
目の前にはいかにも怒ってますと言いたげに腕を組んで仁王立ちするオカｍ・・・ルッスーリアと名乗った人。

「百歩譲って叫んだのはいいわよ？　私もちょっと驚かそうとしたわけだし。」
「はい・・・。」
「でもだからって顔面に裏拳かますのはやりすぎじゃない！？　顔が陥没骨折するかと思ったわよ！？」

ルッス姐さんの（そう呼んでと言われた）顔に掛かってるサングラスは右半分が見事に砕け散っていた。
あまりの恐怖についコンクリを余裕でぶち抜ける位の力で殴ってしまった。
それをマトモに食らって気絶すらしないこの人も大概すごいが・・・

「いやその・・・なんというか・・・・・・条件反射で・・・」
「振り返りざまに人の顔面に裏拳叩き込む習慣でもあるの？　まぁいいわ、いつまでも床に座ってないで立ったら？　それに、まだ食べるんでしょう？　さっきも言ったけどまだまだ沢山あるわよ？☆」
「え？　あ、はい。　いただきます。」

どうやら許してくれるご様子。
さすがルッス姐さん！　心が広い！　まだよく知らないけどね？

美味しい料理の前では些末なことなど気にならないのだよ～

「そう言えばまだ貴方の名前聞いてなかったわね。」

「あ、そうですね。　私は・・」

ガチャッ

「う〝お〝ぉぉいルッス！！　奴はどこだぁ！」

「あら？　スクアーロじゃない、どうしたのそんなに慌てて。」

「（邪魔された・・）・・・・むしゃむしゃ・・。」

「ししっ、発っ見～～♪」

「逃げたわけじゃなかったみたいだね。」

見覚えのある三人が入ってきて名乗り損ねた私は、とりあえず食べながら様子を見る。

「部屋に居ねぇからこっちに来たんだぁ！　それよりさっきの悲鳴はなんだぁ。」

「私の顔を見た瞬間にいきなり叫んだのよ。」

「なるほどね、ところでその顔はどうしたんだい？　サングラスが割れてるけど。」

「裏拳かまされたのよ。」

「マジ？　ししっ、ナ～イス♪」

頭にティアラをのっけた少年が、ドヤ顔で私に親指をグっと向けた（髪で隠れて目は見えてないけど）。

「ナイスじゃないわよ！　死ぬ程痛かったんだからっ！！」

「う〝お〝ぉい！　そんなことはどうでもいい、起きたんならテメェのことを話してもらおうかぁ。」

「はぁい。」

やっと話が進んだ、とっくに食べ終わってたし、美味しく頂きました？

「えぇと、まず私の名前は夜月満流（やづきみちる）と申します。　先月で六才になりました。」

「俺はスクアーロだぁ。」

「さっきも言ったけどルッスーリアよ、宜しくね？」

「僕はマーモンだよ」

「オレはベルフェゴール、ベルでいいぜ～♪」

なんかこの人達と話してたら気絶する前のこと段々思い出してきた。

「その名前からして、君は日本人かい？」

「そうですよ～。」

「何でイタリアに来たぁ。」

「一人旅で～す？」

「よく親が許可したわね。」

「許可されてませんよ～？　殺しましたから～。」

「ししっ、まじ？　俺も殺したぜ。」

「うっとおしいだけですもんね～。　あんな奴ら。」

「同感♪」

このベルとは気が合いそうだね～？

「それで、たしか皆さんはヴァリアーの人なんですよね～？　そのボスさんが私なんかに何の用ですか～？」

「そのことだが、今すぐこれ書いてボスんとこ持って行けぇ。」

紙を一枚手渡される。

「何ですかコレ？　・・・入隊書？」

「どうやらウチのクソボスはテメェをここに入れるつもりみてぇだぁ。」

「・・・・・・何故に？」

「んなもん俺が知るかぁ。」

「どうせボスに教えてもらえなかったんでしょ？」

「ありえるね。」

「ハブられてやんの♪」

「う〝お〝おぉぉい！！　ぶっ殺されてかぁ！！！」

四人が騒いでいる間に私は必要事項を記入していく。

特技などの一般的なプロフィールから始まり、暗殺経験、戦闘スタイル、武器、ｅｔｃ・・・・

「出来ました～～？」

「随分早いね。」

「というかいいの？　そんなに即決しちゃって。」

「どうせ行くアテもないですしね～～、むしろ食い扶持が出来てラッキーみたいな？」

「暗殺部隊を食い扶持扱いとか♪」

「まぁいい、とにかくボスんとこに行けぇ」

「了解で～す。」

道順え教えて貰い、ボスさんの部屋へと出発する私。

後ろの方から「殴られないように気を付けてね～ん」とか聞こえてくる。

そんなに凶暴な人なんだろうか。

「ここか～。」

ボスさんの部屋であろうドアの前で止まる。

「ヴァリアーのボスかぁ、どんな人だろう？」

思えば入隊書を書いてる間、四人が「またウィスキーを頭に投げつけられた～」とか「机の角に顔面叩きつけられた～」とか言っていたような気がする。

「入った瞬間頭ちょん切られるとかないよね～？」

もしくは眉間に鉛玉ぶち込まれるかもしれない。

何故だろう、さっきから死のイメージしか湧いてこないんだけど。

「やっぱりここは秘策を使うしかないですね～。」
秘策とはここに来るまでに思いついたちょっとしたイタズラみたいなものである。
普通に入れば何があるか分からない。
なら少しユーモアのある入り方をすれば多少は打ち解けられるのではないか、と考えた末に思いついた。

「よし、いざ行かん！」

目の前のドアをノックもせずに勢い良く開ける。

「う〝お〝おぉぉぉぉい！！　邪魔するぞぉ！」

ガッシャァァン

「・・・・・」
「・・・・・」

沈黙の中、上を見ると。
私の頭上約６０センチ程上にコップが激突の衝撃で砕け散っていた。
中に入っていた酒や氷が四散したいる。
もし入ったのがスクアーロだったら顔面に直撃していただろう。

「・・・・・」
「・・・・・」
「あ～・・・・・・えと・・・その～・・・」

痛いほどの沈黙に逃げ出したくなってきた。
しかしここで挫けるわけにはいかない、石のように固まっていた足

を気合で動かしてゆっくりとボスさんがいる机に近づいていく。

「すいません・・・えっと・・スクアーロって人に言われて入隊書を持ってきたんですが～・・・」

思わず低姿勢になってしまうのは仕方がない。
さっきからそれだけで人を殺せそうな目で一瞬たりとも目を逸らさずにガン見しているのだから。
なんとか机の前にたどり着き、そっと書類を差し出す。

「・・・・」

無言で受け取るボスさん。
こわいよ～～～（；ω；）

「おい。」
「はっ・・はい！」

やべっ、声が裏返った。

「この［灰色の炎］ってのはなんだ。　現場でも何度か使ってたな。」
「あ～それは・・・」

絶対聞かれるだろうと思っていたので、ありのままを話す。

「詳しい事は私にも解らないです。　四才の頃に使えるようになって、普通の火なんかよりも遥かに良く燃えるので頻繁に使うようになりました。　銃弾を防げた時にはさすがにビックリしました。
しかも何でか私自信や私が身に付けてるものは一切燃えないんです

よね～、なんという親切設計。」

話してる内に段々口調が砕けていってしまったのは仕方ない。
目上の人に対する態度なんて本当なら一分と持たないんだから。
今回は三分もった、素晴らしい程の新記録。

「そんな感じです～、あっ、もしかしてそれで入れなくなったりとかは・・」
「いや、むしろ好都合だ。　夜月満流、テメェは今日からココの隊員だ。」
「ほっ、有難うございます～、よろしくお願いします。」

よかった～、やっぱり有名な暗殺部隊は懐が深いな～

「それと、テメェの存在はここ以外では非公開だ。　だが隊の中では幹部扱いにする。」
「非公開？　それにはどう言った意味があるのか聞いてもいいですか～？」
「テメェの使い道はもう決まってる。　そのために素性を隠してもらう。　その時がきたら詳しく話す。」
「そうですか～、了解です。」
「明後日から任務だ、あとはカス鮫に聞け。」
「わかりました～、失礼しま～す。」

カス鮫と聞いて何でスクアーロのことだと思ったのかは私にもわかりませ～ん。
ボスさんの部屋を出て、とりあえず厨房へと向かう。
すると向かいからルッスが歩いてきた。

「あら、満流じゃない。　無事でよかったわ～。」

「はい、なんとか生還出来ました。」
「なら行きましょ、そこの部屋が広間なの、皆そこで待ってるわ。」
並んで歩き、広間のドアを開ける。
「皆〜〜、満流が生きて帰ってきたわよ〜〜☆」
「ただいま帰還しました〜?」
「おっ、お疲れ〜♪」
「無傷とはやるじゃないか。」
「天変地異の前触れかぁ?」
「ヌッ・・新入りか。」
ベルにマーモンにスクアーロ、それにどっかの戦闘民族の劣化版みたいな髪をした男がいた。
「皆改めて今日から宜しく〜、ところでそっちの人は? あっ、私は夜月満流だよ〜。」
ボスさんの威圧から開放された反動で一気に口調が砕けていたが気にしない。
「オレはレヴィ・ア・タンだ。 レヴィでいい。」
「レヴィね、よろしく〜」
「それでお前はどう言う扱いになったぁ。」
「隊では幹部扱いらしいですけど、素性は非公開らしいですぅ〜。」
「どういうことだい?」
「なんか私にやらせたい事があるみたいで、それまで秘密にしたいそうです。」
「随分変わってんな♪」
「そうですねよね〜。 それで明後日から任務で、詳しいことはス

クアーロに聞けって。」
「とりあえずクソボスに聞かなきゃなんねぇ事が増えたなぁ。　任務については明日伝える、まずは隊員服をルッスに作ってもらえぇ。」
「じゃあサイズ計らないとですね～。」
「それは大丈夫よ、見ればわかるから？　明日には出来るから楽しみにしててね～ん☆」
ルッスの発言にちょっと引いたのはどうやら私だけではないみたい。
「でもその前にあなたはお風呂に入ったほうがいいわね、忘れてるかもしれないけど返り血とかで結構見た目ボロボロよ？」
「あっ、そう言えば。」
「忘れてたのかぁ。」
「その姿でやけに堂々としてると思ってたけど。」
たしかに羽織ってる布とかも血が乾いて黒くなってるし、ほんの微かに臭う気もする。
「それじゃあ入らせてもらうね、場所はどこ～？」
「案内するわ、こっちよ。」
「は～い」
広間を出て風呂場に向かう。
「そう言えば着替えはあるの？」
「持ってるように見える？」
「ないわね～、じゃあ服もいくつか見繕わなきゃね。　明日になるから今日はとりあえずアタシの代えのシャツと短パンでいい？」
「いいよ～」

ルッスがドアの前で止まる、着いたみたい。

「ここよ、着替えは置いておくから。　あっ、それに髪を縛るものもいるわね。　その長い髪邪魔になるわよ？」

「慣れてるから大丈夫だけど、濡れると確かに邪魔かな～。　じゃあ適当にお願い。」

「了解よ、じゃあゆっくりするといいわ。　また後でね～ん」

手を振りながら去っていくルッス。

やけに足取りが軽いのはなぜだろうか。

「それじゃあゆっくりさせてもらいますか、ついさっきまで寝てた筈なのにもう疲れたよ～。」

第三話（後書き）

ＸＡＮＸＵＳの説明丁寧すぎじゃね？ｗｗｗｗｗ

書いたあとに気づいた、ウチのボスがこんなに親切なわけがない！

第四話（前書き）

ついに主人公の戦闘シーン！！

第四話

「いや～さっぱりした～～～？」

え？　入浴シーンはどこだって？
素人作者にサービスシーンなんて表現出来るとでも？

「えっと着替えは・・お、あった。」

脱いだ服が無くなって、代わりに着替えが置いてあった。
短パンと、おそらく新品のＹシャツだ。
服を来て、ゴムで髪を頭の後ろで一つに纏めて、前髪を分けて二つあったヘアピンでとめる。
ボサボサだった髪も、風呂で洗ってサラサラになり、纏めやすかった。

「おぉ・・視界が広～い。」

今迄バーコードみたいだった視界が開け、若干明るくなった。

「さてと、とりあえず広間に戻るかな～。　ソファふかふかだし、何か飲みたいし。」

部屋を出て広間に直行、すると途中でルッスの背中が見えた。

「あっ、おぉ～いルッス～、今上がったよ～、ゴムとヘアピンありがとうね～。」
「あら満流？　どういたしま・・・し・・・・て・・・」
「？」

私を見た瞬間に何故か固まったルッス。
顔が驚愕の色に染まっている、何か変なところでもあったのだろうか？

「どうしたの？　私どこか変？」
「い・・いえ・・・変じゃあないわ・・・・・・満流・・なのよね？」
「？？・・間違いなく満流だけど・・・ほんとにどうし」
「か・・・」
「か？」

突然俯いて肩を震わせ始めたルッス、さっきから不気味で仕方ない。

「可愛いわ～～～～～～！！！！」
「うわきゃあっ！？」

そんでいきなり抱きついてきた、この場合殴り飛ばしていいんだろうか。

「満流！」
「は・・はいっ！？」
「あなたこんなに可愛い顔してるのに隠してたの！？　もったいないじゃない！！」
「え？　いや、単純に髪を放置してたら自然に隠れただけで・・」
「こんないい素材してて手入れをしないなんて罪よ！！」
「え～～～～。」
「あっ、そうだわ！　皆にも見せましょ、きっと驚くわよ～。」
「なんかそう言われると見せたくなくなってくるんだけど・・・」
「問答無用よ！！　さっさといくわよ～」

腕をがっしりと掴んで私を連れて・・もとい引きずって行くルッス。
抵抗虚しく広間へと到着し、ドアを開け放つ。

「ちょっと皆集まって～！　すんごいの見れるわよ～☆」
「うっせぇぞカマがぁ！」
「また男の死体かい？」
「マジキメェ、つかここに持ってくんなよ。」
「違うわよ！　あら、レヴィはどうしたの？」
「あいつは任務だぁ。」
「そうなの、残念ね。　それじゃあご対面～～？」

そう言って私をズイっと前に出すルッス。
三人の視線が集中する。
最初はどこかウンザリしたような感じだったが、私を捉えた瞬間に驚愕したものになった。

「どう？　可愛いでしょ～。」
「ししっ、確かに、かなり可愛いじゃん♪」
「それは認めるけど、急にどうしたんだい？　もしかして女色に目覚めたのかい？」
「オカマでロリコンたぁ救いようがねぇなぁ。」

三者三様の言葉を言った後、ルッスに非難の目線が突き刺さる。
しかし本人はそれをものともせずに得意げに笑っている。

「うふふっ？　やっぱり皆わからないみたいね。　まぁ仕方ないわよね、こんなに違うんだもの。」
「う〝お〝ぉぉい！！　なにニヤニヤしてんだぁ！　かっさばくぞぉ！！」
「妙にイラつくね。」

「切り刻みたくなってきた♪」

ルッスの笑みが癪にさわったようで、ベルはナイフ、スクアーロが剣を構える。
マーモンは宙に浮いてる。
私も参加しようかなぁ。
ちなみに何でさっきから私が発言しないかと言うと、入る前にルッスに言われたから。

「やぁね、そんなに怒らないでよ。　そしてね、この子は満流よ？」
「「「・・・・はっ？」」」

再び視線が集まる。
先程の数倍の驚愕と、若干疑惑も混じってる気がする。
しかいこの三人は一日で何回「は？」って言ってるんだろう、まぁ私のせいなんだけど。

「なんの冗談だぁ。」
「冗談じゃないわよ、ねぇ満流？」
「やっと発言出来たよ～、ばらすの遅い。」
「ししっ、マジで満流の声だし♪」
「驚いたね。」

半ば見世物みたいになってきた私。
そろそろ眠くなってきたな～

「つうか何で姫は裸Ｙシャツなん？　マジエロいぜ♪」
「考えないようにしてたのに蒸し返さないでよ、ちゃんと短パン履いてるし。　というか姫ってなに？」
「超可愛いから姫、王子の俺にピッタリだろ？」

「自分で王子って・・・」
「ベルは本当に王族の血を引いてるんだよ。」
「マジか・・」

その後も小一時間くらい弄られていたが、夕飯の支度をしにルッスは厨房、スクアーロはボスさんと話があるとかで出ていき、その場はお開きとなった。
夕飯の時は、皆の三倍以上食らった私が、どこにそんなに入るんだと呆れられ、満腹になって眠くなった私は、先に休ませてもらった。
明日は初任務かぁ、何するんだろう？

記念（？）すべき初任務の日、朝食を食べ終えた私に

「はい満流、貴方の隊員服よ～ん？」

と言って渡してくるルッス。

裾は足の膝小僧がギリギリ隠れるくらいの長さで、大きなフードが付いている。

試しに被ってみると顔の大半が隠れ、外からは口元くらいしか見えないだろう（マーモンみたいな感じ）。

「随分フードがデカイね。」

「ボスからの命令よ、あとこれも任務の時は付けてね。」

「これは・・仮面？」

ルッスに渡されたのは顔全体を覆うタイプの仮面。

銀色に輝いていて、口の部分に三日月を九十度回転させたような模様が描かれ、ニッコリと笑っているように見える。

これで後ろから追いかけられたら相当な恐怖に駆られそう。

「満流は素性を隠さなきゃだめでしょう？　だから大きなフードと仮面で顔を見られないようにしなきゃ。　ちなみにその仮面、かなり頑丈な素材使ってるから銃弾食らってもへっちゃらよ？」

「なるほど、まぁ無駄に便利な装備貰えたと思えばいっか。」

「ししっ、やったじゃん姫。」

「それはそうと早く着替えて来たらどうだい？　もうすぐスクアーロが任務言い渡しに来ると思うよ。」

「わっ、もうそんな時間？　じゃあ早速着替えてくるね～。」

自室に戻って着替える。

昨日と同じような短パンに無地のTシャツ、黒のニーソに隊員支給のブーツ。
昨日のように髪はゴムで纏め、隊員服を着てフードを被り、仮面を付け、鏡の前に立ってみる。
超不気味だった。
全身黒づくめに顔だけ銀色でニッコリスマイル、怖っ！
しかしこれなら素性なんてバレないだろう、声も若干エコーが掛かって聞こえるし。
という訳で急いで広間に戻る、すると既にスクアーロが来ていた。

「お待たせ～、どうこれ？」
「バッチリよ！　とんでもなく不気味ね☆」
「確かにこれなら素性を隠すにはもってこいだなぁ」
「狙われる奴も相当怖いだろうね。」
「姫いかしてるじゃん♪」

概ね予想道理の答えが帰ってきた。
レヴィはまだ任務から戻ってきてないみたい。

「じゃあ早速任務の話すんぞぉ、今回の任務はあるファミリーの殲滅と要人の救出だぁ。」
「暗殺部隊なのに救出？」
「その要人はボンゴレの傘下ファミリーの幹部でなぁ、だが戦闘専門じゃねぇから捕まっちまったらしい。
厄介なのはその誘拐した側のファミリーの方が勢力がデカイせいで手出しが出来ねぇらしい、だから速やかに確実に救出するために俺たちにお鉢が廻ってきたってことだぁ。」

なるほどね～、傘下ファミリーの人達にとって余程失いたくない人材ってことか。

でもそうなると・・

「あの～、それって結構重要な任務じゃない？　新人の私にやらせていいの？　あっ、勿論ビビッたとか自信がないとそう言う意味じゃないよ？」

「心配すんなぁ、テメェなら問題ねぇって俺が言っといたぁ。」

ちょっ、なにハードル上げるようなことしちゃってんの！？

いや確かにできるけどね？

「それに保険としてベルとマーモンを同行させる、もし一人で対処出来ねぇようなら加勢してもらえ。」

「そういう事、よろしく姫♪」

「お手並み拝見させてもらうよ。」

「あぁうん、よろしくね。」

「分かったらさっさと行けぇ、表に隊員が車で待ってるからなぁ。」

「了解～、いってきま～す？」

「気を付けてね～ん」

ベルとマーモンと一緒に屋敷出て、すぐ目の前に止まってた車に乗り込む、入る際に隊員の人に礼をされた時はちょっとビックリした。

そういや私幹部になったんだな～

「ここ？」
「そうだよ。」
「ししっ、結構沢山いんじゃん♪」

車で二時間程揺られ、敵アジトの十キロ手前で降りて、そっから歩いてきた。
アジトが山の中にあるため、山道が地味にキツかった。

「それじゃあ早速行きますか。」
「そういや姫の武器ってなに？」
「たしかにまだ見てなかったね。」
「あぁそうだっけ？　これだよ～。」

ゴソゴソと服の内側に仕舞っておいたそれを取り出し、二人に見せる。

「・・・・それかい？」

「うん、これだよ。」
「マジで？」
「マジ、ていうか書類にも鎌だって書いた筈だけど？」
そう、私の武器は鎌だ、別段驚く程珍しい物じゃなくない？
「確かに鎌だけど・・・・・」
「なぁ姫。」
「うん？」
「それって・・・・・・・・農家の鎌だよな？」
「そうだけど？」
「「・・・・・・・・」」
完全にフリーズする二人。
そんなに農家の鎌が珍しいのかな？
「それはどこで手に入れたんだい？
「旅の途中で農家の家に停めてもらって、その時に使わなくなった道具を幾つか譲って貰った。」
「今迄それで殺ってたん？」
「そうだよ～？　でももうこれ一つしか残ってないけどね、後は全部壊れちゃった。」
まぁあんな錆だらけの状態で四ヶ月以上もったんだから上々だよね。
「それで大丈夫なのかい？」
「人の首切り飛ばすくらいなら余裕だよ？」
「まぁ姫ならやりそうだな♪」
「帰ったら満流の武器も用意しなきゃね。」
「じゃあ行くよ～、要人が殺されないように一気に走っていくから

ね。」
「了～解♪」
「気にせずに好きにやるといいよ。」
走り出す私達、マーモンはベルの横を飛んで付いてきている。
向かうは正門、つまりは正面突破？
「むっ、なんだお前ｒ・・」
「そこでとｍ・・・・」
声を掛けようとする門番達の首が飛び、言葉が不自然に途切れる。
数瞬後に切断面から血が吹き出し、体が倒れる音と首が落ちる音が後ろから聞こえてくる。
私達はそれに目も向けず、一瞬も止まることなく走る。
門から屋敷の入口に着く迄に八人に遭遇したが、銃を構える者、中に連絡を入れようとする者、例外なく行動を果たす前に首が飛んで即死する。
「ヒュウ～♪　やるじゃん姫。」
「スピードはかなりのものだね、少なくともスクアーロと争えるレベルだよ。」
二人から賞賛が送られるが私は返事はしなかった。
集中していると言うのもあるが、なにより首を狩る感触に高揚しているからだ。
皮を、肉を、骨を、一瞬で断ち切るあの瞬間。
今殺した彼らとて、ただの弱者ではなかっただろう。
人の命がちり紙のように消えていくマフィアの世界で今日まで生き抜き、沢山の戦いを経験した猛者だっていただろう。
それがこの瞬間、私の手によってあっさりと刈り取られた。

彼らが積み重ねてきたであろう努力も経験も知識も練習も、全ての時間の集大成である彼らの人生が終わったのだ。
たった六才の自分の手で、ああもあっさりと。
つまり彼らの数十年の人生は、私のような子供の人生六年分にも及ばない物だったということにほかならない。
そう思う度に感じる。

あぁ、弱者に生まれなくてよかった・・・・・と

自然と頬が緩む、口の端が釣りあがる。
今の自分は、顔に付けている仮面と大差ない笑みを浮かべているだろう。
屋敷の玄関で一旦止まり、中の気配を探る。
ホールに七人、奥に続く廊下に四人ほど、要人のことを考えるとまだ騒ぎにはしたくない。
どうしたものかと思案していると、近くに倒れている死体の内ポケットから便利な道具が見えたので拝借、ついでにナイフ二本と拳銃一丁も貰っとく。

「これ使うから二人は少し後で入ってきて。」
「ししっ、おっけ～～♪」
「ムッ、わかった。」

二人が頷いたのを見て、私はあえてドアを勢い良く開け、拝借したものを天井高く投げる。
全員が反射的にそれを目で追い、なんなのかを認識した瞬間、小さな破裂音と共に強烈な光が広間にいた全員の目を焼いた。
そう、いわゆる閃光弾、スタングレネードである。
せっかく近くにあったからには使わないと、無くても殺ることは出来たけど、個人的に無抵抗の人を狩るのが楽しいの？

「な、なんだこれｈ・・・」
「一体何ｇ・・・」
「侵入者ｄ・・・」

次々に発せられる怒号は途中でと切れ続け、光が収まった時には誰も喋らない。
ついさっきまで豪華に飾られていた広間は血の海になっていた。
ドアが再び開いてベルとマーモンが入ってくる。

「そう言えばさ、要人って何処にいるの？」
「さあ？　しらね♪」
「いや、さあって・・」
「どの道敵は皆殺しだからさして関係ないんだよ、ここのボスにでも聞けばいいんじゃないかい？」
「そうするか～」

方針が決まったところで（方針と呼べる程のものでもない気がするけど）、再び全力疾走。
目に捉えた敵をザックザックと鼻歌を口ずさみながら狩り進み、およそ八割を殺したところでようやく騒ぎになり始めた。
ちなみに途中で敵の一人に聞いたところ、要人は敵のボスの部屋にいるそうな。
手足をきり落としたら簡単に話してくれたよ？

「気づくの遅すぎだよね～。」
「姫の手際が良すぎんのが理由じゃね？」
「そうなの？」
「僕らは暗殺部隊と名乗ってはいるけど殆どは派手な虐殺ショーみたいなモノだからね、人目を避けて殺す機会は実はそれほどないん

だよ。」
「へぇ～。」
「ところで姫、さっきから何で鼻歌歌いながら殺ってんの？」
「あれ？　私気分が乗ると自然に出ちゃうんでだよね。」
「根っからの殺人鬼気質だね。」

話ながらも狩り続け、残すは要人がいる筈のボスの部屋だけになった。
中に二十人くらいの気配がある。

「じゃあ相手のボスに出会いと別れの挨拶しに行こっか？」
「姫ガンバ♪」
「さっさと終わらせよう。」

ドアを開き、中に入る。
部屋の中では豪華な家具が全て端に寄せられ、十八人が銃を此方に向けていた。
一番奥にボスらしき人間が立っており、その下には写真で見た要人がロープでぐるぐる巻きにされた状態で倒れ、敵のボスに足蹴にされている。

「く、来るんじゃねぇ！　それ以上近づいたらこいつをぶっ殺すぞ！！」

なんとも典型的な小物だ。
なんでこんな奴がマフィアのボスになれるんだろう？　ある意味神秘の領域だよ。
余計な話をする気はないので、残っていたナイフをボスの銃を持つ右手に投擲。
手の甲に見事に刺さり、悲鳴を上げながら銃を落とす。

全員の意識がそっちに向いた一瞬で私は要人のもとに走り、縛っているロープをひっ掴んで下の場所に移動する。
着いたら要人を開いていたドアの外に放り込んで敵に向き直る。

「さぁ、これで人質はなくなったぞ？　どうするのかな？」

素性秘匿のために声を低くして口調も変える。
どうせバレはしないだろうけど、まぁ念には念をってね。

「ひぃっ！　こ、殺せ！　撃ち殺せーーー！！！」

ボスの指令の下、一斉に銃弾の雨が放たれる。
しかし、その時すでに私は身を低くして横に跳び、一番近くにいた敵の側面に迫る。
鎌を右手に持ち、横薙に振って首を狩る。
そのまま前進して二人、三人と殺していき、残った敵が私の方に銃を向け、発泡するが、私は死体を盾にするように移動し、照準を定まらせないように複雑に動いて背後に回り込む。
単純な作業の繰り返し。
狩って、走って、近づいて、また狩る。
いつしか私はまた鼻歌を歌いながら笑っていた。

「～～♪～～～～？～♪～～？～～～～、ふふっ、あはははははっ！！」

私が歌えば歌う程、笑えば笑うほど、相手の顔が恐怖に歪む。
まるで反比例するように、可笑しくて仕方がない。
いつしか部屋の中で立っているのは私だけになっていた。
小物のボスも、醜く涙や鼻水を垂らしながら首が転がっていた。

「おつかれ～姫♪」
「中々見ものだったよ。」
「ありがと～、私も結構楽しかった？　それじゃあ帰ろっか。」
部屋を出て、助けた幹部の様子を見る。
気絶してるけど特に深い傷は無いので大丈夫みたい。
「で、どうするの？　これ持って行くの？」
「さっき連絡しておいたから屋敷の前に迎えが来るよ。」
「そっか～、またあの道歩くかと嫌だな～って思ってたし。」
その時突然パキンッと言う音、そして何かが床に落ちた音が響く。
「？　何今の音？」
「姫、それじゃね？」
「それ？」
「キミの手元と足元だよ。」
言われたとおりに見てみると。
「あっ。」
そこには見事に刃が根元部分から折れた鎌、そして床に落ちている折れた刃があった。
「ついに折れちゃったか～。」
「むしろよくそんなので今回もったね。」
「そこからしてスゲェよ姫は♪」
「まぁいっか、新しいの貰えるんでしょ？」
「ヴァリアーの幹部だからね、言えば相当の物が与えられる筈だよ。

」

「そっか～、楽しみだな～？」

それから十分程して迎えが到着し、私たちはアジトに帰った。

第四話（後書き）

今までより長くかけたー！

主人公まさかの農家の鎌で無双ｗｗｗｗｗ

ヴァリアーの歴史に新しい一ページが刻まれたｗｗｗｗｗｗｗ

ではまた次回

第五話（前書き）

緊急事態が発生しました。それは・・・・・・

お気に入り登録された！！（；゜Д゜）！

見た瞬間にきっかり十秒フリーズしましたｗｗｗ

まさか登録してもらえるとは夢にも思わず、ビックリです。

多少なりとも楽しんでくれてる人がいたようで何よりです♪

これからも頑張って行こうと思うので、何卒宜しくお願いしますｍ

（＿＿）ｍ

ではどうぞ。

第五話

美しい三日月が浮かぶ夜。
月明かりだけが光源である暗い山の中、一人の男が走っていた。

「はぁ、はっ・・はぁっ、はっはっはぁ！！　クソっ！！」

悪態をつきながらも必死の形相で走る三十代半ば程の男、質の良さそうなスーツを着てはいるが、長く走っていたせいで乱れ、表面の半分以上が血で赤く染まっている。
しかしこれは男のものではない。
つい数時間前まで男と共に酒を飲み、笑って騒いでいた部下達の血だ。
その全員が今はもういない。　生きているのはほぼ間違いなく男で最後だろう。

「はぁ、はぁっ、ちくしょう！　何で・・なんでアイツがこんなところに！！」

――首狩りが居るんだ！！――

男は恐怖のあまり思わず叫んだ。
自分と、自分の部下たちを襲った犯人が、次々と部下の首を切り飛ばした光景が、鮮明に頭に浮かび上がる。　鼻歌を歌いながら、本当に楽しそうな雰囲気を出しながら首を刈り取る小さな悪魔。
［首狩り］
今より半年程前から爆発的に有名になりつつある殺人鬼だ。
最初はただの一般人をひと目のつかない所でちまちまと殺すだけだったのだが、三ヶ月前から徐々に規模がデカくなっていき、一ヶ月

前には小さな集落を皆殺しにした。
そしてそれからは何故かマフィア関係の人間に狙いを絞り、そしてかなり頻繁に殺しを行なっている。
この一ヶ月だけで七つの弱小マフィアと、違法研究をしている四つの日陰マフィアが潰されている。
他のマフィアの幹部や要人といった個人レベルでさえ三桁を超えている。

「なんで俺たちがあんな化け物に狙われるんだ！　覚えがねぇぞ！」

確かに自分たちはマフィアだが、この世界では本当に平々凡々な部類だ。
潰された弱小ファミリーみたいに危険な思想や一般人への過激な暴力なんてしてないし、違法な研究なんて勿論やっていない。
勢力だって並みだし、どこかのファミリーと特別争ってもいない。
何か大きな事を企てているなんて事は以ての外だ。
俺らが狙われる理由なんて・・・・

『本当～にそうかなぁ～～？』

「っ！！！」

突然聞こえた声に思わず立ち止まり、懐から銃を取り出して周りを見回す。
しかし何処にも姿はなく、声だけが不気味に響いてくる。

「あ、当たり前だ！　俺達ゃあ何も・・・」

『そこまで自分のファミリーを信じてるんだね～？　でも過信しすぎたのが不運だったね～、自分の部下が何をしているかちゃんと把握しておかないから死ぬ羽目になったんだよ～？』

エコーがかかった、しかしこの状況ですら聴き惚れてしまいそうな綺麗な声色から、この悪魔が少女である事がわかる。
先程よりも声が近くから聞こえ、恐怖が一層増す。

「ど、どう言う意味だ！？」
『そのままんまの意味だって、貴方は何もしていなくても貴方の部下の人が色々やってたってこと～？』
「そんな馬鹿な！　俺の部下が・・・。」
『悪いけど今となってはそれはどうでもいいの、貴方達を潰せって言われた以上、私は殺すだけだから？』
「くっ！　この悪魔め！！」
『そうだよ～？　だ～か～ら～・・・』

額から落ちた汗が目に入りそうになる。
それを袖で拭い、再び前に視線を向けて・・・・

『バ～イバ～イ？』

目の前でニッコリと笑う銀色の笑顔を見たのを最後に、闇に堕ちた。

目の前の扉を開け私は広間に入る。

「ただいま～～・・・。」
「ししっ、おかえり～姫♪」
「随分お疲れね。」
「眠いよ～・・」

私はベルの向かいのソファにダイブする、フカフカ気持ちいい～～。

「だけどホント、満流は忙しいわよね～、アタシの倍近いんじゃないの？」
「ルッスは飯作ったりとかしてっから俺らに比べて少ねぇけど、それでも姫のは異常だよな～。」

ホントだよ！！　いくら私が素性バレてないから使いがってがいいからって扱き使いすぎ！！
入隊して一箇月で殺した人の数軽く千人超えたよ！？　個人の暗殺でさえ二百は殺ってるよ！！？
ちなみに私の姿を見た人は基本皆殺しにしているんだけど、初任務

の時に助けた人が、途中で少しだけ意識を取り戻して私の戦いを見たらしく、女であることは知られた。

ボスさんとスクアーロはその程度は全然許容範囲であるらしく、特に何も言わない。

だがその人を起点として私の噂は瞬く間に広まった。

曰く、「美しき歌声と共に命を冥府に送る魔女」だの、

曰く、「首を狩ることに至上の快楽を覚え、悦ぶ悪魔」だの色々。

そんな感じの噂が尾ひれはヒレついて行き、いつしか［首狩り魔］から［首狩り王女］にジョブチェンジしていた。

なんだよ［首狩り王女］って、ベルの［切り裂き王子］の二番煎じみたいじゃん。

ちなみにベルはこの通り名を聞いたとき、とってもご機嫌だった。

「ルッス～ご飯～・・」

「はいはい、今持ってきてあげるからねん☆」

広間を出ていくルッス、入れ違いにマーモンが入ってきた。

マーモンも任務帰りみたい。

「マーモンお帰り～。」

「ムッ、満流も帰ってきてたのかい。」

「今さっきね～、それよりちゅっとコッチに来て～。」

「・・・またかい？」

「いいじゃ～ん、減るもんじゃないし。」

「減るんだよ、色々と。」

「お～～ね～～が～～い～～。」

「・・・・・はぁ。」
溜息をついて渋々ソファに横になっている私に近づくマーモン。
私はそれをムギューっと抱きしめる。

「んん～～プニプニスベスベ～～～～癒される～～～？」
「僕は疲れるんだけど。」
「ししっ、そう言いながら毎回やらせてるよな♪　まんざらでもないんじゃね？」
「まさか、これはツケにしてやってるだけだよ。　いつか纏めて返してもらうよ。」
「照れない照れない？　ほっぺモチモチだ～。」

それからルッスが料理っを運んでくるまでマーモンをたっぷりと堪能し、いつもよりさらに倍の量のご飯を食らい、食後の紅茶を飲む。

「そう言えば満流、武器の調子はどうかしら？」
「バッチリだよ～、もう面白いくらいにサクサク殺れちゃう？」

初任務の後、帰って早速スクアーロに報告し、武器を作ってもらえる事になった。
報告したときに

〈んな武器使ってんじゃねぇ！！〉

と怒られた。
それから約一週間後に無事に完成し、ガンガン狩っている。
作ってる期間中は、ベルのナイフとかスクアーロの予備の剣とかを借りて殺してた。
基本的に何でも使えるし、ただ鎌での戦いに一番慣れているだけで。

ちなみに新しい武器は勿論鎌、全身が深い紺色で塗りつぶされ、棒の部分は私の一・三倍くらいの長さ。
そんで刃と棒の繋がっている部分には刃の角度を変える機構が付いており、九十度上に回せば簡易的な槍に、下に回せば斧みたいにもなる。
さらに棒の部分も、真ん中の所で二つに分割する事ができ、中に収納されている細く、しかしとても頑丈な鎖で繋がっている。

刃を下に回して棒を二つに折ればコンパクトになって持ち運びも楽だ、専用の小さなバックも貰えた。
しまいには刃の部分が着脱可能であり、根元に柄にあたる部分があって、剣としても使える。
まぁなんとも便利なモノを貰っちゃいました。
私でけこんないい武器作ってもらって本当にいいんだろうか？

「そう、よかったわ？　なにか不具合があったらすぐに言ってねん？」
「了～解、それじゃあお風呂入ってくるね～。」
「は～い。」
「そうだ、マーモンも一緒に入る？」
「断固拒否するよ。」
「ちぇ～～。」
「ししっ、じゃあ俺と入る？」
「いいよ～。」
「それはダメよ！」
「「なんで？」」
「問答無用！　満流、明日のご飯を抜きにされたくなかったら・・」
「じゃあねベル！！　あたし一人で入るからっ！！！！」

速攻で広間を出て風呂場に行く、ご飯に勝るものはない！！

風呂に入った後、そのまま寝ようと部屋に向かう。

「う〝お〝ぉい満流！」

「あ、スクアーロ。　どうしたの？」

振り返ると、スクアーロが早足で近づいてくる。

「お前に話すことがある、前にボスが言ってたお前の”使い道”のことだぁ。」

「あぁ、あの話かぁ～。　ってことは近いうち何かあるってこと？」

「詳しいことはボスの部屋で話す、ついてこぉい。」

そう言って踵をかえし、ズンズン歩いていくスクアーロ。

体格差的な問題で私は小走りになる。

とうとう来たかぁ～、一体なにやらされるんだろう？

「う〝お〝ぉい！　連れてきたぞぉ。」
「お邪魔しま～す。」

ボスさんの部屋に入り、机の前で立ち止まる。
ボスさんは相も変わらず不機嫌そうだ、いきなり死刑宣告されても全くおかしくない位に睨んでくる。

「来たか・・。」
「なんか私の使い道の件で話があるとか。」
「そうだ、二日後俺たちは大規模な侵略作戦を行う。　テメェには敵戦力の攪乱をやってもらう。」
「この一ヶ月でテメェの人気はうなぎ登りだからなぁ、攪乱にはもってこいってことだぁ。」

なるほど、それでこの一ヶ月あんな労働基準法ガン無視のシフトを消化させた訳なんだね。
しかし話を聞く限り総力戦っぽいな、ヴァリアーの総力を上げるような相手ってどんなんだろ？

「話はわかりました。　それで明後日の私たちの敵ってどこの組織

なんですか？」
「ボンゴレだぁ。」
「・・・・・・・・はい？」

おかしいな私の耳がおかしくなったんだろうか。
もう一回、今度は耳をよくかっぽじって聞いてみよう。

「すいません、もい一度言ってもらえます？」
「何度も言わせんじゃねぇ！　いいか、俺たちは！」

ふむふむ

「二日後に！」

ほぉほぉ

「ボンゴレを襲撃して制圧するんだぁ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・な～～ぜ～～～～

第五話（後書き）

前回に比べてすくないｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

ついに次回、ゆりかごに突入！！

主人公の武器も説明だけ出ましたね。

ゆりかごで存分に振り回してもらいましょう。

では（ｏ・・ｏ）／

第六話（前書き）

ゆりかご戦だ～！

日本までもうすぐだぜ！！

ではどうぞ～。

第六話

「ボンゴレの制圧、ですか～。」
「そうだぁ。」

まさかのクーデターとは、さすがのわたしもビックリだよ。
まぁ戦力的に作戦さえしっかり練れば問題ないだろうけどさ。

「それでさっきも言ったが、テメェの役目は陽動と撹乱だぁ。」
「具体的には？」
「当日、テメェにはボンゴレ本部を後方から襲撃してもらう。　噂の［首狩り王女］が襲ってくればそうとうの戦力がまわされる筈だぁ。」
「なるほど、たしかに。」

つまりはボンゴレの本部戦力を一人で相手しろと、信用してくれるのは嬉しいんだけど・・・・

「そして俺らは正面からアジトに入る、首狩り討伐の援軍としてなぁ。」
「おぉ～。」
「そっからは各自で散って敵を殲滅、その間にボスと俺が九代目を殺す。」
「二人掛かりならなんの心配もないですね～、了解で～す。」

しかしそうなると私の予想はあたりかな～？
やっぱりここは本人に直接聞いたほうがいっか。

「話は以上だぁ、明日は任務はねぇから体力を温存しとけぇ。」

「わかりました。　ところでボスと二人で話したい事があるんですがいいですか～？」
「好きにしろぉ。」

そう言って出ていくスクアーロ。
私とボスの二人だけ、そう言えばさっきからボス一言も話してなくない？
わざわざここで話した意味は・・・

「なんの用だ。」
「ちょっと質問があるだけですよ。　先に言っておきたいんですが、返答によって何か変化したりはしませんので、その上でお聞きします。」
「なんだ。」
「ボス・・・・・いえ。」

一呼吸置いて、真剣な目でボスさんを見る。
この質問はきっと、彼の奥深くに触れる事になるだろうから。

「ＸＡＮＡＵＳ・・・・あなたは九代目の息子じゃありませんよね？」
「っ！！」

初めて見るボスさんの驚愕の顔、だけど物珍しさに見ている事は出来ない。

「厳密に言えば。あなたは九代目と血は繋がってないですよね？」
「・・何故そう思う。」
「最初に疑問に思ったのは貴方が九代目の息子だと聞いた時からです。　ボンゴレの最強部隊を率い、尚且つ次期ボス候補達の中でも

圧倒的な支持を得ているにも関わらず、未だに貴方が十代目を継ぐと言う話が全くと言っていいほど出てこないのはどうしてだろう？
と思ったのが始まりでした。」

私は淡々と話続ける。
ボスも今回ばかりは静かに聞き続けている。

「その時はそこで大して考えずに終わったんですが、クーデターをおこすと聞いて合点がいきました。
このまま行けば普通に考えて貴方がボスで決まりな筈なのに、何故クーデターなんてする必要があるのか？
それはつまり何らかの理由で貴方が十代目を継げない場合しかない。
ならそれは何か？　他の候補者などの外的要因ならば秘密裏に処分すれば事足りる筈、なのにリスクを犯してまで反旗を翻すということは、十代目を継げない理由は貴方自信にある。」

「・・・・」

無言ではあるが、若干顔が歪んでいくように見える。
それは怒りでもあり、憎しみでもあり・・・・・・悔しさや悲しみにも見えた。

「ボンゴレを継ぐのに必要な絶対的なもの、そして後天的には絶対に手に入らないもの、それはすなわち
・・・・・・ボンゴレの血。」
「・・・・そうだ。」

無言だったボスさんが口を開く。
雰囲気がいつもより控えめになっているのは気のせいではないだろう、あくまでいつもよりだが。

「テメェの言うとおり、オレは老いぼれとは血が繋がってねぇ、十代目をあいつから継ぐ事はない。」
「そうですか。　何故九代目の養子に？」
「オレは下町で生まれただけのガキだったが、生まれながらに死ぬ気の炎を宿していた。　それを見て変な妄想浮かべやがった糞女が俺を老いぼれと会わせたんだ。」
「そえで九代目は貴方を引き取ったと。」
「そうだが少し違う。」
「というと？」
「あいつは俺を自分の本当の息子だと言って引き取った、ファミリーにも俺にも嘘をついてだ。」
「なるほど、つまり貴方は自分をボンゴレの直系だと思っていたのに、偶然それが違うと知ったんですね。」
「そうだ、だから俺はあの老いぼれを引きずり落とし、ボンゴレを手に入れる。　血統なんぞ知ったことか！」

思い出してたら再び怒りが湧いたらしく、声が荒々しくなっていく。そしたら私を視殺せんばかりの目で睨んできた。

「それでテメェはどうすんだ？　俺にボンゴレの血がないから抜けるか？」
「いえいえ～、先程も言いましたけど何にも変わりませんよ？　というか私にとってはボスにボンゴレの血が入っていようがいまいが全く関係ないですよ～。　何となく疑問に思ってたことを解消したかっただけですから、御陰様でスッキリしました？」

話が終わったので真剣な雰囲気を吹っ飛ばす。
シリアスシーンはいつまでも続きません？

「というかむしろ余計に協力したくなってきましたよ？　伝統のルールを踏み倒してまで十代目の座を狙うなんてカッコイイじゃないですか～、そんな伝統俺がぶっ壊す！！　みたいなぁ？　ボスならきっとできますよ。」

「・・・・・」

黙り込むボスさん、話も終わったし、退散するとしますか。

「それじゃあもう寝ますね～。　あ、それとですね・・」

ドアを開け、部屋を出る直前に振り返る。

「他の皆に知られても問題ないと思いますよ～？　私達はボスの部下で、ファミリーですから？」

部屋を出て廊下を歩く。

後ろの部屋、ドアが閉まる直前に

「うっせぇ・・ドカスが。」

と小さく聞こえたような気がした。

あっ！　という間に二日後。
私は現在、ボンゴレ本部後方の森の中に隠れている。　勿論フル装備で。
これから世界最大のマフィアの本隊と殺り合うかと思うと・・・・・・

「ワクワクが止まらない！！？」

作戦聞いた時はどんな無茶振りだよって思ったけど、やっぱり本番になると楽しみだと言う感情の方が勝ってくる。
そう思うと九代目とも戦ってみたいなぁ、ボンゴレのボスなんだから強いんだろうなぁ。
写真で見たときはそこらに居そうな優しいお爺ちゃんみたいだったけど、見た目と強さは全く関係ないしね。
ウチのボスに限っては見た目通りだけども。
などと思っていると耳に付けた通信器から連絡が入る。

≪う〝お〝おぉい！！　配置についたかぁ！！≫
『着きましたよぉ、あとうるさいので少し静かに喋ってくださ～い』
≪そろそろ時間だぁ！　いつでも始めろぉ、何度も言うが思いっきり暴れろぉ！！≫
『こっちの要望ナチュラルに無視ですかぁ、わかりました、これより作戦を開始しまぁす。』

通信を終了し、背中のバッグから武器を取り出す。
棒を連結して刃を垂直の位置に回して鎌の形にする。
ゆっくりとアジトの塀の所まで歩き、手前で止まる。

『今回は陽動が目的だから派手に騒がしく殺さないとねぇ～、てい

やぁっ？」

掛け声と共に塀を切り刻む、派手な音と共に崩れていく塀。
土煙が晴れた向こうは当然アジトである建物が見え、恐らく巡回警備をしていたであろう二人の男が「何事だ！！」と騒いでいる。
私の姿を見た瞬間、銃を構えた。

「貴様何者だ！　ここが何処だか分かっているのか！？」
『勿論わかってますよ～？　マフィアの世界じゃ知らぬ者のないボンゴレの本部ですよね～？』
「分かっててやっているのか！？　何が目的だ！！」
『九代目を殺しに来ました～？』
「なっ！？　う、撃てぇ！」

二人が撃ってくるが鎌の刃で防ぐ、体が小さい分とっても楽だ。
やがて弾が尽き、マガジンを交換しようとするが、その隙に接近して両手足を一気に切断する。
銃の音と叫び声がこれだけ響けばイヤでも集まってくるだろう。

「ぐあああああああっ！！」
『ゴメンね～、普段ならさっさと首を狩っているんだけど今回は事情があるから？』
「ぐううっ、首・・を？　ま、まさか・・お前は！？」
『そうだよ～、だからその通信器貸してもらうね？』

一人が持っていた通信器を見て、いいことを思いつき、回線を開いて倒れている人の口元まで近づける。

「な、なに・・を・・」
『ほらぁ、早く緊急事態を報告しないと。　さっきの音で数人くら

い来るだろうけど、それじゃあ君たちの二の舞だよぉ？　事態を正確に伝えるのが見回りの仕事じゃないかなぁ？』
「くっ・・・・こちら西側・・塀内第三巡回地点、［首狩り王女］が現れた！！　繰り返す・・［首狩り王女］が・・ぎゃあああぁぁぁっ！！！！」

役目を終えた男を、なるべく痛みを伴うように殺す。
これで演出はバッチリだね？

『お役目ご苦労様～、さってと、たっくさん来てる来てる？』

目で確認出来るだけでも五十人は来てる、あとからまだまだ来るだろう。
一人一人が今迄の敵とは比較にならない猛者だと言うことが一目でわかる。
まだ戦ってもいないのに早速興奮してきた。

『こっからは好きに暴れ放題？　久々に本気出しちゃうよ～～？』

鎌を構え、真正面から飛び込んだ。

第六話（後書き）

ウチのＸＡＮＸＵＳってホントよく喋るよな～（　。ー。）（　。ー。）

次回、無双と敗北、そして物語は日本へ！！

第七話（前書き）

更新するの忘れてました、スイマセン（汗

誤字の指摘がありましたので、より一層注意して書いていくよう頑張ります。

皆さんも誤字脱字を見つけ、読みづらいと感じましたら遠慮なく言ってください。

そしてご迷惑でなければ場所も教えてくれると幸いです。

ではどうぞ。

第七話

マフィア界における最大勢力、その総本山であるボンゴレ本部。
多くのマフィアから畏敬の念を向けられるその場所は、今や地獄と化していた。
各所で響く銃声や爆音、歴戦の猛者達の断末魔の悲鳴。

「な、何だ！？　いきなり体に傷が・・・ぐわあああぁぁ！！」
「ししっ、バイビー♪」

ある場所では己の体に起こった事も理解出来ずに引き裂かれ・・

「ば、化け物だぁ！　銃が効かな・・うがぁぁ！！」
「それは君自身の想像力の産物だよ。」

ある場所では異形の怪物に成す術もなく捻り潰され・・

「レヴィ・ポルタ！！」
「ぎゃあああああぁぁぁぁ！！」
「ボスの邪魔は何者にもさせん。」

またある場所では晴天の空で起こるはずのない雷光に身を焼かれ・・

「あら、中々いい体してるじゃな～い？　でも残念、私のお気に入りになるにはもう少し逞しくなるか、満流みたいに可愛くならなきゃダメよ？」
「がぁぁぁぁぁぁ！！」

ある場所では一方的に嬲り殺しにされた。

たった数人の侵攻によってその戦力を削り落とされるボンゴレ。
ボンゴレの戦力をよく知る者ならば誰もが思うだろう、これは何の悪夢だ、と。
激化していく戦場、その中心たる場所で・・

「う〝お〝ぉぉい！！　さっさと死ねぇ！！」
「かっ消えろ老いぼれがぁ！！」
「くっ！！」

両陣営の大将が対峙していた。

三人とも既に全身傷だらけの満身創痍、しかし溢れんばかりの闘志と殺気は衰えることなくその場に渦巻いている。
しかし九代目は顔に迷いを浮かべており、防戦一方だ。
スクアーロが側面から斬りかかり、それを手に持つロッド状の武器で防ぎ、即座に押し返して後方に飛ばす、すると右側から凄まじい威力の炎が放たれ、九代目を焼き殺そうと迫ってくる。
しかし素早く身を低くし、前方に防御の炎を集中してやり過ごす。

炎が晴れると目の前にＸＡＮＮＸＵＳが迫っており、至近距離で先ほど以上の炎を放とうとするが、九代目がロッドでＸＡＮＸＵＳの腕を払って射線を横にズラす。
直後に撃たれた炎はあらぬ方に飛んで行き、部屋の壁を跡形もなく吹き飛ばす。

両者が一旦距離を置いて対峙する、スクアーロは先程、飛ばされて柱に身を強く打ちつけてしまい、ダメージで動けずにいた。

「まさか貴様がここまで出来るとは思わなかったぞ、老いぼれが・・

。」

「家光はお前を殺すなと言ってくれた。　だがこれだけの犠牲を出したお前を、ボスとして見過ごすわけにはいかん。」

九代目の顔にはさっきまでの迷いは無く、何かの決意が見えた。

「せめてワシの手で・・。」

「やっと本性を現したなジジィ！　これでお前の念願が叶うわけだ！！」

「何故だ、なぜお前は・・・。」

「うるせぇ！　それはテメェが一番よく知ってるはずだ！！」

怒りと共に、ＸＡＮＸＵＳの手の炎が激しく燃え上がる。

「わかったらかっ消えろ！！」

「みんなすまん、やはり私には・・。」

そう言う九代目の炎が大きくなったり小さくなったりと不規則に脈打つ。

次の瞬間、突然光が弾け、ＸＡＮＸＹＳ体が凍っていく。

「な、なんだ！　この技は！？　ぐわあぁぁぁぁぁ！！」

成す術も無く凍っていくＸＡＮＸＵＳ。

氷が首まで達し、全身を覆う瞬間、彼の脳裏にある少女の姿が浮かぶ。

秘密を知っても変わらず、いやむしろ今迄以上に馴れ馴れしい笑顔を向けてきた少女。

「ちくしょおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！

！」

鼓膜が破れるかと思う程の音量で叫ぶＸＡＮＸＵＳ、それは九代目への憎悪の叫びか、それとも・・

らしくもない事を考えた自分への怒りの叫びか・・・・。

血飛沫が上がる音が辺りに響く。
周りは既に土の色を見つけるのが困難な程に血の海に染まっており、その中心には不気味に笑う銀色の仮面を付けた小柄な、というよりも小さな子供。

『あ～～、た～のし～・・？』

エコーの掛かった少女の声。
しかしそれはおぞましい程の恍惚とした声音であり、この少女が今どれだけの悦楽を感じているかがハッキリと感じ取れる。
手にした鎌は血でベットリと汚れ、周りには死体の山、さらに少女は小さく鼻歌を口ずさみ、とても楽しげだ。

『もう完全にキャラぶっ壊れ状態だな～～、もうそろそろアジトの中入ろうかな？　下っ端掃除も満足したし、いい加減強い個人と殺りたいな～～～？』

そう言いつつゆっくりと歩く少女だが、彼女の歩みを邪魔する者はここにはもういない。
少女はアジトの建物の周りを一週し、外にいる者たちを皆殺しにしたからだ。
正面の大きな玄関を開き、堂々と建物の中に入る、外と同じくあちこちから血の臭いがする。
そらはつまり仲間が上手くやっている証。

『さ～て、いっそ九代目を殺すの混ぜてもらおうかな？』
「残念ながらそれはさせん。」
『おや？』
「オメェはここまでだガキ。」

少女の前に立ち塞がったのは二人の男。
一人は三十代半ば位で、メッシュの男。
もう一人は見た目は初老でありながらも、今迄の下っ端達とは次元の違う威厳を放つ人物だった。
立ち振る舞いからして高い技量を持つことが伺える二人。
しかし少女はその二人の顔を見た瞬間、仮面の内で珍しく驚きの顔を、そしてその次にはとてつもない歓喜の表情を浮かべた。

『へ〜、驚きました。　事前の情報では貴方達は今日ここには居ない筈なんですが。』
「そうそう自分たちの行動をさらけ出すような事はしないさ、それが役目でもある。」
「俺たちを甘く見てんじゃねぇ。」
『いえいえ、甘く見てなんてませんよぉ？　むしろ嬉しいです、ここにいるだけでもサプライズなのに二人共独占出来るんですから〜？』
「［首狩り王女］にそこまで言ってもらえるなんて光栄だな。」
「くだらねぇ事言ってんじゃんねぇ、さっさと潰して他の援護行くぞ。」

それぞれが構え、張り詰めた空気が一瞬でばを満たす。

『それじゃあ遠慮なく行きますよ〜〜〜？』

駆け出す［首狩り王女］。

『ボンゴレ？世の雷と嵐の守護者さん？』

第七話（後書き）

おい、ゆりかご終わってねぇじゃん！　と思った方、ごめんなさい
m（＿）m

一話で書こうと思っていたんですが、予想以上に長くなりそうだったんで分割しました。

九代目の守護者出しちゃった！

満流の見せ場作りたかったばっかりにwwww

次回こそ日本に行ってみせます！！

第八話（前書き）

ゆりかご終了。

第八話

突然だが、今私は凄く興奮している、それはもうもの凄く。
何故か？　それは、やっっっっっっと！　大物と殺り合う事が出来るから！！
守護者だよ守護者、ボンゴレの中でも別格中の別格。
唯一ヴァリアーと渡り合えるかもしれない個人戦力と言っても過言じゃないよ。
しかもそれが一度に二人も！！
こらはもう日頃の行いの賜物としか思えないね！
特にここ一ヶ月の働きっぷりは尋常じゃなかったからね、きっと神様がご褒美をくれたに違いないよ？
何でここに居るのか気にはなるけど些末なことだ。
今は目の前の極上品を味わい尽くす、それしかない。

『それじゃあ行きますよ～、ボンゴレ？世の嵐と雷の守護者さん？』
「ああ、来な！」
「身の程を教えてやるぜ！」
『開始早々の死亡フラグご苦労さまで～す。』

私は鎌を振りかぶって駆ける。
嵐と雷、たしかコヨーテさんとガナッシュさんだっけ？
それぞれ銃を構えたり素手のまま構えたり、ガナッシュさんは銃を取り出すなり二発発射、銃口の向きと視線からして、弾は正確に私の心臓と右足首を狙っており、普通ならここでそのまま撃たれるか、または心臓守って利き足をやられるかしかないが、私は左に跳ぶ、しかしそうすれば空中にいる所を撃たれる、それでも跳ぶ。
案の定、ガナッシュさんは空中の私を撃とうとするが、私は跳ぶときに体が宙で一回転するように跳び、その途中で先程私の心臓を狙

って撃たれた弾を、刃の腹の部分で、遠心力追加で打ち返した。
弾はガナッシュさんの鳩尾に向かって飛び、彼はギリギリ避けたが、脇腹に少し深く掠ったらしく、一瞬だけ顔を歪める。　この間約１．３秒。
その隙に床に着地、接近して懐に入ろうと

「こっちだガキ。」
『おぉ！？』

した時に視界の右横にコヨーテさんが出現、次の瞬間には殴り飛ばされていた。
右手で防いだけど、折れるかと思った。
地面に鎌を突き立てて勢いを殺す。
ガナッシュさんもとっくに立て直していて、位置的にも振り出しに戻った。

「銃弾を打ち返すとは、噂通りの化け物だな。」
「まったくだ、その細腕でどうやって受けきったんだか。」
『お褒めに預かり光栄で～す？』

始まってから一分も経っていない、なのにこの高揚感、体のそこから笑いが込み上げて来るようだ。
だから少し力を使おう、出来ることなら何時間でも殺り合っていたいけど、それはさすがに自重。
ならせめてある程度全力で潰したい。

『そろそろボスの所に行きたいので死んでくださいね～。』

言いながら仕込みを済ます、特に体を動かす事がないのでバレにく

いのがこの力の長所だね。

「まだまだ始まったばかりだろう。」

「死ぬのはテメェだガキ。」

何を言っているんだって感じに言葉を返してくる二人、余裕な顔した人を絶望の底に叩き落とした時の顔ってスッゴイそそるよね～～？

想像しただけでゾクゾクしてきた。

仕込みが済んだ直後に疾走、真正面から突っ込んだ私に、二人は一瞬だけ目を見開いた。

しかしすぐにコヨーテさんは迎え撃つための構えをとり、ガナッシュさんは体の要所を正確に狙って撃ってくる。

銃弾を防ぎながらコヨーテさんの方に突撃、間合いに入る直前に仕込みを発動させる。

「ヤケになったか？　この距離で俺と闘ろうってのか。」

コヨーテさんは拳を私の顔面目掛けてとんでくる、しかし私は避けようともせずに突っ込む。

拳が私の顔面に

「なっ！？」

当たる事はなかった。

しかし私は避けていない、単純に届かなかっただけ。

私はそのまま懐に入り、鎌を思いっきり右斜めに切り上げる、肉が斬り裂かれる音が静かに響いた。

「ぐうぅっ！！」

「コヨーテ！！」

左腕を切り飛ばされ、さすがに呻くコヨーテさん。
ガナッシュさんが驚いてるうちに私は鎌の刃を外してブーメランの要領で彼に投げる。
投げた刃はガナッシュさんの右足を深く切り裂き、彼が痛みで硬直している間にUターンし、持っていた銃を真っ二つにして私の手に戻った。
ちなみに刃が戻ってくる間にコヨーテさんの右足を棒で思いっきり殴って折っておいた。
崩れ落ちる二人、しかし目はずっと私から離さずにいる。

『いや～大成功？　ぶっつけ本番だったから成功するか分かんなかったけど結果オーライだね。』
「テメェ、何しやがった。」
「何故、コヨーテの拳が・・・。」
『あぁ、あれですか～？　簡単な話ですよ～、蜃気楼と似たようなトリックです～。』

私がやったのは単純な錯覚の誘発だ、私と二人の間の床に火種を設置し、それを一気に発火、つまりは光の屈折をちょびっとだけ変えて二人の距離感を狂わせるだけ。
コヨーテさんはタイミングよく拳を出したつもりでも、実際には早すぎて私の顔に届かなかった。

『とまぁ蓋を開ければなんてことのない手品みたいなモンですよ？』
「火種だと？　そんなもん一体どうやって・・・」
『それは残念ながら企業機密です～、というかそろそろゲームオーバーにしますよ～～。』
「くっ！」

刃を付け直し、振りかぶる私を見て、顔を歪める二人、まずは嵐からご退場願いましょうか～？

『それではさような・・・っ！？』

突如感じた力に、手を止める。

『これは・・』

感じる場所は方向からしてボスとスクアーロのいる所、何やら嫌な予感がしてきた。
相手はたとえ老人でもボンゴレの長なのだ、今更だが何が起こるか解らない。
それに、聞き間違いかもしれないが・・・・・・

ボスの叫びが聞こえたような・・・・・・。

『急用が出来ました、さよならです？』
「「な！？」」

驚く二人に目もくれずに走る、嫌な予感は増すばかり。
というよりもそれは、ほぼ確信に変わっていた。
たどり着いた扉を蹴破り、中に入る。

『！！』
「はぁ、はぁ、満流かぁ。　わ・・りぃ・・・。」
私を見て謝る傷だらけのスクアーロ、そして、全身氷漬けにされたボスの姿。
『負けたん・・ですねぇ。』
こうして、ヴァリアーのクーデターは失敗に終わった。

クーデターの失敗から二週間が経った。
ボスは氷漬けのまま幽閉され、ヴァリアーは無期限の謹慎処分。
あまりの過剰な温情措置に周りから猛反発が起こったらしいが、九代目が全く譲らなかったらしい。
私の事については、あくまでヴァリアーとして任務をこなしていただけと言う事で、特に素性などについては言及されなかった。
これにも九代目が関与しているみたい、なんのつもりなのやら。

そんでもって今私が何をしているかと言えば・・・・・・・

「日本人よ！　私は帰ってきた！！」

日本にいます？
話が飛びすぎ？　なら簡潔に話すと・・・
一週間で謹慎生活に飽きた。
そうだ、海外に行こう。
そう言えば何だかんだで顔とかバレてないし、抜け出せんじゃん！
皆に話す。
そう言えば飛行機とかどうやって乗るの？　と聞かれる。
え？　普通に貨物室に忍び込むだけだよ？　と答える。
一日で準備する。
外ではヒッチハイクなどで空港へ。
適当に止まっていた荷物を運ぶ車に乗る。
着いた飛行機の貨物室に侵入する。　ちなみにこの飛行機がどこ行きかは知らない？
それからスヤスヤ眠ることウン時間。

「まさか日本に戻ってくるとは・・・。」

まぁとにかく行き先を決めよう。
ネットで検索、自作パソだぜ！
ヴァリアーのアジトで、無駄に高い部品を無駄にふんだんに使って無駄に高性能に仕上げた。
日本中の市町村の名前が画面上にズラッと並ぶ、目を瞑って適当な所でクリック。
目を開けるとそこに映った街の名は

「並盛町ね、どんな所かな～？」

早速道なりを調べ、意気揚々と歩き出す。

私たちの冒険は、まだまだ続くぜ！！

第八話（後書き）

ガナッシュとコヨーテの戦い方知らないんで、とりあえず勝手に決めちゃいましたｗｗｗｗ

コヨーテの左義手のフラグ回収してしまった・・・・・・まぁ原作じゃ死んでるからいいよねｗｗｗｗ

錯覚の件ですが、作者自信あんまり原理をよく覚えてませんｗｗｗこんなの出来なくね？　と思った方もいるかと思いますが、ご容赦ください。

最後の方がちょっと手抜きだったかも（汗

さて、とりあえず一段落ついたので、今更ではありますが、ここまでの感想・アドバイス等お待ちしております。

罵詈荘厳になってしまいそうな時は、極力オブラートに包んでくださいｗｗｗｗ

ではまた

第九話（前書き）

ついに日常編（？）に突入！！

第九話

「夜月満流です。　趣味はネットサーフィンです。　好きな食べ物はラムの香草焼きです。　特技は手刀で人を気絶させられることです。　宜しくお願いしまーす？」

並盛に来て早一ヶ月半。
なんと今、私は小学校に入学しています！
いや大変でしたよ。　なんせ親がくたばってるもんだから家とか入学手続きとかどないせぇっちゅうんじゃい、って感じだったけど、パソでちょっと不動産やら学校やらの記録をいじって、ちゃんとお金は支払って無事解決。
家具とか教科書類とか揃えるのに二週間もかかるし、子供って不便だなぁとしみじみ思った。
そんで今はクラスで自己紹介の時間。
皆が無邪気に精一杯のアピールをしている所。
いいよねぇ、見ていて微笑ましい。　幼さとか元気とか無垢な笑顔とか。
このクラスで、というよりこの学校で唯一私だけがドロドロのグチョグチョのニチョニチョな人生送ってるんだろうなぁ？

この子たちも二十年後には意地汚い大人たちのネチョネチョの世界に触れて穢れていくんだね～。
あぁ、時間の流れとはなんと悲しきかな。
こんなにも純粋無垢な天使達をウンコ臭いクソ野郎共に変えてしまうなんて（笑

「とっても元気があってよく出来ました、じゃあ次の子ね。」

私の自己紹介を背伸びしたがりな子供の冗談と受け取った担任は普通に進行を続ける。
まぁ予想してたから言ったんだけどね～。

やがて自己紹介が終わり、担任が簡単な説明や注意をした後、初日なので今日は解散となった。
しかし子供達は一人でも多く友達を作るべく、周りの人に声を掛けていて、一向に帰る気配はない。
担任がその光景を微笑ましく見て、静かに教室を出ていった。
さて、私も誰かに声をかけようかな～？　と思い、周りをざっと見る。
しかし殆どの子は話相手を見つけ、改めて名前を教え合い、雑談に入り始めていた。
どうやら出遅れたらしい、そう思った矢先、教室の真ん中の列、前から三番目に座っている男の子（因みに私は窓際の列、後ろから二番目だ）が、誰とも話さずに俯いているの発見。

時々近くの会話に混ざろうと声をかけようとするが、踏み出せ入れずにいるみたい。
なるほど、クラスに一人はいる根暗っ子だね、と言いつつ私は学校生活初めてなんだけども、そんな事は気にしない。
何となくあの子と友達になりたいな～なんて思い、席を立って近づいていく。
その途中で何故か何人かの男の子に声をかけられたが、やんわりと受け流してその子の所へ辿り着く。

「ねぇ、君？」
「えっ！？　・・・あの・・・・・・ボク？」

声をかけた瞬間すんごい　ビクッ！　っとなって、見てるこっちが

罪悪感に駆られそうな程に怯えた様子で言葉を返してくるツンツン頭の子。

「そうそう、私は夜月満流だよ。　君は？」
「えと・・・さ・・・・沢田・・・・・・・綱吉・・・・。」

今にも泣きそうな顔でこちらを見てくる。
というか既に目が若干潤んでるんですけど。

「うん、綱吉君ね？　私の事は満流でいいよ？」
「う・・うん、み・・・満流・・・・・ちゃん。」
「そんなに怖がらなくても、別に虐めたりしないよ～？」
「ご・・ゴメンね！　一人ぼっちで・・怖くて・・・。」

ヤッヴァイ、ダム決壊寸前だよ。
これじゃあ入学早々いじめっ子の称号が付いちゃうじゃないか！

「そ、そうなんだぁ～！　じゃあもう怖くないよ？　私が友達第一号だもんね！！」
「いいの？」
「もっちろん！　じゃああれだ！　友達の証として、今からツナ君と呼ぼう！　友達にあだ名な付き物だよ？」
「友・・だち、じ・・・じゃあ！」
「うん？」
「僕はえっと・・・みーちゃんって・・・よんでいい？」
「おぉ！　みーちゃん！！　全然オッケェだよ～？」

私が笑って了承すると、ツナ君も笑顔になった。
こうして私は、始めて友達と言うのを手に入れた。

ツナ君と友達になって四日が経ち、今日はツナ君の家に遊びに来た。何でも親に友達が出来たと言ったら、早速遊びに来させなさいと言われたようで。

「ただいまー！。」

「お邪魔しま～す？」

二人で元気よく挨拶、すぐさま奥から若くて綺麗な女性が出てきた。

「お帰りなさいツッ君。　あらいらっしゃい、あなたがツッ君のお友達？」

「はい、夜月満流です？　初めまして。」

「礼儀正しいわね～、この子の母の奈々です。　ツッ君と仲良くしてあげてね？」

「もちろんで～す。」

お母さんだったのか、ちょっと年の離れたお姉さんだと思った。

「おっ、その子がツナの友達か～。　これまた将来有望なカワイ子ちゃん連れて来たな～。」

今度は無精髭を生やした男の人、恐らくツナ君の父親っぽい人が現れる。

「満流ちゃんって言うんですって。　ホントに可愛いわよね～、ウチのツッ君も隅に置けないわね～。」

「まったくだ。　まさかこんなに早く未来のお嫁さんを連れて来るとは、我が息子ながら恐れ入ったな。」

「お、お母さんお父さんやめてよ！！」

ツナ君が顔を真っ赤にして叫ぶ。

細かくは分からなくとも、お嫁さんの単語でなんとなく理解出来たのだろう。

ツナ君の様子を見て二人が笑い、ツナ君がそれを見てまた怒鳴る。

果てしなく微笑ましい光景に、私も声を出して笑う。

「み、みーちゃんまで～！」

「ふふっ・・ご、ごめんツナく・・ふふっ、あはははは！」

その場が笑いで包まれ、その中で一人涙目で怒鳴るツナ君。

「おぉ、なにやら楽しそうだな。」

「あ！　お爺ちゃん！。」

突然現れたもう一人の人物、ツナ君がその人に気づいた途端、嬉しそうに駆け寄り、その人も近づくツナ君を抱き上げ、優しそうな笑顔を向ける。

しかし、私はその老人の顔を見て、体が凍りついた。

幸いにも、老人は意識をツナ君に向けており、両親も同じくだった為、私の異変には気付かれていない。
その間に何とか外面だけは落ち着きを取り戻し、しかし頭の奥では困惑が残っている。
仕方ないだろう、だって

「お爺ちゃん、ボクの友達連れてきたよ！」
「おぉそうか、どれどれ。」

私の目の前に

「初めまして、満流ちゃんだったね？　私はツナ君のお爺ちゃんでね、昨日からこのお家にしばらく住んでいるんだよ。」

ボンゴレ？世がいるんだから。

第九話（後書き）

感想お待ちしてま～す（^　|　^）／~~

第十話（前書き）

十話まで来ちゃったよ。

どうせ二・三話程度で飽きて終わると思ってたのにｗｗｗｗｗｗ

ここまで来たからには突っ走るぜ！！（終了フラグｗｗ）

ではどうぞ。

第十話

衝撃の再開（？）からさらに四日。
今日もツナ君の家に遊びに来た。

「お邪魔しまーす？」
「おぉ、満流ちゃんか、いらっしゃい。」

笑顔で迎えてくれたのはボンゴレ？世。
あの後何とか平常心で話をして、その間に頭の中で何故九代目がここに居るのかと言う事について考えたが、結構すんなりと答えがでた。
そう言えば前にボス以外の後継者候補の話を聞いた時に、日本人が一人だけいたのを思い出したのだ。
他の人達と違ってまだまだ子供、しかも一般家庭で過ごしていると聞いて、その時は興味が無くてすぐに忘れていたが、今思い返せばその子の名前が沢田綱吉だった。

だけど、最初こそ驚いたものの、しかしだからと言って別にどうこう変わりはしない。
もう友達になった訳だし、そもそもツナ君がマフィアとか無いでしょ。
出会ってからまだ一週間だけど、ツナ君の能力の低さはもう常軌を逸したものだった。
体育の時間では毎週二回は転び、バトンは受け取るどころか弾いてどっかに飛んでいったり。
勉強では１＋２＋３を３２１と答えたり、カタカナの練習の時間ではリンゴをウンコと書いたり。

給食の時間では時分の分を貰って席に戻るとき、何もないのにまるでバナナでもあったのかと言う位に見事にすっ転んで、中身がピンポイントで頭に降り注いだり、。
そんなこんなで一日五回以上は大泣きして、意地の悪い奴らから付けられた呼び名がダメツナ。

いくらまだ小学生だからと言ってもこれは酷いよ。
これがボンゴレのボスになるとか、サマージャンボ五回連続一等賞当てるくらいの偉業だと思う。
という訳で悶々とした疑問は晴れ、いつもどおりに過ごそうと結論した。
九代目には何だかんだで素性知られてないし、問題なし。
むしろ今ではすっかり気に入られ、私もツナ君みたいにお爺ちゃんと読んでいる。

「みーちゃん、いらっしゃい！」
「ツナ君、遊ぼ～。」
「ほっほっほ、二人は本当に仲がいいのぅ。」

二人で奥に走る、それを笑顔で見送る九代目。
いや～、正直子供に混じって生活するのもどうなんだろうって思ってたけど、やってみると案外楽しいもんだね～。
え？　人を殺しておいて云々？
んなもん知ったこっちゃないね？
たかが六才の小娘に殺られる程度の弱者の癖にマフィアなんかになるからいけないんだよ、自業自得ってやつだね～。
そんな奴らの事で何で一々私が行動に制限付ける必要があるの？
そっちの方がイミフだよ。

「お！　ツナよ～、今日も嫁さん連れ込んで愛を育んでるのか？

さすが俺の息子！！」
「お父さ～ん！！」

ツナ君がお父さんにからかわれ、真っ赤になって怒鳴る、これももはや通例になってる。
私と奈々さんがその様子を傍で眺めるのもいつも通り。
学校の方も、男女共に友達が多く出来て、勉強については言うに及ばず。
まさに順風満帆な学校生活と言える。
ツナ君も頑張ってはいるが、ダメツナが定着し、イジメとまでは行かないけど、からかわれキャラになっている。

あぁそ言えば、あんまり関係ないけど現在私はヴァリアーにいた頃と違い、髪は首の後ろで二箇所に纏め、前髪は顔がちゃんと見えるぐらいまで切った。
さすがに貞子みたいに顔見えなかったら怖がられるしね。

「みーちゃん！　かくれんぼしよー。」
「お～～！」

声をかけられ、ツナ君の元に駆けていく私。
平和だね～～～～～～～。

な～んて思っていた時期が私にもありました。

「初めまして、宮城静菜（みやしろしずな）です！　みんなよろしくね！」

入学してから既に半年、季節は秋。
飛びすぎ？　仕方ないよ、書くこと無かったんだもん。

「宮城さんは親の事情で皆より遅れて来ちゃったけど、仲良くしてあげてね？」
【は～～～～い！】

そう、突然ウチのクラスに転校生がやってきた。
まぁそこはいい、世の中色んな事情をもった人がいるのだから、時期外れだからと言ってそこまで特別意識しなくてもいいだろう。
だが問題なのは

「それじゃあ宮城さんは一番後ろの席に座ってね。」
「はい。」

窓際から二列目の最後列、つまり私の右斜め後ろ、ということ。
そこまで歩いていく宮城さん、しかし彼女の視線は、この教室に入った時から一人に固定されているのだ。

「・・・・（ニコッ）」
「！！」

笑いかける宮代さん、そして半分怯え、半分羞恥の割合で僅かに赤くなって目を逸らす・・・・・ツナ君。
そう、宮城さんは、ずっとツナ君だけを見ているのだ。
あ、別にフラグじゃないよ？
ツナ君に友達が出来るのいいことだし、もし宮城さんがツナ君にそう言う感情を持っていたとしても、ツナ君にも春が来たなぁと応援したいくらいだ。

私が問題視、というか疑問視？　しているのは　宮城さんの雰囲気だ。
一目見た瞬間に一般人じゃないのがわかった。
少なくとも何かしらの力を持っている事は明白、しかもツナ君に送る視線が、何というか、妙なんだよね。
好意的な部類ではあるんだけど、初対面とは思えないような親しみが込められているような、そんな気がする。

知り合いかな？　とも思ったけど、ツナ君の反応を見ていると少なくともツナ君自身は見覚え無さそう。
後で聞いてみようかな～とか思っている内にチャイムがなり、担任が出ていくと、宮城さんの元にクラスの皆が殺到する。
まぁ恒例の質問タイムって奴だね、私は集団を迂回してツナ君の元へ

「ねぇツナ君、宮城さんって知り合い？」
「え？　ううん、知らない。」
「でもなんか笑いかけてたけど。」
「め、目がたまたま合ったからじゃない！？」

思い出したのか、また赤くなるツナ君。
しばらくこのネタで遊ぼうかな～？

「ねぇ、沢田綱吉君だよね？　初めまして。」
「「へ？」」
突如話しかけられて、振り向くと、そこにはいつの間にか宮城さんがいた。
その後ろを見ると、質問していた集団を抜けて態々こっちに来たらしい、何故に？
「う、うん・・・・・よろしく。」
「うん、よろしく。　私のことは静菜って読んでね。」
ニッコリと、先程と同じく笑いかける宮城さん。
花のような笑顔ってこういうのを指すんだろうなぁ～とか思った。
「う・・・うん。」
色々限界に達したようで、ツナ君が私の後ろに逃げるように引っ込んでしまった。
むしろツナ君にしては良く頑張った方だ、ツナ君の成長が嬉しくて、つい頭を撫でてしまった。
そのせいか、林檎のように真っ赤になるツナ君、その時、宮城さんが私を見る。
「そう言えばあなたは？」
「あ、私は夜月満流だよ。　よろしくね宮城さん？」
まるでいま気づいたかのように聞く彼女に、ちょいカチンとしたが、表に出さずに名乗る。
「ふぅん、まぁよろしく。」

随分おざなりな態度、ツナ君の時とは大違いだ。
顔は笑顔なんだけど、視線が物凄い上から目線なのだ。
値踏みするような、比較するような、そして勝ち誇った視線へと変わり、最終的に見下すような視線に落ち着いた。
明らかに七歳児がするような目じゃないんですけど

「それよりもさ、綱吉君、私とお話しよ？」
「え・・・えっ・・と。」

話かけられて困惑し、私に縋るように目を向けるツナ君。
いや、私嫌われてるっぽいんですけど、今も視界の端で私にお邪魔虫に向けるような目を向けてるんですけど。
しかし見捨てるわけにも行かず、三人でお話する事に・・・
その間、邪魔そうな視線をチラチラと向けられる羽目になりましたとさ。

第十話（後書き）

現れた転校生、果たして彼女の招待は！？

まぁキーワード見りゃ一発なんですがｗｗｗｗｗｗ

それでは次回。

感想お待ちしてま～す（＾　｜　＾）／～～

第十一話

ふふっ、来たわ。
とうとう来たのよ、何がって？　それは

「初めまして、宮城静菜です！　よろしくね！」

私の時代が！！！

そう、わたしは転生者よ！
死んだ後の世界で神に会い、力を授かってこの世界にやって来た。
神が言うには、ここはリボーンの世界に限りなく酷似した世界。
多少の差異はあるけど、人物や辿る運命は私の知る世界と同じだそうなので、全く問題ないわ。
能力は、最初はチートな能力を貰おうとしたけど、世界の根本を覆すような力は無理、つまりは他作品の能力は与えられないそうで、ならばと雲雀並みの身体能力、あと私の属性を大空にして欲しいと頼んだ。
まぁ子供が雲雀レベルはさすがに変だから徐々に上げるようにした。
　それでも常人なんて遥かに及ばないけど。

この二つで能力に関する特典は限界を迎えたそうで、案外大した神じゃないなぁと内心思いつつも、転生させてもらった。
ここまで言えば分かるでしょうけど、私は生前リボーンが大好きだった。
特に主人公のツナは、最初は頼りないダメ男だったけど、戦いを経ていく内に段々と逞しくなっていく所が大好き。
ハイパーモードの時のツナはもう堪らない程カッコイイ！　白蘭戦の時なんかもう興奮しっぱなしだった。

だから転生の話をされて、まっ先にリボーンの世界にして欲しいと頼んだ。
生前の私は、地味の一言に尽きるような見た目だったので、勿論とびっきり可愛くしてもらった。
転生する時期はツナが小学校の頃、中学だと京子に惚れちゃってるしね。
まぁそれでも今の私なら乗り換えさせる事も余裕だろうけどね！
念には念をってやつよ。

さて、今は転校初日、名前の関係でツナと席は離れちゃったけど、今のツナに仲のいい友達なんていないしね。
きっと寂しと思ってるだろうから、そこに可愛い女の子に優しくされたらイチコロの筈、完璧！！
チャイムと同時に沢山の子供たちが群がってくる、特に男子が積極的だ。
早速容姿の効果が効いてるみたい、まぁこんな子供なんかに用は無いんだけど、これからの事を考慮してある程度の友人関係は作っておかなきゃね。

浴びせられる質問の数々に適当に答えながら、なんとなしにツナの方を見る。
さっき笑いかけた時は顔を赤くして目を逸らした姿が可愛かったな〜、あれで私を意識して見ているかもしれない、と、ツナを視界に捉えた時、衝撃が走った。
女の子が一人、ツナと話していて、ツナの顔が赤くなっているではないか。
なによあの女！！　私のツナに馴れ馴れしいのよ！！
思わず立ち上げり、邪魔な子供たちを押しのけてツナと女の所に行

く。

「ねぇ、沢田綱吉君だよね？　初めまして。」

「「え？」」

驚いた様子で振り返る二人、キョトンとしたツナの顔が可愛い。

女はやけに意外そうな顔をしていて、マヌケヅラになっていた。

「う、うん・・・・・よろしく。」

「うん、よろしく。　私の事は静菜って呼んでね。」

ここで飛びっきりの笑顔を見せる。

女のことは最初から見ていない、私のこれからの人生においては只のモブキャラでしかないんだから。

案の定赤くなるツナ、やっぱり可愛いなぁ～と思っていたのも束の間。

なんとツナは横にいたあの女の後ろに隠れ、縋り付いている！？

しかもツナの頭を女が撫で、ツナの顔が真っ赤になってる。

なんなのよこの女は！

とりあえずコイツが私とツナが仲良くなる上で障害になるのは確定ね。

「そう言えばあなたは？」

「あ、私は夜月満流だよ、よろしくね宮城さん？」

そう言って笑顔を向ける夜月とかいう女。

「ふぅん、まぁよろしく。」

適当に返事をして、観察する。
そこらの子供と同じでヒョロい体、隙だらけだし、容姿なんて私と比べるのも可哀想だ。
見れば見るほどクラスメイトCとかの凡人じゃない。
あんたとツナは住む世界が違うのよ！　ただの一般ピーポーが調子に乗んなってのよ。

「それよりさ、綱吉君、私とお話しよ？」
「え・・・えっ・・・と。」

またもや夜月に縋るような視線を送るツナ、私は邪魔そうな視線を向けるが、夜月は空気も読まずに参加してきた。
やっぱりこんなガキに空気を読ませようってこと事態が無理な話ね。
結局その後も、邪魔女がいるせいで、ツナと余り会話が出来なかった。
ただの凡人の癖に！　その内思い知らせてやるわ！！

「はあぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。」

学校からの帰り道、私は人生最大の溜息をついた。
宮城さんが来て二日、なんか最近このフレーズ使いすぎじゃない？
彼女は暇さえあればツナ君に話かけ、しかしその度にツナ君は私の背中に隠れると言う悪循環に陥っている。
二人の時ならまだしも、今日なんか、一人の時に話かけられたツナ君が、丁度トイレから帰ってきた私を見て、あからさまにホッとした顔で駆け寄ってきたのだ。

目に見えて彼女を避けるツナ君、何故か理不尽な程に睨まれる私。
なんで私が悪いみたいな視線を向けるかね～、懐いてもらえないのはそっちの落ち度でしょって話ですよ。
だがしかし、もしツナ君が私に依存している、とかいうのだったら話は別だ。
彼女の事はどうでもいいが、ツナ君が他人との交流を疎かにするのはいかんよ。

「ねぇツナ君？　どうして宮城さんの事避けてるの？」
「う～ん、よくわからない。」
「他の人と話すのがイヤとか？　私以外の子とも話したほうが・・」
「ううん、そうじゃなくて、上手く言えないけど、嫌なんだ。」
「そっか～。」

どうやら彼女限定らしい、じゃあ問題ない。
いや、あるっちゃあるけど、彼女一人と上手くいかなくてもツナ君の人間関係に大きな影響は無い。
幸いあと半年もすればクラス替えで別々になる可能性は大だし、他の子と友達になればいい。

「じゃあツナ君、また明日ね～？」
「うん！　バイバイみーちゃん。」

てを振ってツナ君と別れる。
明日はもう少しマシな日常でありますよ～に。
あれ？　フラグ？

「夜月さん、ちょっといい？」
見事に回収してしまった・・・。
翌日、昼休みに給食を食べ、皆が校庭に遊びに行く時間。
珍しく宮城さんが私に、それも自主的に話かけて来た。
これがフラグの力か！

「うん、いいけど。　どうしたの？」
「話があるか、付いてきてもらえる？」
「わかった。　ツナ君、後でね。」
「う、うん。」

不安そうなツナ君を残し、教室を出る。
そのまま校庭に出て、さらに歩き、その方向にはなんと体育館。

まさか、小学一年生にして初呼び出し！？
テメェ調子乗ってマジムカつくんですけどぉ、とか、いいから飛べよ！、とか言われて、あり金全部絞り取られるという、幻の学校イベント！

最近の子供は進んでるとは言われているけども、七歳にしてもう金銭に対する欲が芽生えるなんて・・。
きっとこれから体育館裏まで行き、大人数に囲まれ、将来性の欠片もない不良連中に身の程を弁えないデカイ態度でガン飛ばされながら金を要求されるに違いない！！

私の予想通り、ついたのは体育館裏。
校庭で遊ぶ子供たちの声が遠くに聞こえる。
しかし予想していたようなヤンキーな子達はいない、茂みにでも隠れてるのかな？　と思ったが、人の気配は私達以外には無し。
まさかとは思うがワンマンアーミーなのか。

「ここならだれもいないわ、さて、単刀直入に言うけど。」

振り向いて私を見る宮城さん。
いつも以上に見下すような目を、しかも今日は隠そうともせずに露骨に向けてくる。
まぁ全然隠せてなかったけどね。

「あなた、もうツナと関わるのやめなさい。」
「・・・・・・・はい？」

第十一話（後書き）

転生者のうざったさを上手く表現出来ていたでしょうか？

早くも死亡フラグｗｗｗｗｗ

キーワードでも言いましたが、この作品に置いて、転生者は脇役の雑魚です。

なので一人の出番はそんなに長くありません。

例外はいつか出るかもしれませんがｗｗｗ

ではまた

第十二話（前書き）

転生者の運命やいかに！

第十二話

「えっと、ごめんね。　もう一回言ってくれる？」
「はぁ？　耳でも腐ってんの？　まぁいいわ、ツナともう関わるなって言ってんのよ。」

言葉の意味が理解できず、聞き間違いかと思い、聞き返したが。
帰ってきたのは先程と同じ、むしろオマケまで付けて打ち返された。
なんかもう隠す気はこれっぽっちも無いみたい。

「とりあえあず、何でそんな事言われるのかな？」
「あんたに説明したって理解できないわよ、ツナとあんたじゃ住む世界が違うんだから。」

ツナって呼び捨てしてるし。
もう完全に化けの皮が剥がれてるんですけど。
というかツナ君の住む世界？　もしかしてこの子マフィア関係者？

「住む世界ってどう言う事？」
「だから言っても分かんないっつったでしょ！　いいからあんたは私の言うこと聞けばいいのよ！！」

カッッチーン。
さすがに今のは来ましたよ、何コイツ？　何様？
完全に下に見られてるのは知ってたけど、こっちにも限度ってものがあるよねぇ～。
死にたいの？

「嫌だよそんなの、あんたに言われる筋合い無いもの。」

「はぁ！？　調子乗ってんじゃないわよ！　痛い目にあいたい訳！？」
「そっちこそ調子に乗んな、ツナ君に避けられるような残念女がグチグチいってんじゃねぇぞ？」
「このっ！！」
安い挑発に乗ったアホが突っ込んでくる、やっぱり一般人とは思えないような速さだった。
「おっとぉ。」
「なっ！？」
でも私には当たらないけどね？
一般人よりってだけで、今迄殺って来たマフィアの下っ端に毛が生えた程度でしかない。
掠りもしないよ～。
右に避けて、すかさずアホの足の前に自分の足を置く、あとは勝手に引っ掛かって転んでいくだけ。
しかしアホは辛うじて受身を取り、体勢を立て直した。
「お、やるねぇ。　とてもただの七歳児とは思えないよ？」
「くっ、このぉ！！」
馬鹿の一つ覚えみたいに突っ込んでくる。
それを避けては転ばせ、避けては転ばせを繰り返し、五回くらいやった所でアホが距離を取った。
降参・・・・なわけないよね～。
「ふふっ、なるほどね。　そうか、そういうことか！！」
「はい？」

突然肩を震わせ、俯いてブツブツと何か喋ってるアホ。
地味に怖いんですけど、もしかして転んで頭打っっちゃった？

「あんたも転生者ね！！」
「はい？」

何回私に「はい？」って言わせれば気が済むんだこのアホは、しかも今度は意味不明な単語が。

「もう誤魔化しても無駄よ！　特典で身体能力を上げてる私が、ただのガキにやられる訳が無いもの！！　大方相手の動きを読む類の特殊能力をもらってるんでしょ！？」
「え～～っと・・・・。」

これは・・・・ツッコミ待ちなんでしょうか？
だとすれば何て高レベルのアドリブなんだ、ヴァリアーの幹部である私ですらついて行けない程の無茶ぶりだよ！？
次元が違いすぎる、ある意味完敗だ。

「とりあえず、カメラはそこですか？」
「まだしらを切る気？　どうせあんたも神に転生チャンスを貰って、この世界でツナや他の男達を落とそうってつもりの、前世がグダグダだったブスでしょ！？　ツナはあんたには渡さないんだから！」
「・・・・・・・・・・」

コメントが浮かばない・・・。
というか・・・何？　もしかしてこの人・・・・マジで言ってんの？
リアクションに困るどころの騒ぎじゃないんですけど！？
まさか転校生は究極ＤＱＮ！だったなんて、人生って何が起こるか

分からないね～。

「もういいわ、あんたはここで殺して、欠片も残らずに燃やし尽くしてあげる。」

「随分物騒な話になってきたね～、その年で犯罪者になりたいの？」

「死体が見つからなければ行方不明で迷宮入りよ、問題ないわ。」

「死体を隠し通すのってそんなに簡単じゃないよ？」

「はぁ？　何言ってんの？　そんなのこれで一発解決じゃない。」

そう言ってアホは手の平に、死ぬ気の炎を灯した。

「！？　それは！」

「驚いた？　そうよ、私の炎は大空の属性、凡人とは違う選ばれた人種にのみ宿る炎よ！」

アホが何か言っていたが、私は聞いてなかった、いや、聞けなかったのだ。

それほどの衝撃だったのだから。

目の前の光景が信じられない。

嘘だ、有り得ない。

だって・・・・だって・・・・・・・。

「ちっっっっっっっっさ！！！！！！！！！」

思わず大声が出てしまった。

何あれ、小さ！！

服の袖にライター三本くらい仕込んでんじゃね？　ってレベルの小ささなんですけど！？
というか何？　あの勝ち誇った顔？
これで勝負は決まったと言わんばかりの笑みを浮かべているあのアホは何？
スッゴイ痛々しいんですけど！
最初は驚いたけど、あまりの小ささに一瞬で吹き飛んだよ。

「え～っと、勝ち誇ってるとこ悪いんだけど、そのピンポン玉サイズの炎で何する気？」
「あんたの死体を燃やすのよ、これなら燃えカス一つ残らないわ。」
「まぁ、それぐらいなら出来そうだけども・・・。」

なんか段々可哀想になってきた。
これじゃあこっちが弱いものイジメしてるみたいじゃない？
そんなの・・・

「死になさい！！」

そんなの・・・・

「ツナは私の物よ！」

楽しすぎるじゃん？

「・・・・え・？」

アホが叫びながら私に突っ込んで来た瞬間、静かに響く四つの風切り音。
宙に浮く感触に、アホは惚けたような声を上げ、とっさに地面に足

を着けようとする。
しかし、足は体を支える事は無く、アホはそのまま地面に落ちる。
途中で手で支えようとしても、何故か全然前にこない。
地面に落ちて数瞬後、何かが地面に落ちる音が四つ分、自分の周りで聞こえ、アホはそれを見る。

「え・・・え？　う・・そ・・・」

それは自分の右腕、その隣に左腕。
すぐ横を見ると、そこには左足、反対側には右足が転がっていた。
それを見た後、自分の体が濡れている事に気づき、地面を見ると。
自分を中心に広がる血溜まりがあった。

「あ、ああ・・・ああああ・・ぐぶぅ！？」
「だぁめだよぉ？　こんな所で叫んじゃあ、流石に人が来ちゃうよ～？」

叫びを上げかけたアホの口に、ハンカチをねじ込む、ついでだから切り落とした足の靴下とかを脱がして詰め込む。
アホのポケットに入ってたハンカチでナイフを拭き、服の内にしまう。

「これで喋れないよね～、さぁてどうしようかなぁ？」
「ムグッ、ムグゥィウ～～！」

涙と鼻水と血で顔をぐちゃぐちゃにしながら喚くアホ。
これじゃ話が出来ないので、仰向けにして腹に一発？

「グブゥッ！！」
「うるさいから喚かないでくれる？　次喚いたら一回につき三発殴

るよ？　分かったら首を縦に振れ。」
「・・・〜っ！！」

必死の形相で首を縦に振るアホ、ヤバッ、楽しっ？

「よろしい、それじゃあこれから口の中の物取るけど、勝手に喋ったら殺すよ？　あぁその前に。」
「？」
「ほいっ？」

パチンッと私が指を弾くと、アホの手足の切れ口が灰色の炎で焼かれる。
話を聞く前に出血死されたらやだしね。

「ムーーーーーーーっ！！！！！！！？？」
「だから喚くなって言ってんのに〜」

身を焼かれる激痛に、もがいて転げ回るアホ。
しかしそんな事で消える筈はなく、炎はアホを焼き続ける。

「これぐらいでいいかな？　ほい、止血終了〜〜。」

再度指を弾いて炎を消す。
解放されたアホの顔は酷いもので、初日に感じた綺麗さとかはもう微塵も感じられない。
アホの呼吸がある程度落ち着くのを待ち、話を進める。

「じゃあ今から取るね？」
「ぷはっ！　はぁ・・はぁ・・はぁっ・・はぁ・・けほっ！・・げほげほっ・かはっ・・。」

取った瞬間に咳き込むアホ。
叫び出した時のために、残った足から靴下を脱がして手に持っておく。

「じゃあ質問するからね？　嘘ついちゃだめだよ～？」
「ひっ、・・・は・・・はいっ・・・。」

すっかり怯えちゃってるねぇ～？
まな板の上の魚みたいにビクビク震えちゃって、Ｓ心をくすぐられるよ～。

「まずあんたの言ってた神とか転生者とかって話だけど、あれってマジで言ってたの？」
「は、はい・・本気・・・です。」
「ふぅん、じゃあそれについて詳しく話せる？」
「はい・・・。」

そっからアホは語りだす。
自分が生きてたのはここことは別の世界であり、アホはそこで一度死んで身で、死後に神と名乗る人物と遭遇し、力を与えられてこの世界に来た。
この世界が、元の世界でアニメや漫画として知られる物語と殆ど同じ世界であり、アホはその物語が大好きだったからこの世界に来たと言う事。
だから、多少の差異はあれ、これから起こる事の大筋は知っているらしい。
まさにＤＱＮとしか言えないような話が披露された。

「こんな・・感じ・・・です。」

「ふぅう〜〜〜〜ん、別の世界、ねぇ〜〜。　それで、あんたの知る物語には私と言う存在が居なかったから、私の事を自分と同じ転生者だと思った、と。」
「は、はい。」

たしかに辻褄は合うねぇ〜。
アホがツナ君のことを一方的に知っていたのも、私に敵意を向けるのも、必要以上にツナ君に関わろうとするのも、それなら一応筋が通る。
まぁこんなもんか、これ以上は聞く必要ないし。

「そっか、それじゃあ質問は終わりね。」
「ほっ・・・。」
「じゃあお別れね？」
「っ！？」

即座に手に持っていた靴下をアホの口にねじ込み、封じる。

「そんな面倒な存在はさっさと殺っちゃうに限るしね？　排除させてもらいま〜す。」
「ム、ムグッ！　ムゥーー！！」
「あぁ、言っとくけど未来の情報で取引しようってつもりなら意味ないよ？」
「っ！？」
「だってあなたが言ったんだよ？　ここはあくまで酷似した世界だって。　変化が起こるかもしれないのにそんな不確かな情報は変な先入観植え付けちゃうからね、万が一あなたの言う通りになるとしても、未来の事知っちゃったら楽しくないじゃん？　人生は何が起こるか解らないから面白いって習わなかったぁ〜〜？」

言いながら私は、手に炎を灯す。
アホが出した物とは比べ物にならないサイズで、しかし騒ぎにならないように二十倍程度に抑えて。
それを見て、再び震えながらボロボロと泣き出すアホ。
いい加減視界から消えてほしいなぁ～？

「ば～～い？」
「ーーーーーーーーっ！！！」

一気に燃えるアホ、叫ぶことすら出来ず、無力に灰になっていく。
灰すら燃え尽きて、残るのは僅かな黒い染みのような跡。

「うわっ！　チャイム鳴るまであと一分切ってんじゃん！　急げ～？」

クラスに走ってたどり着き、担任にアホは気分が悪くて早退したと伝えた。
数日もすれば行方不明で騒ぎになるだろが、アホが言ってたように死体が見つからなければ迷宮入りだ。
私は最後に会っていたとして事情聴取はされるだろうが、まさか七歳児が犯人だとは思わないだろう。
疑われたとしても、証拠が無ければ無意味だし、まさに完全犯罪だね？
久しぶりにスッキリした気持ちで授業を受けましたとさ。

第十二話（後書き）

と、言うわけで転生者第一号は無様に退場ですｗｗｗｗｗｗｗｗ

コイツうぜぇぇぇぇ！　って思っていた方々にスッキリしてもらえたでしょうか？

感想まってま～す（＾　｜　＾）／～～

第十三話（前書き）

今回は会話が多いです。

説明大半ですので、退屈させてしまうかも！？

第十三話

「あれ？」

目が覚めるとそこは広い草原だった。
見渡す限りの緑に、咲き誇る綺麗な花々、美しい青空に、大小様々な雲が浮かんでいる。
そんな世界を、気持ちのいい風が時より吹き抜けていく。

「いや、どこやねん。」

思わず関西弁になってしまった。
夢の中だとしてもおかしいよ、何で私がこんな爽やかな夢見んの？
私の見る夢って言ったら血なまぐさい死体の山の頂点で片手に生首持ちながら延々と高笑いしてるのがデフォなのに。
１８０度どころか５４０度くらい違う夢やん？

《起きたか・・。》
「？」

突如として世界に響く声。
周りを見渡すと、少し遠くの地面に半分埋まった岩の上に、一人の青年？　が座って、空を見上げていた。
その人に近づき、岩の傍まで来ると、青年がこちらを向く。

「誰ですか～？」
《私か、私はそうだな、君らの言葉で言うと、神だな》
「・・・・・・」

携帯はどこだったかな～と

《何故携帯が必要なんだ？》

「１１０番がいいですか？　１１９番がいいですか？」

《変質者じゃない！　あと頭がイカレている訳でもない！！》

おぉ、自称神がノリツッコミとは、キャラが若干崩れてるし。

つかさりげに心読まれたし。

《神なのだからその位当然だ。》

「お、持ち直しましたね。　それじゃあ本当に神様なんですね？」

《あぁ、そうだ。　私が神だ。》

そうですか～、それなら・・・

「チェスト～？」

《グゥッハッ！！》

全力でぶん殴った。

顔面にクリーンヒットした神は五十メートル程宙を舞い、地面に体を打ち付け、そこから五回程バウンドし、最後に思いっきり地面に体を擦りつけながら転がった。

なんやかんやで百メートル弱くらい吹っ飛んだ。

「いや～～スッキリしたぁ？」

《スッキリしたぁ？　じゃねえええぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！》

もう復活したのか、殺すつもりで殴ったのに。

曲がりなりにも神というわけだね～～。

これ以上ないほどにキャラが粉々に砕け散ってるけど。
《何でいきなりグーパン！？　しかも顔面！？　俺お前に何かしたか！！？》
「とぼけてんじゃねぇよこのクソ神野郎？　あんな面倒なビッチ女こっちに送り込んで置いて何もしてねぇとは言わせんぞ～～？」
《な、なる程そう言うことか。　ならまず最初に言っておくが、アレを送ったのは俺じゃない。》
「へ～、神様のくせに僕は悪くありませんですかぁ？　随分無責任な駄神もいるもんですねぇ。」
《いや、ホント、マジで俺じゃないんだって。　やったの下の連中なんだって。》
「うわっ、出たよ・・責任部下に押し付ける気だよこの人、こんな大人にだけは成りたくない典型的なタイプだよ。」
《ぐふっ！》

胸を抑えてくの字になる神、大分堪えた様子で。

「まぁ、弄るのはこれくらいにしてあげるから、早く本題に入ろうよ。」
《始めからそうしてくれよ、まぁいいか、ここにお前を呼んだのは他でもない、お前に頼みたい事がある、夜月満流。》
「ほぉ～神直々の頼み事ですか～、結構凄いんじゃないですか？」
《その通りだ、だから心して聞いてくれ。》

なんかやる気無くなったな。
人にモノを頼む立場の分際で何？　この上から目線。
頼んでやるから有り難く思え的な。

「とにかく概要だけでも聞きますか。」

《ああ、まず先程も言ったが、あの転生者を送ったのは俺の下に就く下級神の一人だ。　ちなみに俺は神達の中でもトップの座についている存在ね、つまり最高神とか創造神とそんな感じの奴。　何故お前に会いに来たかと言うと、簡単に言えば、お前に転生者を狩って欲しいからだ。》

「何故に？」

《最初から説明する。　まずお前も転生者から話を聞いただろうが、この世には幾つもの世界が存在し、ファンタジーやＳＦの世界、それらのパラレルワールド等、人間の数の概念では計り切れない程のおびただしい数の世界がな。

それらを区分けして、それぞれの神が管理するのがこの世のシステムだ。

しかし、神といえどもミスはある、それによって手違いで死んでしまった者を、上級神以上の神がその者のために好きな世界に、時には新しい世界を作って第二の人生を与えるのが本来の転生だ。》

「ふむふむ。」

段々シリアスな空気になってきたんだけど。

《しかしある時期から、下級神や一部の中級神が暇潰しの為に、死んだ人間を既存の世界に転生させるケースが爆発的に増えている。　酷い時には、本来死ぬ筈のない者をワザと殺してまで転生を行う奴もいる。》

「うわ～～。」

《当然そんな事をすれば、生命の循環に乱れが起き、やがて転生者で溢れた世界は崩壊する。》

「じゃあそもそも転生のシステムそのものが危険なんじゃ？」

《いや、さっきも言ったように、その人物用に新しい世界を構築すれば、たとえその者が強大な力を要求しても害はない。　だが、中

級神以下の神には世界を想像する程の力は無い、だから既存の世界に無作為に放り込むアホ共が多い。≫
「なんで上級神とかあんたが何とかしないの？」
≪転生者とは言え、一度世界に組み込まれた存在を無理やり取り除くのは危険だ。　簡単に言うと、ジェンガのラストスパートで傾いている側のパーツを抜き取ろうとする位に危険だ。≫
「なんと・・・。」

≪そして、そう言う感じで転生した奴らとういのは、大概が自分は物語の主人公になった気分になる事が多い、というかほぼ九割がそうだ。　お前が殺した奴なんかはその典型だ。≫
「面倒な奴らだね～。」
≪そうだ。　上級神以上の神々は、この事態を重く見て、議論した結果。　現地の者に協力して貰うことにしたんだ。　取り除けないなら殺して強制的に生命の循環に戻すしかないからな。≫
「なる程、つまりはこの世界で選ばれたのが私だと。　でも聞く限りそいつらってかなりの力を持ってるって事だよね？　あのバカ女は雑魚だったけど。」

特典とか思い通りの力貰うとか、チートでしょ。

≪いや、実はそれについてはさほど問題じゃない。≫
「なんで？」
≪さっきも言ったが、中級神以下の神々には世界をどうこうする程の力は無い。　よってその世界の根本を揺るがすような強大な力は与えられないんだ。≫
「な～る。」
≪それにお前はこの世界の中ではトップクラスのチートだからな、元々の人生がただのオタクや中二病末期患者が大半の奴らに負ける事はよっぽどの事がない限り無いさ。≫

失礼な、人を化け物みたいに。

「最後に、何で私？」

《お前がチートで、先に転生者に遭遇したってのもあるんだが、最大の理由は、最後に転生者に言った言葉だな。》

「なんだっけ？」

《「人生は何が起こるか解らないから面白い」だよ、中々言えるもんじゃないさ。》

「言うだけなら誰でも言えるでしょ。」

《かもな、でもお前は転生者が未来の知識を持っているのに欲しがらなかった、これだけで口先だけじゃないって分かる。　この依頼をする人間には、転生者に接触することで手に入るメリットに目がくらまない人物である事が最も重要だからな。》

「確かにそう言う意味じゃ適任かもね、まぁ納得。」

《勿論、出来る限りのサポートはするつもりだ。　例えば、お前を転生者を見たら一目で判別出来るようにしたり、近くにいたらある程度感じられるようにしたりとかだな。》

それは確かに便利だ。

近づく奴を一々疑うのなんて面倒だし。

「いいよ～、引き受けてあげる？」

《助かるよ。　改めて、よろしくな、満流。》

差し出された手を握り返す。

「任せて！　グダグダ長ったらしい説明だったけど、要はあんたら上級神共の管理不行き届きと言う名の職務怠慢の尻拭いをしてくださいって事だもんね！　バッチリやってあげるよ？」

《グッハァッ！！》

弾丸に撃たれたかのように仰け反って倒れる神でした。

第十三話（後書き）

誤解が生まれぬよう、詳しく説明したかったので、こうなりました。

第十四話

「おはよう、みーちゃん！」
「おはよ～、ツナ君。」

駄神共の尻拭いの依頼を受けた翌日、いつもの場所でツナ君と合流し、一緒に登校する。
昨日お父さんにまたからかわれた、とか、お爺ちゃんから手紙が来た、とか、たわいのない話をしながら歩く。
因みに九代目は夏休みの半ば頃にイタリアに帰った。
これから仕事が忙しくなるらしく、しばらくは来れないそうで、ツナ君が大泣きしたなぁ。
やっぱクーデターが原因なんだろうなぁ、後悔はしないけどね？

やがて学校に到着し、教室に入ると、何人かの男子が私達を見て、ニヤリと笑う。

「おい、アイツらまた二人っきりで来てるぞー！」
「カップルだカップル！」
「いや、きっともう夫婦だぜー！」

最近これも恒例となっている。
こう言うのって三・四年生くらいから流行るもんじゃないの？　一年で男女が一緒でもさして弄られる事ってあんまり無くない？
まぁそれだけ私達がいつも一緒にいすぎって事かもだけど。

「ち、違うよ！　みーちゃんとは夫婦じゃないよ！！」
「うわぁ～、ダメツナの奴赤くなってやんの、照れ隠しだ！」
「リンゴみて～だ～。」

真っ赤になって必死に反論するツナ君、しかし見事に受け流されてさらなる追い打ちを受ける。
ここまでパターン化すると逆に面白いな、なのでここは一つ、さらなる刺激を与えよう。

「そう？　私はツナ君なら夫婦でもいいよ？？」
「み、みーちゃん！！」
【おおぉ～～～！！！】

爆弾を投下した瞬間、これ以上ない程にツナ君が真っ赤っかになり、同時にクラス重から驚きの声、黄色い声、一部で断末魔のような叫び声が聞こえた。

「あぁ、あう・・・あ・・な」

言葉が出ない様子、そろそろ限界かなぁ、と思った所で、タイミングよくチャイムが鳴る。
担任が入ると同時に全員が席につき、授業が始まる。
しかし、私の右斜め後ろの席、つまりアホ女の席は当然空っぽ。
だが、それを気にする者は居ない。
担任が名前を呼んで出席を確認するが、アホの名前は呼ばれず、素通りしていく。
アイツどんだけ嫌われてたんだよ、と、普通なら思うがそうじゃない。

あのアホは外面はよかったので、それなりに人気はあった、見た目だけはマシだったしね。
これには昨日の神が関わっている。
依頼を受けたあとの話だ、では回想～～～～～

《あぁ、そう言えば。　お前が狩った女の事なんだが。》
「なに～？」
《あいつに関する記憶を皆から消しておいたから騒ぎになることは無いからな。》
「は？　それってダメなんじゃないの？」
干渉出来ないから私に頼んだ筈じゃ・・・
《干渉出来ないのは存在そのものだよ、記憶や記録を少し弄っただけだから問題ない。　幸い、あの女が関わった人間は百人に満たない少数だったからな。》
「なるほど、あくまで私が殺した訳で、皆が覚えて無ければ居なかったも同然か。」
つまり社会的な消去の神様バージョンみたいなもんだね。

っとまぁそんな感じで、誰もアホの事を覚えていないので～す。
生まれ変わる前も後も残念な人生でしたね、ドンマイ？
うっとおしい存在が消え、清々しい日常が戻ってきたのさ～。

そんでもって放課後、ツナ君と別れ、少し寄り道をしながら、普段行かないような場所を散策中。
ただの気まぐれなんだけどね、たまにはこう言う無意味な時間も乙なもんかな～と。
こうしてると偶に面白い発見があったりするんだよね。
路地裏の先に懐かしの（まだ七歳だけども）駄菓子屋さん見つけたり、窓際にスーツを来た猫を飾ったオシャレな店があったり。
他にはいきなり目の前に緑色の穴が出来て吸い込まれそうになったり、黒い和服着た女の人が電柱の上を飛び回ってたりなどなど。

いやはや、中々どうして世の中は面白いね。　ちょっと足を伸ばすだけでこんなに楽しい物が見れるんだから。
次は何が出るかな～と、ウキウキしながら角を曲がると。

「うがぁ！！」
「へへっ、おいおいどうした？　いつもの威勢はよぉ！」
「調子に乗るからこうなんだよ！！」
「おにいちゃん！！」

満流はリンチ現場に遭遇した！
なんと小学生一人相手に中学生が六人ですよ、プライドもクソもあ

ったもんじゃないですね。
少数ボコって自分が強いと錯覚するのが精一杯の哀れな脇役人生のモブ共だね？
しかも子供のほうは見る限り全身打撲、頭も一箇所が割れてるんじゃない？
さらには妹っぽい子が人質にされてるみたい、なんとまぁ。

加減も分かんないバカのか、それとも牢屋にぶち込まれたいドM集団なのか。
どっちでもいいけどね、え～と、とりあえず携帯で現場全体と犯人共の顔を撮影っと。
ハイ、チ～ズ？　パシャ☆

「あん！？　何だテメェは！！」
「つか何撮ってんだコラァ！！」
「え？　証拠写真の撮影だけど？」

なにを当たり前の事を言ってるんだこのバカ共は、そんなことも分からないのか。
兄妹と思われる二人もコッチに気づき、困惑している様子。
ちゃっちゃとすませるか～。

「撮り終えたんで、さっさとくたばれ？」
「何ふざけたこt・・グベッ！」
「何しやがっ・・ゴハッ！」
「てめっ・・ブハァッ！」
「このy・・ギャアアアァァァ！！！」

一人はボディブロー、二人はアッパーカット、最後は玉蹴りで沈める。

あんまり痣とかが残らないダメージにしとかないと後で面倒だしね、あくまで向こうが全面的に悪いようにしなきゃ。

「ひぃっ！　た、たすk・・ぎゃああ！」
「わ、わるかっt・・・がぁぁぁぁ！！」

玉蹴りで怯えた残り二名を、お望み通り玉蹴りで沈める。
終わったその場には、気絶してる奴三名、白目を剥いて泡を吹いてる奴三名、唖然とする子供二名、それらの中心に君臨する子供の姿の悪魔一名。
これにて一件落着？

「おにいちゃん！！」
「きょ、京子・・。」

ってわけでも無いみたい。
妹の方が正気に戻り、泣きながら兄の元へ駆け寄る。
私も行きますか、一応。

「やぁやぁ大丈夫？」
「あ、ああ・・助かったぞ。」
「ありがとう！」
「いいってことよ？　それより君は病院行った方がいいよ？　頭割れてるし。」
「ああ・・そう・・だな・・・ぐぅっ！」
「おにいちゃん！？」

立ち上がろうとするが、バランスが取れずに崩れる。
妹さんがとっさに支えようとするが、力が足りない。
二人が倒れる寸前に、私が支える。

「おっと。」
「す、すまんな。」
「これじゃあ自力で行くのは無理っぽいね、私が運んであげるよ～。」
「こ、これしきの事はなんでもないぞ！」
「問答無用？」

さっさと背負って病院へ向かう、この距離なら直接行った方が早い。
妹さんも後ろから付いてきて、何度も繰り返し私に礼を言ってきた。
病院の受付に要件を言い、背負った子を見せると、看護師は慌てて医師を呼び、あの子は担架に乗せられて緊急治療室に入っていった。
残された私と妹さんは、傍のイスに座り、終わるのを待った。

その途中で、私が妹さんに、親に連絡したほうがいいんじゃないかと言うと、すぐに親御さんに連絡。
しばらくして親御さんが来て、妹さんと二人で事のいきさつを説明。
今度は家族三人に深々と頭を下げてお礼を言われた。
通りかかっただけなので気にしないで欲しいと伝え、時間も時間なのでそろそろ帰ることにした。

「ねぇ、お姉ちゃん名前はなんていうの？」
「私？　夜月満流だよ？」
「私、笹川京子！　七才だよ！」
「京子ちゃんか～、ちなみに私も七才だから、お姉ちゃんじゃないよ～。」
「え、そうなの！？　じゃあ満流ちゃんって呼んでいい？」
「いいよ？　私も京子ちゃんって呼ぶね！」
「うん！」
「じゃあ京子ちゃん、バイバ～イ！」

「バイバイ！」

帰り際に、親御さんに証拠写真のデータを渡し、犯人のいる学校の名前を教えて家に帰った。

数日後、とある学校の生徒が児童への過剰な暴行で少年院行きになったと新聞に載ってた。

第十四話（後書き）

まさかの笹川兄妹とのエンカウント！

これがこの先どう関わっていくんでしょうねぇ・・・

感想まってます。

ではまた次回。

第十五話（前書き）

更新が若干遅くなる恐れありです。

ですがけっしてネタが無いとかではありませんので。

単に作業時間が少なくなるだけです。

第十五話

京子ちゃん達と出会ってからというもの、私はちょくちょく同じよなアホ共はいないかなぁ～と歩き回る事が多くなった。
あ、別に人助けに目覚めたとかじゃないよ？
普通の日常ばっかに慣れると体が鈍る可能性があるからね、最低限人をボコボコにする感触は偶に味わっとく方がいいかな～って？

京子ちゃんと、兄の了平さんとは時々会うことが多い。
驚異的な速さで退院した了平さんは、強くなろうと必死になり、会うたびに「極限に試合だー！」とか言って追いかけてくるようになった。
中々にしつこく、だけどもランニングにはちょうどいいかな～と思って黙認してる。

まぁそんなこんなで二人とは仲良くなり、近いうちにツナ君にも紹介しよっかなぁとか思ってる。

すでに日も落ち、七歳の子供が出歩くには遅すぎる時間。
こう言う時、一人暮らしのフリーダムが存分に発揮されるというものだね。
前に大通りを歩いてたら警官に迷子かと言われて、家の場所を聞かれた事があるので、人通りが少ない道を選んで歩くようにした。

「おじょうちゃ～ん、迷子か～い？」

まぁたまにこう言う酔っ払いとかに絡まれるんだけどね。
万年係長止まりみたいなオッサンが、頭にネクタイ巻きと言うなんともベタな酔っ払いスタイルで、フラフラしながら近づいて来る。

その後ろには部下であろう同じく酔っ払いの会社員ＡとＢがいる。

「ご心配なく、迷子じゃないので～。」

「遠慮しなくていいんだよ～？　一緒に親を探してあげるよ～。」

「そうそう、なんなら家まで付いて行ってあげるぜ～？」

変態ロリコンオヤジ認定ですね。

この対峙してるだけで湧き上がるうざったさは間違いなく変態オヤジの能力と言っても過言じゃない。

今も目の前でゲラゲラと笑っている変態トリオ、物凄くぶん殴りたい。

「ひっひっひ、そんじゃ俺たちと・・」

「おいおい見ろよ、酔っ払いどもが幼女襲ってんぞ？」

「「「！？」」」

「おや？」

突然声がしたので、そちらを見ると、不良っぽい中学生がニヤニヤしながら此方を見ている。

偶然通りかかって見つけた光景を楽しんでる、と言うような感じだね。

「あん？　なんだよ中坊かよ驚かせやがって、ガキはさっさとお家に帰んな！」

「今は大人の時間だっつの。」

「そうそう、はっはっは！」

中学生だと知ってまた調子に乗るアホトリオ、なんか展開が透けて見えるようだな～

「は？　何オヤジが調子に乗ってんだよ、おい、やっちまおうぜ～」
「さ～んせ～い。」
「クソオヤジ共でストレス発散～。」
「ついでに有り金貰うか」
「いいね～、それで今夜は豪遊しちゃう？」
「今なら先着一名様には美幼女が付いて来ますってか？」
「おめぇいつからロリコンになったんだよ。」
「「「げぇっ！！」」」

後ろからぞろぞろと出てくる中学生達、ざっと十人以上はいるかな？
予想外の展開に、一気に青ざめるアホトリオ。
トリオが固まっている内に、周りを囲む中坊集団、妙な手際にちょっと驚いた。
と言うかこの状態って私はどんな立場なんだろう？
なんかもうトリオとのいざこざはうやむやになったし、中坊集団には結果的にトリオを引き受けてもらった形になってるっぽいし。
・・・・・・・エスケープしてもいいでしょうか？

「抜き足差し足忍び足～～・・。」
「おっと、どこいくんだよ幼女ちゃ～ん？」
「ピンチを救ってやった王子様達になんの挨拶もなしかよ～？」
「おいおい、お前が王子様なら世の中の八割の男が神様じゃね？」
「ぎゃっはっはっはっは！」

作戦失敗、まぁ抜け出す気は無かったんだけど。
まずトリオは元からぶん殴る予定だったし、今のでこいつらもとりあえず病院行き決定。

「それはすいません、おかげで助かりました～。」
「いいってことよ、このあとちょっと相手してくれればな～、へへ

っ。」
「うっわ、こいつまじで幼女趣味に走ってやんの。」
「そういうお前もこの前小学生に声かけてただろうがよ。」
「ちょっ！　言うなっていったろうが。」
「おいおい人の事言えねぇな～。」

ますますゲラゲラと笑う、なんかトリオと同レベルになってる気が・・・

「じゃあもう用済みなので、さっさと逝ってください～。」
【は？】

突然の言葉に全員がキョトンとした顔をする。
その隙に足元にあった石を一気に蹴り上げ、飛んでいった小石五個は、正確に中坊の玉に命中。
五人が退場。
その光景にいち早く正気に戻った四人程が、鉄パイプやらナイフやらを手に襲い掛かってくる。
紙一重で避け、地面に落ちていた鉄パイプを拾って、すれ違い様に一撃（どこにかは最早言うまい）。
これであと三人、あとトリオ。

その時、髪が前に垂れてきて、確かめると髪紐が解けてしまったみたい、しかも両方。
そろそろ古いから買い換えようと思ってたからちょうどいっか。
髪も長くなってきたなぁ、前髪も以前みたいになってきたし。
とりあえず今はゴミ掃除しないと。

しかしトリオは既に気を失っている、よく見るとちびってるし。
ださっ！！

じゃああとは中坊三人か。

「な、なんだよこのガキ！　バケモンかよ！？」
「言いえて妙ですね～、と言うか前はよく言われました～。」
「ひぃ！　く、来るなぁ！！」
「だが断る～。」

石ころを蹴って三人とも瞬殺。
またこの前のような死屍累々の光景が広がっている。
なんかパターン化してきたな、もうちょい強いのいないのかな？

「ねぇ。」
「？」

またもや後ろから声、振り向くと了平さんと同じくらいの男の子が惨状を見ながらコッチに歩いてきた。

「これ、君がやったの？」
「そうですよ～？　か弱い少女を襲う変態共に制裁を加えたところです。」
「ふぅん、か弱い、ねぇ。」

そういう子供の目は、面白い物を見つけたように嫌～な光が灯っていた。

「じゃあ今度は僕の暇潰しに付き合ってよ。」
「え？　いや、そろそろ帰ろっかなぁとか思って・・」
「いいよ別に、帰れればねっ。」
「うわっ！？」

いきなり襲い掛かってきた子供。
いつぞやの痛者(いたしゃ)一号を思い出す速さだった。（ちなみに痛者とは、痛い転生者の略）
もしかして痛者二号か！？　と思ったけどこの子は違うね、駄神のおかげで痛者と遭遇したら分かるようになったし、まだ実際にどんな感じた事はないけど、何となくこの子は違うと思う。

しかし痛者一号と違うのは、速さに見合った複雑な動き。
ただ早いだけの雑魚だったアホとは違い、戦いに対する経験をある程度積んでみたいだね。
なんで七歳で戦いの経験積んでんの？　というのはツッコんだら負けだろうね、やっぱり。
両手に持った木製のトンファーで交互に連撃を繰り出す男の子、後ろに下がりながら全てを避けて・・・・って

「あの～一つ聞いたいんだけど。」
「なに？」
「何故にそんな物持ってるんでしょうか？」
「一番使いやすいからさ、当然だろう？」
「・・・そう・・っすか・・・。」

そう言う事を聞いたんじゃ無いんだけども、なんかもういいや。
因みにこの間もずっと攻防は続いている。
ずっと避けてるだけだけどね？
なんというか、終わらせるタイミングを逃した感じ。
いや、やろうと思えば終わらせられるけどね？

「あの～、そろそろ終わらせても？」
「へぇ、やってみなよ。」
「え、マジ？　いいの？」

なら遠慮なく？
すかさずナイスを取り出し、持ち手の根元部分を切断。
一応宙に浮いた棒の部分を、細切れにしておく。

「はい終了～～？」
「・・・・・・」
「あり？」

沈黙する男の子。

「えっと・・どうしたの？」
「・・・・まえ」
「へ？」
「名前、教えて。」
「私の？」
「他に誰がいるの。」

ですよね～～

「夜月満流だよ～。」
「そう、覚えとくから。　次はこうはいかないよ。」

踵を返す男の子・・・ってうおい。

「ちょい待ち。」
「何？」
「何？　じゃないよ、キミの名前は？」
「何で教えなきゃいけないの？」
「えええぇぇぇ～～～～？」

なんという唯我独尊っ子だ。
困惑している内に再び歩きだす男の子。
このまま逃がしてなるものか！

「待て～い！　是が非でも名前を教えて貰う！！」
「やだよ。」
「教えて！」
「やだ。」
「教えなさい！」
「やだ。」
「教えろー！」
「ヤダ。」
「あ、もしかして太郎とかイモい名前だったりとか？」
「・・・」

ピタッと止まる太郎君。

「あれ？　もしかしてずぼs・・。」
「そんなわけ無いでしょ。」
「え～？　じゃあ教えてよ太郎君。」
「咬み殺すよ？」
「咬みって・・・物理的に無理でしょ。」

猛獣じゃあるまいし。

「・・・君、変だね。」
「はい？」

いきなり変人扱い？　よりにもよってこの太郎君に？

「普通ボクと出会うと全員が怖がって近寄らないんだけど。」
「そりゃ出会い頭にトンファーで襲撃されて友達になろうとか思わないよ。」
「じゃあ何で君は関わってくるの。」
「私の方が強いから？」
「・・・」
「嘘、嘘だから殺気全開で睨むのやめて？　ちゃんと話すから。」
「次ふざけたら咬み殺す。」
「はい、まぁ簡単に言えば君が面白いからだね？」
「は？」

キョトンとする太郎君、おぉ、こいつはレアっぽい表情いただきました。

「面白い？　どこが。」
「さっきも言ったけど、いきなり襲ってくる子供なんてそうそういないでしょ？　しかも太郎君の場合、かなり強い部類だしね、少なくとも同年代ではほぼ無敵なんじゃない？　そう言う子と仲良くなっておくと、必ず面白くなる。　と思うのですよ。」
「・・・変なの。」
「バッドで打ち返してあげるよその言葉。」

私も人の事は言えないけどね？

「はぁ・・・・雲雀恭弥。」
「うん？」
「ボクの名前だよ、次太郎って呼んだら咬み殺すから。」
「うん、わかったよ太ｒ・・・恭弥君？」
「・・・・・まぁいいよ、じゃあボクは帰るから。」

「うん、じゃあね～。」

お互いに背を向け、帰路につく。

いやぁ～本当に退屈しないよね～、人生って？

第十五話（後書き）

連続で原作キャラと遭遇ｗｗ

転生者達を簡単に表すために、適当に略語作ってしまいました（汗

いや、これは無いだろう。　とか思ったら言ってください、やめますんでｗｗｗｗｗ

それではまた次回。

第十六話（前書き）

四日ぶりですｗｗｗｗｗ

遅れて誠に申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

ではどうぞ

第十六話

クリスマス・イヴ

ある場所では順風満帆な家族が笑顔に満ちた暖かい家庭で過ごし。

ある場所ではリア充達が愛する異性と共に聖なる日を迎え。

ある場所では独り身のサラリーマン達が肩身の狭い思いをしながら道の端っこを歩き。

ある場所ではリア充死ネなオタク達が薄暗い部屋の中でネトゲのイベントに全力を注ぎ。

ある場所では彼女に振られた青年達がお互いの傷を舐め合うように酒盛りに明け暮れる。

それぞれの者達が、それぞれの場所で、自分の人生の現状を叩きつけられる日である。

そんな中、私、夜月満流は言いますと。

「く、クソ！　さてはお前も転ｓ・・・。」

「はいはい、出落ちオツ～。」

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

絶賛痛者狩り中でした。

人の気配のしない廃倉庫、物言わぬ肉塊となった痛者１８号を炎で綺麗さっぱり消し去る。

飛びすぎじゃい、とは思うだろうが仕方がない。
何故なら、今はもう1号を狩ったあの日から三年の月日が流れているからです！！！

仕方ないいよ、だってどいつもこいつも同じなんだもん。
簡単に纏めるなら。

ある日突然転校、あるいは元からいたらしく、ツナ君に接触してくる。
偶に京子ちゃんと良平さん、恭弥君に関わってくることもしばしば。

何でか全員、痛者共には好感が持てない、恭弥君に至っては咬み殺す。
全員に親しく接する私に、痛者共が妬みを抱く。
イラつく視線を向けてくる。

一週間くらいすると呼び出し、または待ち伏せされ、関わるなとかお前とアイツじゃ住む世界が云々、ｅｔｃ・・・。
お前ら打ち合わせでもしてるの？　ってくらいに同じ事を何度も何度も繰り返し。
結局は実力行使になり、軽く捻ってやると　お前も転生者かー！
って騒ぎだし、それを黙らせて終了。

これが痛者共の基本的な末路。
例外としては、二・三人の男が私を手篭にしようとしてきた事がある。
女子達に絶大な人気を得るような容姿を与えられた奴は、全員がクラスの女子でハーレムを作ろうと尽力している。
その中で唯一ちっともなびかない私を、興味本位からか、積極的にアプローチを繰り返し。

薄っぺらい笑顔を向け、しょっちゅう手を握ろうとしたり、頭を撫でようとしてくる。
気色悪いことこの上ない気分を味わい、思わずぶん殴ってしまう事も多かった。

しかしどれだけ邪険に扱おうとも、そのたびに「ははっ、満流は本当に照れ屋だな！」とか「このツンデレさんめ。」とかほざいて周りをうろついてくる。
うぜぇ、見事な程にうぜぇ。
本当はこのウザったさこそが神から与えられた能力なんじゃね？
と思う程にだ。

しかし、だからこそ、そいつらが死に際に見せる恐怖と絶望に染まった顔ったらもう～～～～？
たまんない！！
もう癖になっちゃうくらいに快感だよ～っ、あの顔見ると体がゾクゾクしちゃうっ？
偶にそこそこ戦えるやつも居るから適度な運動にも持ってこいだしね！

「さってと～、ツナ君待たせちゃ悪いし、早く行かなきゃ？」

今日はツナ君の家の食事に招待してもらっている。
ツナ君の両親には、私に親がいない事は既に話した。
いつかバレるだろうし、知られても不都合はないしね。
今は親戚の一人に世話になっていて、しかしその人も滅多に帰って来る事は無い、と言う事にしておいた。
完全に一人っきりってことにすると、奈々さんとかが「ウチで暮らせば？」とか言い出しかねないからね～。

「お邪魔しました〜〜？」
「本当にいいの？　今日くらい泊まっていってもいいのに。」
「いえいえ、用事もあるんで、今日は帰らせてもらいます。　ありがとうございました。」
「そう、じゃあね満流ちゃん。」
「バイバイ、みーちゃん。」
「バイバ〜イ。」

沢田家との夕食を終え、二時間程してから出た。
何というか、今日は夜通し出歩いていたい気分だったから。
ツナ君を連れて行く訳にもいかないしね。

商店街を当てもなくぶらつく。
やはりというか、周りはカップルが大半を締め、仕事帰りの会社員さん達が居心地悪そうに歩いている。
たまに見る男だけの若者集団は、カップルの、しかも男の方だけを、まるで親の仇でも見るような目で睨んでいる。

しかし、見られている方は
それに全く気付かず、彼女とイチャイチャするのに夢中だ。
なんか見てて面白いな。
勝ち組と負け組、まるで一つの世界の縮図のようじゃないか？
な～んて事を考えながら歩いていると、不意にどこからか鈍い音が聞こえてきた。
普通なら気付かないような微かな音、しかしそれは紛れも無く
「人を鈍器で殴ったような音だね～。」
進路を変えて、音が聞こえた方に向かう。
店と店の間の路地に入り、段々と人の喧騒が遠ざかっていく。
音も次第に大きくなっていき、さらには被害者のであろう悲鳴も聞こえてきた。
最後の角を曲がると、少しだけ開けた場所に出る、そしてその先には。
「お～、やっぱり恭弥君じゃ～ん？」
「満流かい？　何でこんな場所にいるのさ。」
「いやいや、恭弥君にだけは言われたくないからね？　その人たちは？」
恭弥君の周りには二十人くらいの青年達が転がっており、さらには現在進行形で五人の青年が咬み殺されている最中であった。
「こう言う日には並盛の風紀を乱す群れが繁殖してくるのさ、それを駆除してるところ。」
「へ～、まぁ確かに羽目を外し過ぎちゃう人は多いよね～、私も昨

日とか五・六人の人に声かけられたし～。」
「だろう？　だからこうして数を減らさなきゃいけないんだよ。」
「相変わらず並盛ラヴだね～、何でそこまで好きなのか激しく気になるんだけど。」
「言わないって前にも言わなかったかい？」
「いつかきっと聞き出してみせる！　って、両親の墓に誓った？」
「あっそう。」

この間二十秒も経ってないが、既に立っているのは二人だけ。
やっぱり恭弥君は別格だね～？

「さて、群れも咬み殺したし、この前の続きやるよ。」
「やっぱり？　まぁいいけど。」

出会ってから、私達は会う度にほぼ毎回戦う。
と言っても、二ヶ月に一回会うかどうかくらいのペースなんだよね、何故か。
大体は、私が勝ったり、私が用事を思い出して途中で逃げたり、恭弥君の体力が尽きるまで長期戦に持ち込んだり、そんな感じでのらりくらりと勝ち逃げしている。
最近では私の動きを徐々に追うようになり、お蔭様で腕が鈍る心配は無い。

「じゃ、行くよっ。」
「ばっちこーい？」

そばに落ちてた鉄パイプを拾って構える。
恭弥君はいつもの鉄製のトンファーを両手に構え、疾走する。
因みに、初めて会ってから次の時にはトンファーが木製から鉄製に変わっており。

どうやって手に入れたの？　と聞いたら「ボクが欲しかったからさ、当然だろ？」と言われた。
なにが当然なのかは分からないが、もう恭弥君の持ちネタってことで強制的に自己完結した。

「今日こそ咬み殺す。」
「その妄想をぶっ壊す？」

互いの武器がぶつかり、暗い路地裏に火花が散る。
間を開けずに連撃を繰り返す恭弥君、最小限の動きで左右に避ける。
むこうが大振りの一撃を仕掛けて来た瞬間に懐に入り、下から左上に振り上げる。
バックステップでそれを避けて、すかさず踏み込んで空いてる胴を狙って右のトンファーを叩き込まれる。
同じくバックステップで衝撃を殺すが、少しだけダメージが入り六メートル程後ろに飛ぶ。

「お～いつつ、ちょいと危なかったね～。」
「あのタイミングで避けておいてよく言うよ。」
「ふふん、経験の差ってやつだね～？」
「・・・・咬み殺す。」
「おっつ。」

どうやら仕出かしちゃったみたい。
表情変わらず、殺気爆発。
今までの倍近い速度で突っ込んでくる恭弥君。
マトモに食らったら結構やばそう。

「回避～？」

《おい、満流。》
「はい！？　ぎゃっふあぁぁっ！！」
「っ？」

余りにも突然に聞こえてきた声に、つい止まってしまった瞬間、思いっきり一撃を食らってしまった。
ゆうに十メートル以上吹っ飛んで、その先に偶然あったゴミ置き場に頭から突っ込んだ。

「いっっつぁぁ～～、何故に今・・」
《いや、すまん。　取り込み中とは・・・・お前に転生者の事で頼みたい件が出来てな》

つまりこの痛みは痛者共のせいってことだね、よし、ぶっ殺す。

（今から家に帰るから後でね。）
《わかった、なるべく急いでくれ。》
「ねぇ、なにしてるの？」
「え？　あ～いや、実は大事な用事があった事をたった今思い出してね？」
「またそれ？　まぁいいさ、逃がさないけどねっ。」
「やっぱりか！」

案の定、見逃しては貰えない。
素早くゴミから抜け出し、視界がグラつくのを必死に堪えて攻撃を防ぐ。
何とか逃げようとしても、周り込まれてしまって上手く行かない。
ちくしょう、帰ったらまずあの駄神をぶっ飛ばす！

「いやホント、かな～り大事な用事だから見逃してくれない？」

「いやだよ、今日こそ咬み殺すって言っただろ？」
「あれだよ、また今度にしよう。　人生焦る必要ないって、私達まだまだ若いんだから。」
「やだ。」
「出たよ！　駄々っ子モード！」
「絶対に咬み殺す。」
「うぉわ～～！？」

ますますヒートアップする連撃。
ヤバイな～とか思っていた私の視界の隅に、さっきのゴミ置き場が映る。
そしてその瞬間、私の頭にある策が浮かぶ。
我、天啓を得たり！！

「てい！」
「くっ。」

力いっぱい恭弥君を遠くに飛ばし、その隙にゴミ置き場に駆け寄る。
先程の激突の時に口が空いてしまった袋を引っ掴み、思いっきり後ろに放り投げる。
ゴミが辺りにばらまかれ、空の袋が宙を舞う。

「なにしてんの？」
「ふっふっふ、恭弥君。　勝負はもう決したよ、だから、あえて言おう。」

右の人差し指を向け、言い放つ。

「お前はもう、死んでいる。」
「・・・・・・」

沈黙する恭弥君。
しかし私は気にしない、理由は分からないが、今私はかつてない程の達成感を感じているのだから！

「意味が解らないけど、何故だか無性にムカツクよ。」
「え、まじ？」
「だからさっさと這いつくばって貰うよっ。」

先程の様に全力で突っ込んでくる恭弥君。
しかし私は動じず、むしろ笑みさえ浮かべて立っている。
もう勝敗は揺るぎはしない、私の策はすでに、彼の足元まで迫っている。
そう、お笑い界の、絶滅危惧種にして頂点、その名も！

「なっ！！？」

バ　ナ　ナ　滑　り　ネ　タ　！　！　！　！

足元にあったバナナの皮を思いっきり踏みつけ、見事に足を滑らせる。
見たか！　これぞ頂点の力なり！！

しかし、ここで誤算が出た。
恭弥君は全力疾走中であり、体の重心も思いっきり前にした状態。
そんな時に一気に足を滑らせればどうなるか。
脱出を第一に考えていた私は失念していた。

「あり？」
「っ！？」

全力疾走の勢いが止まらず、私の方に飛んでくる恭弥君。
宙に浮いてる為に、恭弥君にはどうする事も出来ず、私は何故か思考が停止し、唖然と突っ立っていた。
当然そうなれば結果は明白で

「グヘッ！！」
「ぐっ！！」

見事に正面衝突した私達。
重なり合って後ろに倒れ、下敷きになった私には恭弥君の体重分のダメージが加算される。

「ウッ・・ウグゥ～～・・・・ウグッ？」

呻き声を発するが、予想以上にくぐもって聞こえる自分の声に、疑問を覚える。
目を開けて前を見ると。

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

目の前には恭弥君の顔、それはいい。
私たちは重なり合って倒れたのだから不思議はない。
問題なのは・・・・・・・・・・
私たちの顔の距離が・・・・・・・・
ゼロである事だ。

第十六話（後書き）

あと一話くらいで一気に日常編まで持って行こうと思います。

なるべく早く投稿出来るよう頑張ります。

第十七話

果てしない青空

壮大に広がる草原

咲き誇る花々

そよ吹く風

そして、血溜まりに沈んだ肉塊

そう、かつて満流が訪れ、神と初めて邂逅した空間である。
唯一違うのは、その景観を著しく損なう醜い塊が転がっている事のみ。

「・・・・・・」
《っ・・・・ちょっ・・あのっ・・マジでごm・・グゥヘッ！！・・・》

血溜まりの前に立ち、能面の如く無表情で肉塊を見下ろす満流。
血溜まりの中に沈む肉・・・もとい神。
何かを口にした瞬間、満流が携える釘バットのフルスイングをお見舞いされる。
既に出血量は人間が五回死んでもお釣りが来る量に達しており、血溜まりの半径はそろそろ十メートルに及ぶかと言うところだ。

「・・・・」

《みちｒ・・・グバッ！・・・・ゆるしｔ・・ウゴォッ！！・・・・・たすｋ・・・・ブゥッハァッ！！！》

顔色一つ変えず、機械の様にひたすら振り下ろす。
グチャッ、グチャッ、と、振り下ろす度に肉が飛び跳ね、一般人なら聞くに耐えない音が響く。
顔に血が飛び散ろうとも全く気にせず、ただ威力だけが増していくばかり。

《おねｇ・・・・グゥヘッ！・・はなｓ・・・・ギャブッ！！・・・・聞いｔ・・ゴハァッ！！！》
「さっさとシネ。」
《いや、俺神だから死なｎ・・ギュハッ！！・・・・だからマジで止めておねｇ・・グッフゥッ！！！》
「・・・・・・ハァァァ・・。」

溜息を吐き、とうとう釘バットを下ろす満流。
神にとって、まさに四時間に及ぶ地獄が終幕した瞬間だった。

「で、私に頼みたい事って何・・？」
《やっと・・・本題に・・・・入れ・・る・・な・・。》
「さっさと言えよハゲ。」
《ごめんなさい。》

今だ能面の表情が抜けきらない満流。
あの事故の後、完全に石化した二人であったが、満流が何とか先に正気に戻り、恭弥を押しのけてそのまま脇目も振らずに全力疾走。
家まで逃げ帰って来たのである。

「あぁ、気が重い・・・・。」

《何というか、ホントにスイマセン。》
「はぁ～～～～～・・・。」

あの後、彼がどうしたかは知らないが、次に会ったときにどんな目にあうかと思うと気が重い満流。
ぶち切れて襲いかかって来るか、案外平然と接してくるか、それとも全く予想外の反応が来るか。
流石にキスしたとなると、どう転がるか検討もつかない。
満流自信、あれが初めてであった為、判断材料が無いのだから。

「キスしちゃったんですけど～・・・。」
《ごめんなさい・・。》
「何気に初めてだったんですけど～～・・・。」
《申し訳ございませんでした・・・・。》

ひたすらに謝る神。
表面上は普通に会話している様に感じるが、未だに神は血溜まりの中に沈んでおり、モザイク判定必須の状態で会話をこなしているのだから、余りにもシュールな光景だ。

「まぁそれはいいや、早く続けて。」
《いいけど、やっぱり反応違うよな、もうちょい恥ずかしがるもんじゃね？》
「きゃああぁぁぁーー！！　恭弥君と、キ・・キ・・キ・・キス・・・しちゃったよぉぉぉぉぉーーー！！！！！　・・・・・・・・・とか？」
《いや、まぁ・・・・うん、はい・・。》
「これでも結構パニクッてるんだよ？　現に今も心臓バクバクだしね～～。」
《え、マジで？》

「マジ、まさかあんな事になるとは予想もしてなかったし、いきなりアレは流石にビックリだよ～。」
《ですよね～。》
「だけどいつまでも話が進まないのはアレだから、話を聞いていてやろうって事だよ～。」
《どうもです。　それでは・・・》

一度咳払いをして、真剣な表情になる神。

《まず結論から言う、海外に出張してくれ！》
「・・・・・・・期間はどれくらい？」
《大体七年くらい！！》
「・・・・・」

再び能面の顔に戻り、無言で釘バットを再装備する満流。
美しき世界に悲鳴が響き渡り、草原に二つ目の真紅の巨大な花が咲くのだった。

「み、みーちゃん、大丈夫？」
「うん？　あぁ、大丈夫。」
「そ、そう・・。」

駄神との話の翌日、私は全身から哀愁を漂わせていた。
ツナ君が心配して声をかけてくれるも、いつものような返事が出来ない。

「ほ、ホラみーちゃん！　サンタさんが風船配ってるよ、行こうよ！」
「うん。」

商店街の一角にある店の前で、サンタの格好をした男性が子供達に風船を渡している。
ツナ君は嬉しそうに風船を受け取り、私の元へ走ってくる。
が、途中で足を滑らせ、思いっきり転倒した。

「うわぁっ！」
「ツナ君！？」

慌てて駆け寄り、ツナ君を抱き起こす。
鼻を軽く打ったらしく、赤くなっていた。

「大丈夫！？」
「う、うん・・平気・・。」

涙目になりながらも笑顔を作ろうとするツナ君。

「でも・・風船が・・・。」
「え？　・・あっ・・・。」

ツナ君が見上げた先には、既に空高く浮いている赤い風船。
流石にあれはもう取れない。

「じゃあちょっとまっててて。」
「え？」

先程のサンタの所に行き、一つだけ残っていた紫の風船を貰い、ツナ君の元に戻って渡す。

「はいこれ。」
「いいの？」
「うん、いいよ。」

少し躊躇っていたが、誘惑に抗いきれずに手にとった。

「ありがとう！　みーちゃん。」
「どういたしまして。」

満面の笑顔を浮かべるツナ君。
それを見ていると、少しだけここを離れるのが名残惜しくなってくる。
昨日の駄神との話が、頭の中で何度も反復される。

「で、何でいきなり出張なわけ？」

《じ・・実は、海外のマフィア各所の関係者達の子供として、大量の転生者達がやってきたんだよ》

「何でそんな所に？」

《前にも言ったが、転生者にも色んな奴らがいる。　大半は物語の中心に関わろうとするのが殆どだが、全く関係ないところから自分のオリジナルな展開で関わろうとする奴も沢山居るんだ。》

「例えば？」

《俺がボンゴレ以上の大ファミリー作って最強になってやるぜ！！　とか、　全てのマフィアに恐れられるような最強の殺し屋になって、クールな一匹狼を貫くぜ！！　とかだな。》

「うわぁ・・。」

《まぁそんな感じで、今海外にとんでもない数の転生者達が溢れてるんだ。　それを片付けて欲しい。》

「それを全部こなすのに七年かかるってこと？」

《いや、七年ってのはあくまでかなり多く見積もって計算した年数で、実際二年から四年くらいだと思う。》

「紛らわしいなオイ。」

《悪かった。　年明けくらいから始めて欲しいんだが、その前にあるマフィアのアジトに出向いて手に入れておいておきたい物がある、三日後くらいには出発してくれないか？》

「随分急だね、手に入れておきたい物って？」

《これからいろんな場所に行くのに、まだ九才のお前には色々と不便な事が多いだろ？　それを補う為に必要な物だ、詳しい説明は現地に行ってから話すから、とりあえず今日はここまでだな。》

「了解〜。」

――――――――――――――――――――
――――――――――

二日後には日本を離れる、その話をするために、ツナ君と一緒にいる。

既に荷造りは済ませた、元々物を多く持たない質だから。

今日一日はツナ君と一緒にいて、明日は京子ちゃんや了平さん、可能なら恭弥君にもお別れを告げる予定。

「ねぇツナ君。」
「なに？　みーちゃん。」
「ちょっと話があるんだけど、聞いてくれる？」
「う、うん。」

雰囲気が変わったのを感じ取ったのか、若干困惑気味に頷く。
二人で手を繋いで歩き、商店街の道を進んでいく。

「突然なんだけどね、私、明後日には外国に行く事になったんだ。」
「え・・？　な、なんで？」

立ち止まり、信じられないと言った様子で聞いてくるツナ君。
私も立ち止まり、ツナ君の方に振り返る。
なんかドラマのワンシーンみたいだなぁ、と、心の中で苦笑する。

「えっとね、世話になってる親戚の人の仕事の都合でね、私も付いていくことになったから。」
「なんで行っちゃうの？　みーちゃんだけこっちに居られないの？」

早くも涙目になりながら必死な様子で訴えるツナ君。
実に子供らしい考えに、またもや心の中で苦笑してしまう。

「だめだよ、迷惑かけちゃうし。」
「で、でも・・・・でも！」

泣き出すツナ君。
声を出そうとしても、言葉になっていない嗚咽が聞こえてくるだけ。

「大丈夫だって～、今はさよならだけど、必ず帰ってくるからさ！」
「グスッ・・・ほんとに？」

「ホントホント！」
「いつ帰ってくるの？」
「えっと～～、二年半くらい？」
早くて、だけど。
「ヒック・・うん、わかった！　みーちゃんが帰ってくるの待ってるから！」
「うん、なるべく早く帰ってくるからね。」
なんとか笑顔に戻ったツナ君と、もう一度手を繋ぎ、人混みの中へと歩いて行った。
また会うと約束して。

「さってと～、行きますか。」
あっという間に出発当日。

昨日は予定通りに挨拶を済ませ、京子ちゃんには泣かれたが、最後には笑顔で送り出してもらった。
了平さんは、「次会うまでにお前よりも極限に強くなるぞー！！」と言っていた。
残念ながら恭弥君に会う事はできなかった。

相変わらず何処にいるのか分からない。
今頃どこかで不良をボコボコにしているだろう。

《もういいか？》
「うん、まずは手に入れる物だっけ？」
《そうだ、一つあれば充分だが、念のために二つ手に入れておくぞ、最初はイタリアだ。》
「戻るだけじゃん。」
《イタリアと言っても端っこのほうだ、ヴァリアーに寄る時間は無いぞ。》
「えぇ～～、まぁ仕方ないか、むこうで電話するか～。」

バッグを背負い、タクシーで空港まで行き、端っこの方のフェンスから侵入。
イタリア行きの便を探す。

「で、どれよ？」
《ちょいまち。たしか～～・・・、お、あれだ！》

神が指差す先に、いかにも海外行きのジャンボ機が見える。
荷物運搬用の車を乗り継ぎ、目的の便まで辿り着き、えっと・・・タイヤ？　の所から中によじ登る。

「ふぅ、侵入成功～！」

《いつもこんな感じなんだよな？》
「そう、まぁ前は一度空港の中でどの便が何処行きなのか調べたりしてたから、今日はかなり楽だったね～。」
《そうか、でも、目的の物を手に入れればさらに楽になるだろう。》
「まじ？　ってかいつになったら教えてくれるのさ～。」
《それは手に入れてからのお楽しみだ！》

やがて機体が揺れ始め、ゆっくりと移動しているのを感じる。

「時間だね、寝るから何かあったら起こして～。」
《了解～。》

横になると、すぐに睡魔がやって来た。
眠気に身を任せて目を閉じる、痛者共をいかに苦しませてからブチ殺すかを考えながら。

第十七話（後書き）

一気に日常編までぶっ飛びます！

早く原作と絡ませたくて仕方ないので、ご了承くださいm（＿＿）m

第十八話（前書き）

ついに日常編！

テンション上がってキターー（゜∀゜）ー！

執筆も進みそうなので、早く更新出来る！　かも！

ではどうぞ！！

第十八話

『大丈夫だって～、今はさよならだけど、必ず帰って来るからさ！』

いつも通りに笑う彼女。
小学校の時に出会い、一人ぼっちだったオレに話しかけてくれて、友達になった同い年の女の子。
いつもニコニコ笑い、楽しそうな事に出くわせば片っ端から突っ込んで行き、とにかく楽しく生きる事を優先していた。
その反面、誰かと敵対すると容赦なく叩きのめしたりする事もあり、彼女に絡んで病院送りになった不良は数知れず。

本来なら苦手だったり怖かったりする筈なのに、自然と一緒にいたくて彼女とばっかりいた気がする。
クラスの奴らからカップルだの夫婦だのと言われて何回恥ずかしい思いをしたことか。
しかも彼女はそれすら楽しみ、火に油を注ぐような事をして、さらにエスカレートしていくばかりだった。

『グスッ・・・ほんとに？』
『ホントホント！』

オレの泣きながらの問いに、より一層明るく答える彼女。
今思い出すと死ぬ程恥ずかしいよな、めちゃくちゃ泣いてたし。

『いつ帰ってくるの？』
『えっと～～、二年半くらい？』

また泣きたくなった。

小学生の子供にとって、二年なんて気の遠くなる程長い時間だ。
それ以上かかるなんて、一生会えないと言われるくらいに悲しい。
だけど当時のオレは、なけなしの努力をして何とかこらえた。
これ以上大好きな子に迷惑を掛けたくない、なんて思ったから。

『ヒック・・うん、わかった！　みーちゃんが帰ってくるの待ってるから！』
『うん、なるべく早く帰ってくるからね。』

笑って言う。
彼女は少しだけ驚いた顔をすると、嬉しそうに笑い、静かに約束してくれた。

『だから・・・・・・・・・』

「さっさと起きやがれ。」
「うぎゃぁぁっ！！」

そこでオレは腹に激痛を感じ、叫びと共に夢から覚めた。

「ったく、もうちょっと穏便に起こしてくれよ～。」
「寝坊したツナが悪いぞ。」
「だからってボディブローはないだろ！　死ぬわ！！」
「いつまでもグチグチうっせぇな。」

塀の上を歩く赤ん坊らしきもの、リボーンが眉間に銃を突きつけてくる。

「ひいぃぃっ！　ちょっ、タンマ！！」
「マフィアなら過ぎたことを気にすんな。」
「だからマフィアにはならないって！」

これが最近のオレの日常。
彼女が外国に行ってからのオレの生活は、まさにダメライフの一言に尽きた。
少しは頑張ってみようかなと思い、勉強も運動も努力してみたけど、結果として自分のダメっぷりを再確認するだけに終わった。
それからずっとダラダラと毎日を過ごし、気が付けば中学生になっていた。

学校が変わったって何も変わらず。
そんな中、ある日突然リボーンがやってきて、オレの毎日は確実に変わった、いや、終わった？

いきなりマフィアのボスになれとか言われ、転校生の獄寺君に狙われ、今はオレの右腕になるとか言ってるし。
クラスメイトの山本と仲良くなり、最近じゃ京子ちゃんやそのお兄さんとも話す事が多くなった。

京子ちゃんやお兄さんとは、彼女を通して知り合ったけど、彼女が居なくなってからは疎遠になっていた。
だけどリボーンのせい？　おかげ？　で、お兄さんにボクシング部に勧誘されたことをきっかけに、また話すようになった。

「・・・ナ・・・おいツナ、聞いてんのか？」
「へ？　あ、ゴメン。　なに？」
「何突然ボーっとしてんだ、熱でもあんのか。」
「いや違うよ、昔の事思い出してた。」
「昔？」
「うん、始めて出来た友達のことを・・な。」
「なに？　ツナに友達なんていたのか・・・。」
「ひどっ！？」

そんなやり取りをしながら学校に着き、教室に向かう。
扉を開けると、既に獄寺君や山本は来ていた、京子ちゃんもいつも一緒にいる花って女子と話している。
獄寺君と目が合うと、まっ先に此方に来た。

「十代目、お早うございます！」
「うん、お早う獄寺君。」
「おっ、ツナじゃんか、今日は遅刻じゃないんだな。」
「山本、お早う。　リボーンに叩き起されたよ。」
「ハハッ、小僧は相変わらずみてぇだな。」

笑う山本。
悔しいけど、今こうやって友達と話せるのは結果的にリボーンのおかげかな。
チャイムが鳴り、皆が席につく。
担任が教室に入り、出席を取り始める。

（今、あの子はどうしてるだろう・・。）

自然と窓の外に目が向く。
彼女が外国に行って、もう三年半以上。
向こうで何かがあったのか、それとももう、オレの事なんて忘れているのかもしれない。
そう思うと、暗い気分になる。

向こうで仲のいい友達が出来たり、好きな男が出来ていたりするのかも知れない。
でも、せめて覚えててくれるといいな。

「よし、全員いるな。　あ～、突然だが、今日は転校生を紹介する。」
【おおぉ～～～！！】

担任の言葉に、クラスが活気づく。
男は美少女を、女は美少年を強く望んでいるだろう。
だけどオレは・・

（転校生かぁ～～、嫌な予感しかしねぇ～～～）

何故か、昔から転校生と言う言葉を聞くと嫌な気持ちになる。
理由はよく解らないが、こう、何というか、生理的に受け付けない

とでも言うのか。
とにかく嫌なのだ。

事実、彼女が居なくなってから、転校生が四人程、しかも全員オレのクラスにやってきて。
しかも何でか全員オレに話かけて来るのだ。
皆そこそこ顔が整っているので、クラスの子から沢山話を振られているのに、まるで眼中に無いみたいにオレに関わってくる。

男ならまだしも、女の子だった時はかなり辛かった。
クラスの男子だけじゃなく、上級生からのイジメ。
いつもオレに関わるのに、困っている時は不思議な程に現れない転校生。
まさにオレにとっては疫病神といっても過言じゃないくらいだ。

獄寺君はそんな事は全く無く、例外的な人だったけど、今回もそうだとは限らない。
朝からブルーになりつつも、なるべく前の席の人の背中に隠れるように、マトモな人でありますようにと祈りながら目を瞑った。

「またしても帰国子女だそうだ。　では、入ってきなさい。」
『は〜〜い？』

扉の向こうから聞こえた女子の声に、クラスの男子のテンションが上がる。
きっと何人かはガッツポーズでもしているだろう。
オレは机の上で顔を俯かせ必死に祈り続ける。
扉が開き、軽快な足音が響く。

全然緊張してないようだ。

やがて教卓の横に来たのか、足音が止まり、チョークで名前を書く音が響く。

「初めまして！　夜月満流です。　趣味はネットサーフィンです。
好きな食べ物はラムの香草焼きです。　特技は手刀で人を気絶させられることです。　宜しくお願いしまーーす？」
【おおおおおぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーー！！！！！！】
「・・えっ・・・？」

よほどレベルが高い子だったのだろう、クラスの男子が学校中に響かんばかりの歓声を上げている。
しかし、オレは完全に思考が停止していた。
聞き覚えのある自己紹介。
楽しそうな雰囲気が顕著に伝わってくるような弾んだ声。

どれも、居なくなった彼女を思わせる声で。
オレは自然と顔を上げ、転校生の顔を見つめる。

「おっ！　ツナ君見っけ！！　久しぶり～～～～？」
【何ーーーーー！？】

オレの顔を見た瞬間、太陽みたいな笑顔で手を振ってくる彼女。
同時にクラスの男子から「またか！」とでも言いたそうな視線が突き刺さる。
しかし、いつもと違ってオレにはそれが全く気にならなかった。
嬉しそうに手を振り続ける彼女に、目が釘付けだったから。

「みー・・・ちゃん？」

第十八話（後書き）

三年ぶっ飛んで再会！！ｗｗｗ

勿論ですが、ツナの嫌悪感は満流が居なくなる前の転生者達に対する嫌悪感を、体が何となく覚えてるって感じですね。

それが満流が居なくなってからもどんどん増していたと。

もはや転校生がトラウマになっているツナでした。ｗｗｗｗｗｗ

因みに時期としては、少なくとも雲雀との初戦闘は終わった頃かな？

九月の後半くらいだろうか？

ではまた次回。

第十九話

いや～、予想以上に驚いてるね～。
私の顔を見た瞬間、まさに鳩が豆鉄砲くらった様な顔をするツナ君
流石に三年も経つと成長してるね～。
常時ポカンとしているような雰囲気は変わってないけど。
それにしても、いるねぇ。痛者共が。
このクラスだけで三人、学校全体だ十五人かな？
一人は訝しげながらも、周りの人達と大差ない反応の女子だ、多分この世界の誤差程度に思っているんだろう。
二人目も女子で、こっちはあからさまな敵意を向けて来る。
私の事を自分と同じ転生者だと思い込んでるなぁあれ。
一番スタンダードなタイプだ。
三人目は男子で、もう完全に下心丸出しの気色悪い視線を向けてくる。
よし、とりあえずコイツを最優先にぶっ殺すのは確定だね。
上から順に、痛者３２５号、３２６号、３２７号としよう。
いやぁ、改めて見ると番号増えたなぁ。
あまりにも多すぎて漢数字表記が英数字表記に変わってしまう程に。
そんでもって、コイツらとは別に、さっきから物凄いガン飛ばしまくってくるのが居るんですけど。
前から二列目の席に座る灰色の髪の生徒。

自分、不良ですから。　と主張せんばかりの格好で、いたる所をアクセサリー類で飾っている。
何かしたっけ？

「静かにしろ！　何だ沢田、お前たちは知り合いか？」
「え！？　あっ、えっと・・まぁ・・・。」

突然話を振られ、口ごもってしまうツナ君。
人との会話が苦手なのも相変わらずみたいだね。
なんか久しぶりにからかいたくなっちゃった～？

「先生、知り合いじゃありません。　私はツナ君の許嫁で～す？」
「は？」
「え？」
【・・・・・・・え？】

沈黙する教室。
しかし、耐性のせいか、いち早く状況を理解しだしたツナ君の顔が青くなり始めた。

【なあぁぁぁぁんだっっっってええぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！？？】
「み。みーちゃん！？　何てことを！！」
「テヘッ？」

今度は昔の様に、真っ赤になって訴えるツナ君、懐かしいなぁ～。

「し、静かにしろ！！　驚くのは無理もないが、質問は授業が終わってからだ。　とりあえず、夜月の席は窓際の後ろから二番目のあ

そこだ。」
「はぁい。」

この状況で授業を優先出来る辺り、この担任はかなりのやり手みたい。
席に着き、周りの生徒と挨拶を交わす。

案の定、授業が終わった瞬間クラスの九割の生徒に囲まれ、質問攻めに会う。

「何処に住んでるの？」
「趣味は？」
「好きな男子のタイプは？」
「スリーサイズは？」
「さっきの話って本当なの！？」
「マジであのダメツナと付き合ってんの！？」
「嘘だと言ってくれーー！！」

などなど、人混みの隙間からツナ君を見てみると、二人の男子と話しをしているようだった。
その内の一人が、先程の不良っ子だったのは意外だったけど。
ちゃんと友達が出来たんだね、よかった～。

それからも、何故か他のクラスの男子までもが押し寄せ、結局休み時間にツナ君と話す機会は無かった。
なので、昼休みのチャイムが鳴った瞬間、私は自分の弁当を引っ掴み、ツナ君の横まで移動。

「ツナ君、一生にお昼食べよう！」
「え？　あ、みーちゃ・・・うわぁ！！」

問答無用で首根っこを掴み、猛ダッシュで離脱。
なんか後ろから「十代目ーーーーー！！！」とか聞こえたけど無視。
階段を駆け上がり、屋上に続くドアを蹴破り、そのままの勢いで着地。
ズザザーっと、上履きが地面に擦れる音が鳴り、若干焦げ臭い臭いが漂う。

「よっし、到～着？」
「到～着？　じゃないよ！　窒息死するかとおもったよ！？」
「ドンマイ。」
「・・・はぁ、何というか。　みーちゃんは相変わらずだね・・・。」
悟った顔で溜息を吐くツナ君、だけどその顔には、隠しきれない笑みがあった。

「改めて、久しぶり、ツナ君。」
「うん、久しぶり、・・・それと・・・。」
「ん？」
「・・おかえり・・・・。」
「・・・ただいま？」

優しく笑い合う。
痛者共のゴキブリ並のしぶとさと繁殖率のせいで、一年以上遅れちゃったけど。
それでも、約束通りに帰ってこれた。

「十代目ー！　ご無事ですかーー！？」
「おや？」

「げぇっ！　獄寺君！？」
「おいおい獄寺、落ち着けって。」
「うっせぇ山本！　野球バカは引っ込んでろ！！」

そう言って、慌ただしく屋上にやって来たのは先程ツナ君と話してた二人。

「みーちゃん！　逃げて！！」
「？　なんで？」
「いいから早k・・」
「果てろっ！！」

不良っ子が、懐から何やら筒状の物体を取り出し、そこから生えている短いヒモにタバコの火を点けている。
そんでそれを私の方に一斉に放り投げてきた。

「なんか見た目ダイナマイトっぽいものが・・」
「みたいじゃなくて本物だから！！」
「マジか・・。」
「とにかく逃げt・・って！　うわーー！！」

面白いくらいに慌てふためくツナ君と共に、私は爆炎に飲まれた。

「十代目っ！！」
「おい、いくらなんでもやり過ぎだぜ獄寺！」

山本の馬鹿が言ってくるが、俺の耳には届いてなかった。
突然やって来た妙な女、事もあろうに十代目の許嫁とか抜かしやがった！

休み時間はクラスの連中に囲まれてやがったから、さして警戒せずに済み。
十代目も、奴とは昔の友達だとおっしゃっていた。

だが、なんとアイツは昼休みになるなり十代目を拉致りやがった！！
油断していたのが間違いだった。

昔の知り合いが敵に寝返り、命を狙ってくるなんざ、俺らの世界じゃ日常茶飯事。
いくら十代目のかつての友人だからって、今もそうである保証は何

処にもねぇ！

もし十代目の身に何かあったら、右腕として、そしてオレに十代目の安全を任せて下さってるリボーンさんに合わせる顔がねぇ！！

急いで追いかけ、辿り着いたのは屋上。

そこでは、なんと十代目が勇敢にもあの女と向き合い、立ち向かっているお姿だった。

命を狙われてるにも関わらず、余裕の笑みさえ浮かべておられる。

その姿は、まさに次期ボンゴレに相応しい勇姿だった。

こうしちゃいられねぇ、俺も右腕として、加勢して差し上げねぇと！

そう思い、ダイナマイトを投げた。

女は放心して反応出来てねぇ、楽勝だと思った。

しかし、何と十代目はアイツを庇って爆発に巻き込まれちまった。

自分の命を狙った奴を、知己だからって庇うなんて、何て器のでけぇお人だ！！

「十代目ーーー！！　大丈夫ですかーー！？」

「ツナーー！　返事しろーー！！」

山本と共に何度も呼びかけるが、十代目からの返事はない。

あの人がこれしきの事でくたばる訳はねぇが、重症を負っちまってたら大事だ。

「いった〜〜、危ないって、何でそんな物騒なモン持ってるかな〜〜？」

「っ！　テメェっ！？」

「おっ、無事みてぇだな。」
煙の中からひょっこりと現れたのは、十代目を抱えたあの女だった。

危ない危ない。
咄嗟に炎で相殺しなかったら危険だったよ〜。
前に漫画の主人公がやってたのを適当に真似てみたけど。
こんなん本当に出来んの？　って思ってたけど、人間やれば出来ちゃうもんだね？
煙のなか、ツナ君を抱えて歩き、さっきからツナ君を読んでる声の方へ行く。
私の姿を見て、爆弾少年は再び警戒し、もう一人はホッとした顔を見せる。

「十代目に何かしてねぇだろうな！？」
「いやいや、君にだけは言われたくないよ。　ただ気を失ってるだけだって～。」

ツナ君をゆっくり床に寝かすと、二人が駆け寄って来た。
一応一歩下がって警戒されないようにしておく、またダイナマイトは勘弁して欲しいから。

「十代目！」
「うっ・・・うぅ・・ん・・。」
「傷も全くねぇみたいだし、全然無事みたいだな。」

傷が無い事を確認し、安堵する二人。
確か山本？　とか呼ばれてた方がニカッと笑って私を見る。

「あんがとな、俺のダチ助けてくれてよ。」
「いいってことよ～、ツナ君は私の大事な友達だからね～？」
「ハハッ、そうか！　じゃあダチのダチって事で、俺らもダチって事だな！」
「おおっ、いいね～そう言うの。　嫌いじゃないよ！」
「そっか、俺は山本武ってんだ、よろしくな！」
「夜月満流だよ～、よろしくね、武君？」

お互いに握手を交わす私達、どうやらツナ君はいい友達を見つけたみたいだね～。

「おいコラ！　何仲良くなってんだ野球バカ！！」
「いいじゃねぇか、夜月はツナを守ってくれたんだぜ？」
「ぐっ！？　だ、だからって・・・・。」

「と言うか、何で君は私を襲ってきたの？」
なんやかんやで不明のままなんですけど。
「テメェが十代目のお命を狙ったからだろうが！！」
「はい？」
「おいおい獄寺、ここでもマフィアごっこやってるのか？」
「ごっこ？」
「うっせぇ！　ごっこじゃねぇって言ってんだろうが！！」
ぎゃあぎゃあと騒ぎ出す獄寺なる不良、それを呑気な笑顔で受け流す武君。
その会話を聞いていると、どうも私が殺し屋か何かと思われていたらしい。
なる程、ツナ君を拉致ったのがそう言うふうに解釈されてしまったか。
というかこの発想と今の言動からして、この爆弾不良っ子はコッチの世界の人間だよね～。
「ちょっと待たれい爆弾っ子よ、私は殺し屋なんかじゃないですよ？」
「じゃあ何で十代目を拉致りやがった！」
「それはホラ、積もる話もあるのにクラスの質問攻めのせいで時間が取れなかったから、実力行使に移っただけだよ。」
「そ、そうか・・・・なら、あの爆発からどうやって逃れた！　一般人に出来る芸当じゃねぇぞ！！」
「さぁ？」
「はぁ！？」
「いや、逃れるも何も。　ただツナ君庇ってうずくまってただけだ

し。」

平然と嘘をつく、ホントの事言う訳にもいかないしね。

「まぁ運が良かったんじゃない？」

「そ、そんな訳！」

「おい、もうやめろよ獄寺。　いくら何でもネタ引き伸ばし過ぎだぜ？　それに夜月はツナを守ってくれただろうが。」

「・・ちっ！　今回はこれくらいにしといてやる・・。」

「うぅん・・あれ、ここは・・・。」

タイミング良く目を覚ますツナ君。

「十代目！　大丈夫ですか！？　何処か具合が悪かったりとかはっ！？」

「うわぁ！　ご、獄寺君！？　う、うん、別に大したことないよ・・。」

「そうですか、よかった・・・。」

ホッとした顔をする爆弾っ子、本当にツナ君の事大事にしてるんだねぇ～。

「よかったなツナ、夜月が助けてくれたんだぜ？」

「え、みーちゃんが？」

「ブイ？」

「そっか・・・ありがとう。」

「まぁ助けたって言ってもうずくまってただけだけどね～。」

「それでも・・・・・。」

「君たち、何してんの？」

「「「っ！？」」」
「ん？」

屋上の入口から聞こえて来た声に、全員がそちらを向く。
そこには、学ランを肩に掛け、腕を組んで佇む男子。
細く、つり上がった目に、腕には風紀の字をあしらった腕章。
触れただけで傷が出来そうな空気が体から滲み出ている。

って言うかアレって・・・。

「校内での破壊活動と、それによる屋上の損壊、咬み殺すには充分過ぎるね。　まぁボクのお気に入りの場所で群れてる時点で終わりなんだけど。」
「ひいぃぃっ！　ひ、雲雀さん！？」
「くっ！　テメェ！！」
「やっべぇな・・・。」

思わず吹いちゃいそうなくらいに怯え出すツナ君に、再び爆弾を取り出して威嚇する爆弾っ子。
武君も、顔に冷や汗が浮かんでいる。

この四人、何かあったのかな？

「はっ！　みーちゃん、今度こそ逃げて！！」
「これまたどうして？」
「雲雀さんは本当にヤバイんだって！！　女の子でも容赦ないんだから！！」
「ワォ、今日は女連れかい？　まぁ同罪だから君の言うとおり・・・

に・・・・・・。」

私と目が合った瞬間、固まった。
その様子に、ツナ君達が困惑してる。

「え？　アレ？　何で雲雀さん、固まってるの？　何でみーちゃんをじっと見てんの？」
「わかりませんが、何があるか分かりません。　十代目は下がってください！」

ツナ君を庇う様に移動し、様子を伺う爆弾っ子。
私？　とりあえず第一声は向こうに任せようと思って？

ツナ君達からすれば痛いくらいの沈黙が続く。
時間にしてみれば数十秒程度だが、まるで何時間にも感じているかもしれない。

「君・・もしかして、満流かい？」
「そうだよ～、久しぶりだね、恭弥君？」

ようやく放たれた私達の言葉に、周りの時が止まった。
数瞬後、屋上に驚愕の叫び声が響き渡った。

第十九話（後書き）

あれ？　何で雲雀が転校生の事を把握してないの？

って思った人、次回説明されるのでご安心を。

ちょっとずつ主要キャラ視点も取り入れて行くつもりです。

とりあえず今日は獄寺視点、不自然ではなかったでしょうか？

獄寺の、日常における基本バカっぷりを少し入れてみましたｗｗｗｗ

ではまた（ｏ・・ｏ）／

第二十話（前書き）

ちょい短いです。

ネタを文章にするのが難しくなってきたｗｗｗｗｗ

ただでさえ書く時間が少ないのに、書くスピードも落ち気味ｗｗｗ

ではどうぞ。

第二十話

屋上に鳴り響く金属音。
普段なら並盛の町を一望出来て、昼にご飯を食べたり昼寝をするにはもってこいの、一部の人には人気な場所であり、しかしある人物が好んで昼寝の場所に使っていることもあり、あまり使われていない所でもある。

そこは今や獄寺君のダイナマイトの嵐によって、悲惨な光景となっており、あちこちにクレーターが出来ている為、デコボコ状態である。
下の階に被害が及んでないのが唯一無二の奇跡と言えるくらいだ。

そんな屋上のど真ん中で、さっきのある人物こと雲雀さんと、オレの大切な幼馴染のみーちゃんが闘っていた。
雲雀さんとみーちゃんが知り合いだった事も驚きだったけど、それ以上にみーちゃんの強さには唖然とするしかない。
オレの隣で、獄寺君も口をあんぐりと開けて固まってるし。

山本ですら驚きを隠せない様子でいた。

「おいおい、夜月ってすんげぇな、雲雀と互角にやり合ってるぜ？」
「マジ・・・かよ・・・。」

みーちゃんが普通の人よりも強いのは知ってたけど、まさかこんなに凄いなんて。
雲雀さんは並盛最強で、獄寺君と山本、それに死ぬ気弾でそれなりに戦えるオレの三人で手も足も出なかったのに。
それと互角、むしろまだまだ余裕って顔してるようにも見える。

そもそも雲雀さんも妙だ。
さっきだって、みーちゃんが雲雀さんの呼びかけに答えると、突然ニヤリと笑って、次の瞬間には一気に襲いかかってたんだから。
みーちゃんはみーちゃんで、最初から分かってたみたいに警棒みたいなの取り出して普通に対応してたし。

それを見て、雲雀さんが嬉しそうに笑った様に見えたんだ。

「ほれほれど～した恭弥君？　この程度なのかな～～？」
「何言ってんの？　これからだよ。」

みーちゃんの挑発に対し、今までの倍近い速さと手数で攻める雲雀さん、案外乗りやすいんだな。
しかしみーちゃんも余裕の態度を崩さずに避ける、というかもうオレには見えなくなってきた。
いや、最初からよく見えないんだけど、何というかもう二人の体がブレてきて見にくい。

ただでさえクレーターのせいで足場が悪いのに、二人はそんなのお構いなしに動き回る。
というか、今更だけど何でこんな騒ぎが起こってるのに誰も来ないんだ？
教師が確認に来たりするんじゃないの普通？

そんな事を考えていると、校内に昼休み終了のチャイムが鳴った。

「あ、チャイムだ。」
「じゃあそろそろ教室に戻るか。」
「そうだな、ここにいても面倒なだけだ。」

二人が、どこか悟ったような様子で言葉を交わす。

「で、でもみーちゃんが・・・。」

「あぁ、私はいいよ～～？　もう少し恭弥君と遊んでいくから～～～？」

「よそ見してる暇があるのかい？」

「実はあるっ！」

「咬み殺すっ。」

雲雀さんの猛攻を避けながらヒラヒラと手を振っているみーちゃん。

なんか全然大丈夫っぽい・・・。

気にしつつも、三人で屋上を後にし、教室へと戻っていった。

ツナ君達が教室に戻ってから、既に三回チャイムがなっている。

そう、つまりは現在放課後である。

「えっと〜〜、まだやるの？」
「当たり前だよ、今日こそ咬み殺してあげるから。」
「いや、謹んでお断りします。　ていうか、お腹が空いて力がでない〜。」

会話をしながらも、勿論攻撃は続いている。
昼飯すら結局食べていない、それどころか朝だって実は遅刻しかけていたから食べてないのだ。
流石にお腹の虫の叫びが尋常じゃない。

「あれだよ、ちょっと休憩しよ？　ちょこっとコンビニ行ってのり弁でも買ってさ〜。」
「却下、そう言って逃げる気だろう？」
「いやいや、絶対逃げないから、神に誓うよ！　これが嘘をつく人の目に見える？」
「見える。」
「即答ですか・・・・。」

軽くショックを受けながらも、恭弥君の攻撃を受け続ける。
やっぱり力は男の子には勝てず、ちょっと腕が痺れてきた。
まぁ律儀に受けずに避ければいいんだけど、あんまり避けすぎると不機嫌になってさらに勢いが増すからね。

「委員長！」
「っ！」
「ん？」

突然聞こえてきた声に、お互いに止まる。
声のしてきた方を見ると、リーゼントがいた。

なにあれ？　今の時代にリーゼント？　もはや希少種だよ、幻獣種だよ。

日本の幻の遺産に遭遇した私は、しばらく硬直してしまった。
恭弥君がその人と何やら会話している。

「なに？」
「お楽しみの所申し訳ありませんが、風紀委員の仕事が溜まっておりまして、委員長でないと処理出来ない物も多数あります。　それに先程、複数の場所でチンピラ共と役員達が交戦状態になりまして、応援要請が来たのですが、人手が全く足りていません。」
「ふぅん、そう・・・。」

何やら重い雰囲気になってきたような、思案顔になってる恭弥君。
とりあえず、これでやっとご飯にありつけそうなので、あのリーゼントにはお礼がしたいくらいだ。
その時、ふと恭弥君が私を見て、ニヤッと笑った。

笑った、と言っても場を明るくするようなモノでは決してなく、嫌な予感しかしないような邪悪な笑みだ。
何か言われる前に逃げろ！　私の第六感的な物が警報を鳴らす。

「そ、それじゃあ私はこれd・・。」
「ちょっと待って、一緒に来て貰うよ。」

遅かった・・・。

「いや、実はちょっと急用が・・。」
「却下。」
「持病の尺が・・・。」

「君が持病なんて持つたまかい？」
おいちょっと待て、どう言う意味だそれ。
どんだけ人外扱いされてるんだ私は。
「実はお父さんが現在進行系でデッドオアアライブをさ迷っている状態で・・・。」
「君、両親とっくに死んでるって言ったよね。」
「あ・・・。」
そういや恭弥君には家庭事情は言ったんだった、因みに沢田家に言ったのと一緒。
「もういいかい？　暇じゃないんだから時間を無駄にしないでよ。」
「ついさっきまでおもっくそ無駄に過ごしてた人間のセリフじゃないよね。」
「何か言った？」
「いえなにも。」
仕方なくついて行く。
恭弥君にの後ろを歩き、隣でリーゼントさんのリーゼントがゆっさゆっさと揺れていた。
名前を聞いたら草壁さんと言うらしい、風紀委員の副委員長だそうだ。
やがて着いたのは、何と応接室。
誰かお客さんにでも会うのかな？　と思ったら、なんとここが風紀委員の部屋だそうな。
「恭弥君、応接室の使い方って知ってる？　学校の客人をもてなす

為に使うんだよ？」
「学校の部屋の使い方はボクが決めるんだよ、当然だろ？」
「さいですか・・・。」

外国に行った時とかに、文化の違いによる価値観の差異で、会話が噛み合わなくてお互いに　？　な状態になる時って偶にあるじゃない？
その時と非常に似てる気がするんだ。

一番奥にある立派な椅子に腰を降ろし、草壁さんがお茶を置く。
椅子に座るよう促され、客用のソファーに座る、結構座り心地が良く、寝たら気持ちいいだろうなぁ～と思った。
私にも草壁さんがお茶を入れてくれたので、お礼を言いつつ一口飲む。

は～～～、何というか、和む。

「さて、話だけど、まぁ簡単な事だよ、満流には風紀委員に入ってもらうから。」
「いや、予想はしていたけども・・・。」

既に決定事項、と言わんばかりの口調。
いや、彼の中では実際にそうなんだろうね。

「嫌だよ面倒くさい。」
「これは決定事項だよ。」
「だが断る。」
「却下。」
「嫌だ。」
「却下。」

「嫌。」
「駄目。」
「イヤ。」
「ダメ。」
「あ、あの委員長・・・とりあえずウチの風紀委員会について説明してからの方が良いのでは？」

小学生レベルの言い合いになった所に助け舟を出したのは、やはりと言うか草壁さん。
どっかの委員長（笑）と違って大人だね？

「・・・・まぁいいや、じゃあ草壁、宜しく。」
「はい。　では夜月さん、ご説明させていただきますね。」
「ほ～い。」

そこから草壁さんによる並盛風紀委員の説明が行われた。
正直、話の間に逃げる策でも考えようか～とか考え、しかしせっかく説明してるんだからちゃんと聞かなきゃな～とか思いながら聞いていた。

しかし、話を聞いていく内に、私の考えは傾き始め、聞き終える頃には逆転していた。

「何て楽しそうなんだ！！」

つまり、うざったいクズ共を好き放題にボコれると言うわけだ。
法律？　そんな常識、俺の風紀には通用しねぇ！　な存在になれるわけだ！！
さっきまで感じてた倦怠感なんて吹っ飛んだよ、参加しない理由がない！

しかも遅刻欠席やり放題？　まさに楽園（フロンティア）っ！！
さらには武器の携帯、バイクなどの乗り物も自由！
書類仕事なんぞ、ヴァリアーに居た頃の地獄勤務に比べれば紙切れ同然、入らない手は無い！！

「是非やらせて頂きますっ！！」
「そ、そうですか。　では、この書類に記入を。」
「は～い？」

渡された書類に必要事項を書き込んでいく。
所々に、ヴァリアー入隊時のと似たような部分がある辺り、やっぱり普通じゃない。

「出来ました！」
「はい、確かに。」
「終わったかい？　なら早速他の委員の応援に行って来て。」
「了解です、委員長殿？」

恭弥君が投げ渡してきた腕章を付け、早速現場に急行する。
いや～。初日からこんな事になるとはね！
これから楽しくなりそうでワクワクするよ、やっぱ人生楽しんだ者勝ちだよね？

第二十話（後書き）

リボーンのＳＳで風紀委員加入って多いですよね～～。

雲雀との絡みはやっぱ風紀員っしょ。

いや、単に私に独創性が無いだけかｗｗｗｗｗ

次はもっと早く投稿出来るよう頑張ります。

ではまた

第二十一話（前書き）

一度でいいからネタ回やってみたいなぁって思いかきました。

二話構成でお送りします。

第二十一話

「はぁ、みーちゃん怪我とかしなかったかなぁ？」

あの後、授業中もずっと屋上から金属音が微かに聞こえていた。
クラスの皆が何事かと思い、さらには目撃者が一人居たらしく、その人が「転校生が雲雀さんに絡まれた。」と発言し、それからはクラスの雰囲気がお通夜状態だった。

最早完全にみーちゃんは地獄行き決定になっており、中にはマジですすり泣きしている人すらいた程に。
あれは短時間でみーちゃんが好かれていたのか、それとも雲雀さんの恐ろしさを改めて実感して恐怖していたのか。
どちらにせよ、次の時間も、そのまた次の時間も、クラスの状態に疑問を持った教員に生徒が事情を説明し、雰囲気が重くなると言う負のスパイラルが続いたのだった。

しかし、皆の予想を大きく外し、金属音は放課後まで鳴り続けた。
いつまでやってるんだと言う思いと、何故こうまで続いているんだと言う疑問を、クラスどころか全校生徒が抱き、勇気ある生徒が偵察に行った。
その結果、並盛中の全体に、「転校生が雲雀さんと五角に殺りあっている！」との情報が回った。

当然、全校生徒が驚愕し、証拠が見たいと多くの生徒が口々に言い出した。
しかし、大勢で押しかけるのは大きな危険を伴うため、陸上部の主将と剣道部の主将（代理）、空手部の主将の三人を筆頭に、カメラ等の機材に詳しい生徒が二人選抜された。

かくして、≪雲雀さんの戦いを隠し撮りしよう大作戦≫と言う名の、並盛中学歴史史上、永遠に語り継がれるだろう究極のミッションが開始されたのだ。

「こちらヒーロ1、現在三階と屋上の中間地点、階段の踊り場にいる、オーバー。」
『こちら司令部、了解した、アイボ1からの報告では、現在も特撮バトル展開中との事、充分に用心されたし、オーバー。』

一体どこから持ってきたんだ、とツッコミたくなる程本格的なトランシーバーを持った怪しげな男。
緊急避難用のヘルメットを被り、陸上競技用のユニフォームを着たこの男は、陸上部主将である。
今回の究極ミッションが立ち上がった時、まっ先に志願した英雄である。
因みにヒーロ1とは彼のコールサインであり、言うまでもなく英雄・

ヒーローから来ている。
アイボとはサポート部隊、相棒からもじっている。
サポート部隊は、現在人外バトルの現場の屋上の隣、もう一つの屋上から、双眼鏡で現場の状況を把握し、司令部を通して伝える役割を担っている。

「よし、引き続き任務を続行する。　俺たちが、並盛の新たな歴史の記録者になるんだ！」
「ヒーロ2、了解！」
「ヒーロ3、了解！」
「ヒーロ4、了解！」
「ヒーロ5、了解！」

リーダーの声に鼓舞される様に、他の実戦部隊四名から意気のいい声が上がる。

ヒーロ2は剣道部主将代理（諸事情により）、ヒーロ3は空手部主将。
ヒーロ4・5は撮影用カメラを扱う為のカメラマンと、何かあった時のサポートである。
これが、今回のミッションに名乗りをあげ、その中から全校生徒の厳選により選ばれた精鋭の勇者だ。

何でこんな短時間で全校生徒の厳選が終わるんだよ、とか、準備するの早すぎだろ、等の疑問は残るが、それは今回の出来事が、並中にとってどれだけ重要度が高いかを示していると言えるだろう。
心を一つにした者たちの作業スピードは、まさに団体と言う枠において、境地とも言える物だったに違いない。

「よし、それではこれより、屋上への侵入を試みる。」

「「「了解っ！」」」
「り、了解・・・。」
「ん？」

三名が返答する中、残り一名、カメラマン役の生徒が暗い顔であった。

「どうした、怖いか？」
「い、いえっ！　そんなことは・・・。」
「無理をするな、震えているぞ。」
「あ、こ、これ・・は・・・・。」

図星を突かれ、黙る生徒。

「少年、お前は一年生だな？」
「はい、そうです。」
「何故、この作戦に志願した。　危険なのは承知だろう？」
「勿論です。」

ヒーロ１の問いに、即答するヒーロ４。

「ではなぜだ。」
「俺は、ずっと機械弄りしか能がない落ちこぼれでした。　勉強も、運動もダメで、これしか取り柄がないんです。」

何やら突然身の上話を始め、これまた何故か全員が静かに聞き入っていた。

「親や友人には、取り柄があるだけいいじゃないかって言われました。俺も、何もないよりはマシかなって思ってました。」

「ほぅ。」
「でも最近、小さいころから何の取り柄もなくて苛めれれてた、一年の沢田って奴がいるんですけど。　そいつがやけに凄い事をやるようになったんです。」
「沢田と言えば、剣道部主将の持田を素手で倒したっていう奴じゃないか？」
「はいそうです。」

代理で主将をやっているヒーロ2が答える。

「それ以外にも、バレーの試合で活躍したり、噂じゃボクシング部の主将に誘われたり、色んな事がこの短期間で起こってるんです。」
「ふむ、確かにそれは凄いな。　苛められていたと言うのが信じられん。」
「だから思ったんです。　安心なんかしてちゃ駄目なんだって、あれだけ駄目な奴って言われてたアイツが、あんなスゲェ事やってるんだから俺だって何かやりたいって。　そんな時、今回の作戦で、カメラを扱える人が必要だって聞いて、これしかないって。」
「ふむ、成程な、よくわかった。」

モブキャラの長話が終わり、やっと進展である。

「皆も聞いてのとおりだ。　ここには、この少年のように、己を変えたいと言う高い志を持ってこの任務に当たっている者もいる。そして、それは俺にも、いや、お前達にも言える事だ！」
「「「？」」」

分かっていない様で、三人が不思議そうな顔をする。

「いいか、今回我々は、雲雀恭弥の戦いを隠し撮りすると言う偉業

を成す。　しかしそれは当然、本人には無許可だ。　従ってこの任務は、風紀委員に刃向かう行為でもある。」
「「「っ！！」」」
「無論、バレればタダでは済むまい。　いや、間違いなくバレるだろう。　私達の任務達成条件は、撮影し、皆に届けられるかどうかだ。　撮影する前に取り上げられれば、制裁だけでなく、この作戦に臨んだ多くの者たちの思いが無に帰すのだ！！」

無駄にシリアスな空気に染まりつつある現場。
因みに連絡用の回線も開いており、司令部やアイボチームも聞き入っている。
もはや彼らの顔は、これから戦場に赴く兵士のそれである。

「しかし、それでも我らはやり遂げねばならない！　これまで、あの雲雀恭弥がこの並中に入学してきたあの日から、我らは風紀委員の驚異に怯え、従ってきた。　しかし今日、この日、我らは自らの意思を持って風紀委員に反抗するのだっ！」

周りから、おおぉっと声が上がる。

「我らは、変わらなければならない！　学校生活を、いや、未来を切り開く為に！！」
「そうだっ！」
「俺たちがやるんだ！！」
「目にものみせてやるぜ！」
「やってやる、やってやるさ！」

部隊の士気は無駄にＭＡＸである。

「よし行くぞ。　だが、これから死地に赴く諸君には無理強いであ

ろうが、敢えて言わせ貰おう！　死ぬなっ！！」

【了解！】

一致団結となったチームが、いよいよ戦場へと踏み出す。

これは、並盛中学校に永遠に語り継がれる、モブ勇者達の物語・・・・。

第二十一話（後書き）

本編が早く読みたかった人、ごめんなさいm（＿＿）m

もう一話続きます。

第二十二話（前書き）

続いてＧＯ！！

第二十二話

最強の風紀委員長こと、雲雀恭弥。
謎の美少女転校生こと、夜月満。

二人の人外が、これまた人外バトルを繰り広げている屋上を見た瞬間、彼らの脳は停止した。
しかし、それを責められる者は何処にも居ないだろう。
何故ならそれ程までに、彼らはとんでもない光景を目の当たりにしたのだから。

「さっさと咬み殺されなよ。」
「やなこったい？」

平然と殺すとか言っている雲雀恭弥に、平然と応戦している転校生。
これはいい、いや、本来ならこれらも尋常じゃない状態ではある。
不良達を束ね、並盛最強と呼ばれる男と、見た目はか弱そうな少女が平気な顔をして五角に戦っているのだから。

さらには二人の動きが早すぎて、こころなしか残像すら見えている気がする。
これだけで既に人外魔境である。
しかし、それ以上に勇者チームの思考を停止させるものがあった。

「おい、これ、夢だよな？」
「いや、夢以外ありえないだろ。」

ヒーロ2・3が現実逃避を始めた。

「お、落ち着け。　気持ちは解るが、これは現実だ。」
「だ、だって隊長。　これはあんまりでしょう。」
「そうですよ、だって・・・地面が。」

そう、彼らの見た屋上は、もはや彼らがのんびりと過ごしたかつての姿を残していなかった。
そこらかしこにクレーターのような物が出来ていて。
一面がデコボコになっているのである。

とてもじゃないが、人が歩ける場所ではない。

「ありえねぇ、こんなことが人間に出来んのかよ！？」
「マジで化け物だ、アイツら！」
「こんな状況だなんて聞いてねぇぞ。」

恐らく、アイボチームの視点からでは、ここの地面の状態までは見れなかったのだろう。
しかし、この惨状は二人の仕業ではないが、彼らにそれを知るよしもなく、彼らからすればこの惨状は二人によってもたらされた地獄以外の何者でもない。

「くっ、怯むな！　私達が吉報を示す時を、多くの者達が待っているのだぞ！！」
「「「「っ！！　了解！」」」」
「よし、所定の位置に移動する。」

何とか使命を思い出し、前進する一行。
自分たちが入ってきた入口のさらに上、貯水タンクの所まで移動し、少し上の場所から撮影する作戦である。
ここで最も重要なのが、二人に極力気づかれずに撮ると言うこと。

色んな意味でとばっちりを食らわぬ様にして、被害を最小限に止め、撤退時の戦力を確保すること。
万が一の場合、記録テープをカメラマンが持ち帰り、他の者が全力で足止めする為だ。
いわば緊急時の死兵である。（実際には階段の時点で気づかれているのは知らぬが仏）

しかし、彼らに降りかかる驚異は、それだけでは無かった。

「ぐはぁっ！」
「！？　どうした、ヒーロ2！」

突如倒れたヒーロ2の元に行くと、足元に拳大のコンクリの塊が転がっていた。

「！　こ、これは、まさか！？」

そう、雲雀と満流。
二人が戦う余派として、例えば雲雀の攻撃を満流が避けた結果、地面に当たり、衝撃でコンクリの破片などが周りに飛ぶなどの二次被害が発生しているのだ。

「くっ、まさかこんな伏兵が！」
「た、隊長、行って・・・ください。」
「ヒーロ2！？」
「自分は、ここまでです。　どうか自分の・・分ま・・・・で・・。」

息絶えるヒーロ2。

「あえて言った筈だぞっ！・・・・・くそっ！　行くぞ、犠牲を無駄にするな。」
【了解！】

悲しみをバネに、進んでいくヒーロ達。
貯水タンクの元に辿り着き、遂に撮影を開始する。

「よし、これより出来る限り長く撮影を続ける。　継続が困難と判断した場合、ヒーロ４は記録を持って撤退、他はそれを全力で援護だ。」
【了解！】
「よし、では撮影開始！」

号令と共に、ヒーロ４がカメラをまわし、他のヒーロは、飛来するコンクリの塊を排除している。

「くっ、数が多い！」
「三人で対処してるってのに！」
「怯むな、散っていったヒーロ２の為にも！」

何とか己を奮起させ、応戦していく。
しかしコンクリの塊は、減るどころか増える一方。

『こちら司令部、アイボ１より、戦闘の激化が報告されている！
そちらはだいじょうぶか！？　オーバー。』
「こちらヒーロ１！　戦闘の激化に伴い、コンクリの破片の被害あり！　既にヒーロ２がやられた！！」

トランシーバーの奥から、息を呑む気配が伝わってくる。

このやり取りの間にも、破片の勢いは増すばかり。

「くっ！　カバーしきれない！」
「はっ！？　しまっ！！」
「えっ？」

ヒーロ３が対処しきれず破片を取り逃がす。
それは、まっすぐにヒーロ４の顔面へと向かい、放心した彼には避けられない。
誰もが目を逸らしそうになった瞬間、背後から一つのかげが飛び出す。

「お前は！？」
「「「ヒーロ２！！？」」」

誰もが息絶えたと思っていたヒーロ２が、捨て身で破片に向かっていた。

「俺はユニオｎ・・並盛のぉ、フラッグファイｔ・・・剣道部主将（代理）だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

雄叫びを上げながら破片と激突し、後方に吹っ飛んでいくヒーロ２。
彼が最初に何を言おうとして修正してのかは、永遠の謎である。

「ヒーロ２うぅぅぅぅ！！！」

自身を庇って散ったヒーロ２の死に様に、ヒーロ４は悲しみの叫びをあげる。
しかし、被害はそれだけでは無かった。

「グゥッ、駄目だ！　もう持たな・・グハッ！！」
「ウワァァァァ！！！」
「ヒーロ3！　ヒーロ5！」
凶刃に倒れていく仲間。
『こちらアイボ1！　破片の被害が此方にも拡大して！？　グハァァァ！！』
『こちら司令部！　巡回中の風紀委員に存在が知られ・・・・ギャアアアアァァァ！！！』
「アイボ！　司令部！」
その悲惨な光景も目の当たりにし。
「くっ、これまでか。　少年、お前はそのデータを持って、撤退しろ！」
「そんな！？　隊長までが犠牲になるなんて！！」
「これは犠牲ではない！！　未来を作るためのぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」
「隊長ーーーーーーー！！？」
少年の
「皆の命が、消えていく！　そんな・・そんな事ぉ、させるかぁぁぁーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」
少年の何かが、解き放たれた。
「そうだ、未来を作る為に、俺たちは！　変わるんだぁぁーーー！！！」

突如、学校全体で、少年の心を震わせそうなＢＧＮが鳴り始める。
近所迷惑ガン無視の大音量で。

「うおおおおおおぉぉぉぉーーーー！！！」

カメラを構え、屋上の地面へと降り立つイノベ・・・もといヒーロ４。
その瞳がなんか黄色に光っていたりいなかったり。

「なに、あれ？」
「いや、私に聞かれても・・・。」

流石の二人も、中断してヒーロ４を見る。

「うおおおおぉぉぉぉぉーーー！！！！」

二人にむかって突っ込んでいくヒーロ４。
勿論カメラは構えたままで。
しかしそのスピードは、常人の三倍に匹敵するものだった！

「ちょ、微妙に怖いんだけど。」
「どうでもいいさ、邪魔したんだから咬み殺す。」

満流との戦いを邪魔され、不機嫌気味な雲雀が迎撃する。

「たぁぁぁぁーーー！！！」
「っ！」
「ほぉ？」

それをヒーロ４はなんと紙一重で避けた。
流石の二人も驚愕する、避けられるなんて思いもしなかったからだ。
その間も、ヒーロ４は二人の間や周りを駆け巡り、二人の姿をカメラに収めている。

そう、ただ収め続けている。

「えっと、どういう事？」
「僕にきかないでよ。」

ただひたすらにカメラで撮り続けるその様に、次第にうっとおしい気分になってくる二人。
しかし、偶に攻撃してみるも、見事な迄に避けるヒーロ４。
まさに奇跡である。

「う、うざい・・。」
「目障りだよ・・。」

いい加減キレそうな二人、そろそろ本気で殺ろうかと思った瞬間。

「あっ！！」
「「あ・・。」」

足元のデコボコに足を引っ掛け、ズザザーっと、転ぶヒーロ４。
その際、カメラを落とし、かなりの勢いがあったせいか派手に飛んで、とっくに壊れた柵を超えて落ちていった。

「・・・・・・・。」
「・・・・・・・。」
「・・・・・・・。」

流れる沈黙。

「え、えーーと。　あのですね。」

一番に口を開くヒーロ４。

「じ、実はこれは・・。」
「ねぇ。」
「は、はいぃぃ！？」

言い訳をしようとした矢先、雲雀に声をかけられて悲鳴混じりに答えるヒーロ４。
もはや先程までの気迫は無く、いつの間にかＢＧＭも止まっていた。

「校内における無許可の撮影行為、及び放送施設の無断使用、覚悟出来てるよね。」
「い、いやそれは・・。」
「問答無用。」
「ギャアアアァァァァァァァァァ！！！！！」
「ドンマイ？」

その日、最後に生き残った勇者の悲鳴が並中に木霊した。
因みに、落ちたカメラは全損したが、奇跡的に記録は無事であり、全生徒に配信された。
これにより夜月満流の伝説が幕を開けるのであった。

第二十二話（後書き）

やりきった・・もう悔いはないぜｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

さて、いかがだったでしょうか？

突然ですが、わたしはガンダムＯＯが大好きです。

この話を思いついたのは、書き始める十分前でした。

最初はそんな事がありましたぁみたいな感じで流す話だったんですが、どうせならネタ回として書いてみよっかなぁと思い、書いた所存です。

なので、ガンダムＯＯネタを一期と二期目、劇場版のも含めて入れちゃいましたｗｗｗ

ＯＯ見たことないって人は、茶番を見せてしまって申し訳ありませんでした。

いや、もしかしたら知ってる人でも茶番かも（汗

つまらなかったら御免なさいｍ（＿＿）ｍ

只の自己満足回だったので、次回から本編書きます。

もし、万が一、面白いと思ってくれた方がいた場合、感想などくれると嬉しいです。

それではまた（o・・o）／~

第二十三話（前書き）

活動報告にも書きましたが、書き溜めしてたデータが吹っ飛び、やる気も一緒に吹っ飛びました。

大分遅れてしまい、申し訳ありませんm（＿＿）m

一度書いた文を一から書き直すというのがこんにも苦痛だとは思わなかった・・・。

しかし、ようやく一話書き上げたぜb

ではどうぞ

第二十三話

「うわぁっ！」

飛び起きて、荒い息を整える。
少し回復してから周りを見渡すと、先程と変わらない、いつもの自分の部屋。
いつの間にか眠ってたみたいだ、時計が四十分程進んでいた。

「な、なんだぁ、夢か～。」

溜息を吐き、再びベッドに横になる。

「変な夢見た～、なんだよアレ。」
「どんな夢見てたんだ？」
「あっ、リボーンお帰り。」
「おう。」

気づいたらリボーンがドアの所に立っていた。
下校するとき、用事があるとか言って何処かに行ってしまったんだ。

「それで、どんな夢見たんだ？　京子のエロいシーンでも見れたのか？」
「ばっっ！！　違うって！　そんないいもｎ・・いやいや、変態な夢じゃなくて！」
「じゃあどんなのだ？」
「だから・・・。」

リボーンに夢の内容を説明する。

不思議なくらいに鮮明に覚えていたから、話終えるのに十分掛かった。

「って夢なんだ・・。」
「・・・・ツナ。」
「へ？」

ゆっくりとオレに歩み寄って来たリボーン。
何かと思えば、俺の肩にポンッと手を置いて。

「疲れてんだな、今日は早めに寝て、ゆっくり休むといいぞ・・。」
「なぁ！？」

なんて事を言ってきた。
いや、自分でも変な事言ってるって分かってるよ？　わかってるけども。
表情は全くと行っていい程変わってない筈なのに、リボーンの目が本気で気遣わしげなのが無性にムカついた。

「べ、別に疲れてなんか！！」
「遠慮すんなツナ。　確かに最近、お前には色々と大変な思いをさせてたからな・・・・お前じゃなくても、疲れちまうのは仕方ねぇさ。」

普段なら天地が引っ繰り返っても言わないような言葉のオンパレードだ。
あまりにも複雑と言うか、対応に困る。

「そ、そう言えば！　結局用事ってなんだったの！？」
「あぁそれか。」

無理やり話題を変える。
用事の事が気になってたのは本当だし、これ以上夢について話していたら痛い奴認定されるかもしれない。

「転校生の事を観察しに行ってたんだ。」
「ふーん転校生を・・・・・て・・はぁあっ！！？？」
「いちいちうるせぇぞ。」
「グヘッ！」

左頬を思いっきり蹴り飛ばされ、ベッドの横に倒れる。
相変わらず、一体そのサイズの体のどこから絞り出してるのか聞きたくなるような威力だ。
リボーンと出会ってほんの数ヶ月だけど、既に俺の中の常識はとっくに粉々になっている。

「イッテテェ。　それよりも、何でみーちゃんを観察なんてするんだよ！」
「決まってんだろ、ファミリーにするためだ。」
「やっぱりかー！？」

予想はしていたけども。
万が一と思って縋り付いた希望は一瞬で消し飛んだ。

「あの女の強さは相当だぞ。　少なくとも、今日見た限りでは雲雀と同等以上なのは間違いねぇしな。」
「ま、まぁみーちゃんは昔から強いけどさ。」
「そういや、アイツお前の知り合いか？」
「うん、今朝言っただろ？　昔いた俺の友達。」
「そうか、アイツが・・。」

俺が説明した途端、口元だけをニヤリと曲げて笑うリボーン。
あまりの変化に、思わずビクッとなった。

「そいつは都合がいいな。　ツナ、お前がアイツを誘え。」
「えぇ！？　嫌だよ！　絶対にお断りだ！！」
「別に言葉巧みに引き入れろって訳じゃねぇ。　お前が夜月の奴に声をかけて、俺の所に連れて来るだけでもいいんだぞ。」
「どれでも嫌だよ！　だってそんな事したら・・・！！」
「なんだ？」
「あっ！？　い、いや・・・何でも・・・・ない・・・。」
「？」

口ごもる俺の様子を見て、首を傾げるリボーン。
危なかった、もう少しで言ってしまう所だった。

もしリボーンがみーちゃんの性格を知れば、絶対に見逃しはしないだろう。
だって・・・・・だってみーちゃんは・・・・・・・・。

そんな面白そうな事は絶対に断りはしないのだから・・・・。

そうだ、昔っからみーちゃんは面白い事には何が何でも関わろうとする。
マフィアとかボスとかファミリーとか。
俺には全く理解出来ないけど、少なくとも今回の事がみーちゃんにとって、もの凄く面白そうな事に入るのは明確だ。

リボーンに勧誘されれば、まず間違いなく二つ返事で入ってしまうだろう。
それどころか、「ボスの右腕は私だ～！」とか言って獄寺君と一騎打ちとかやり出しかねない。

「と、とにかく！　俺はみーちゃんを巻き込むのは絶対に反対だからな！」
「どの道無関係じゃいられねぇと思うぞ。　アイツ、今日風紀委員に入ってたからな。」
「・・・・・・え？」
「帰りが遅れたのもその為だぞ。　並盛のあちこちに飛んで行って、ゴロツキ共を百人近く半殺しにしてたからな。」
「・・・えええぇぇ～～～～。」
最早それしか言えなかった・・・。

「ふんふんふ～～ん？　きょーおーはなーにーがおっきるーかなー？」

風紀委員に入った翌日の朝。
スケボーで登校しながら、今日の学校生活に胸を馳せる。
昨日大量に不良共をボコｒ・・・もとい指導した為、気分は最好調であ～る。

あれだね、やっぱり世の為人の為になる事したから気分がいいね？
早朝で、まだ人もまばらな商店街の中。
スケボーで自転車レベルのスピードを出しながら、その上でくるくる回りながら鼻歌を口ずさむ。

周りから珍妙な物を見る目を向けられても気にしない！
だって私、風紀委員だもん？

「おや？　くんくん・・これは・・・・。」

どこからか漂ってきた臭いに釣られ、とある店の前で止まる。
ヘッドの文字がＤなアニメもかくやと言わんばかりのスライドターンによる緊急停止。
ギャギャッと地面を削る様な音が響き、店の前にいた店員さんや周りの人がビクッとしていた。

「どうも～こんにちは～？」
「え？　あ、はい・・こんにちは。」

唖然としていた店員・・この人は店長かな？　は、声をかけた瞬間に復活。

「ここってコロッケ売ってるんですよね？　三年前にはこの場所には無かった筈だから・・・最近出来た店ですか～？」

「えっと・・はい。　ちょうど一年前に開店しましたけど、引っ越して来た方ですか？」
「そうなんですよ～、つい一昨日帰って来たばかりで、何か変わったかなぁって見て回ってたんです～？」
「へぇ～そうなんで・・・・あっ！？」

困惑が取れ始めていた店長さんが、突然驚愕した表情で固まる。
どうしたのかと思いきや、目線を辿ってみれば簡単解決。
そこには私の左腕に付けられた風紀の腕章。

「え・・っと、もしかして並中の風紀委員の方・・・・ですか？」

あからさまに低姿勢になる店長。
顔色が真っ青である、どんだけ恭弥君は恐怖の象徴なのかと・・・。

「まぁ昨日入ったばかりの新人ですけどね～。　あと、出来れば他の風紀委員に対するような畏まった対応はしないでいいですよ～？」
「え？　で、ですけど。」
「いやいや、年上の人にそんなビクビクされたら結構傷つくんですけど。　それに、私の仕事は風紀を乱すあんちきしょう共の制裁であって、町民さん達を問答無用でボコす訳じゃないですよ～～？」
「は、はぁ・・。」

未だに挙動不審さが抜けきらないものの、大分落ち着いてきた店長。
気が付けば周りにいた人達もホッとしている様な空気が漂っている。
いくらなんでも怖がり過ぎでしょう。

これって風紀委員の存在が一番町民の安寧を損なっているのではないかい？

「あ、風紀委員と言えば！　そう言えば貴方は昨日不良達を薙ぎ倒していた人ではないですか？」

ふと店長さんが漏らした言葉に、まわりから「そう言えば・・・。」「言われてみればあの子だ。」と言った声が囁かれ始めた。

「えぇまぁ、確かに昨日アホ共を殺ってましたけど・・・。」
「やっぱりそうですか！　昨日はありがとうございます！！」
「はい？」
「俺らも言わしてください、ありがとうございました！！」
「なん・・・だと・・・。」

気づけば他の店の店長さん達と思われる人達が口々にお礼を言ってくる。
あれ？　あんなのいつも風紀委員がやってんじゃないの？

「他の風紀委員の人達は、なんていうか、不良達を制裁する為に店とか周りの物を使って暴れますから。　被害がこっちに来る事が多いんですよ、酷い時は店の中で乱闘するくらいで・・・・その後はその日の営業を断念する時もある程に・・・。」
「何やってんだよ風紀委員・・・。」
「だけど、貴方は昨日、周りに被害が出ないように戦ってくれました。　御陰であのあとも無事に営業が続けられて、沢山の店が助かりました！」
「いやいや、別にそこまでお礼を言われることでも・・・」
「そう言う訳には行きません！！」
「うわぉ！？」

譲れないとばかりに詰め寄って力説するコロッケ店長さん。
周りの店長、Ｓもしきりに頷いている。

どんだけ被害に会ってきたんだ・・・・。
風紀を守る人達が店内で乱闘とか、本末転倒もいいところじゃない。
これは恭弥君に言っておいた方がいいのかな？

「分かりました、私の方から委員長にそれとなく言っておきますね～。」
「な、なんと！？　雲雀さんにですか！！　大丈夫なんですか！？」
「大丈夫です？　なにせ私は・・・・・恭弥君のパートナーですから～～～～！！」
【おおおおぉぉぉぉ～～～～～～！！！】

歓声に包まれる商店街。
時間も迫り、段々と人も多くなっていく。
道行く人が騒ぎを聞きつけ、近くの人に話を聞いてといった具合に騒ぎが広がっていく。

「おっと、もうこんな時間。　それでは、私は学校があるので、さよ～なら～～～？」
「あっ、はい！　お気を付けてー！！」

商店街を抜けるまで、数々のお店から様々な差し入れを貰い、ホカホカの焼きたてコロッケを食べながらスケボーを走らせるのだった。

「このコロッケは・・・・至高のコロッケかもしれない！！」

「おっはよ〜〜〜?」
「あっ、みーちゃん!」
「おぅ、お早うツナ君!」
「うん、お早う。」

いつも通りに登校してきたみーちゃん。
どうやら雲雀さんとの戦いで傷とかは出来てないみたいだ。
ホッと息をつく、雲雀さんを相手にして無傷なんて、やっぱりすごいなぁ。

「お、夜月じゃねぇか。　お早うな。」
「うん、お早う武君?」

山本とはもうすっかり仲良さげに挨拶してる・・・獄寺君は自分の席に座っていてこっちに来ないけど。
それよりも気になるのは・・・。

「ねぇみーちゃん?」
「ん?」
「そ、その腕章ってやっぱり・・・・。」

「あぁこれ？」

そう言って左腕を前にして見せてくる。
そこにあるのは、中学校のとは思えない程の立派な意匠で形作られた風紀の二文字。
言うまでもなく並中風紀委員の腕章だ。

「実は私～、昨日恭弥君に言われて風紀委員になったんだぁ？」
「や、やっぱり・・。」

出来れば嘘であって欲しかった。
みーちゃんの言葉を聞き、クラス中の生徒が一斉に此方を向いている。
それは驚愕であったり、畏怖であったり、恐怖であったりと様々。
しかしそんな中、一人の女子生徒がみーちゃんに近寄ってくる。
というかその子は・・

「あの、満流ちゃん。」
「うん？　おぉ！！　京子ちゃん！？」
「うん！　久しぶり、元気だった？」
「うんうんそりゃあもう！　京子ちゃんも、三年ですっかり美少女になっちゃって！！」

とても嬉しそうに話す二人。
そう言えば、昨日はみーちゃんに群がる人、特に男子生徒達の勢いが凄くて話せなかったんだよな。
午後は雲雀さんとバトルしっぱなしだったから、結局再会を喜ぶ時間がなかったんだ。

京子ちゃんは特に、やっと話せて凄く嬉しそうだ。
花が咲くみたいな笑顔が、凄く可愛い。
そんな京子ちゃんとみーちゃんが笑い合って話しているせいか、教室中の男子が二人を見て鼻の下を伸ばしていた。

殆どが顔を赤くし、二ヘラと笑っている奴も一人や二人じゃない。
ってかよく見ると廊下にもいるし！

そんな光景がしばらく続き、チャイムが鳴ると同時に担任が入ってきた。
廊下にいた生徒が慌てて自分の教室に帰っていく。
しかし、やはり多くの生徒が風紀委員となったみーちゃんの方をチラチラと見ている。

やっぱり気になる、いや、怖いのかも知れない。
そりゃあ雲雀さんと同じになった訳だし、みーちゃんの事をよく知らない人ばかりだから仕方ないか。
そんな風に思いながら担任の話を聞き流していると、不意に教室の前の扉が勢い良く開いた。

皆がビックリしてそちらを見ると。

「夜月満流は来てる？」

心無しかいつもより不機嫌そうな雲雀さんがいた。

第二十三話（後書き）

今回はあまり目立った展開のない話でしたね～ｗｗ

消えていった次からの話も、順次復活させていきます。

テンション的な要因で遅れる可能性は大ですが、二・三日に一話は頑張って投稿しようと思うので。

それでは・・。

第二十四話

「はいコレ。」
「・・・・・・。」

現在、応接室の机の上にピサの斜塔が立っている。
いったい何処から取り出したのかと聞きたくなる程に高くそびえ立ち。
今にも雪崩に変わってしまいそうな程にグラグラと揺れている。

「これ？」
「これ。」
「なにこれ？」
「書類仕事だよ、君の分の。」
「・・・なんと・・。」

唖然と見上げる私。
ヴァリアーもそうだったが、労働基準法なんて幻想であったかの様な鬼畜っぷりだ。

「なんで入会二日目にして罰則レベルの仕事受けさせられるの？新手の新人いびり？」
「違うよ、昨日君が活動後の報告を怠って帰宅したからだよ。」
「罰ゲームってわけっすか・・。」
「そう。」

そう言われると反論出来ない。
昨日はあまりの気分爽快さに、報告なんて脳みそから抹消されてたし。

まぁ、授業出ないでいいんならすぐに終わるか。
さっそく他の机に移動（いつの間にか私用の机が用意されていた）。
中から一枚ずつ引き抜いて処理する。
高すぎて上から取れないのだ。

「しかし、まさか授業中にやらされるとはね～。」
「どうせ君なら授業なんて受ける意味ないだろう？」
「何を基準に？」
「勘だよ。」
「勘って・・・・まぁ確かにそうだけどさぁ。」

中学の範囲なんて親を殺す前に済ませからね。
元々学校にだって通う意味は無いんだけど、面白いからね。

一時間、二時間と時間が過ぎていく。
私と恭弥君は無言で作業をこなしていく。
途中で草壁さんが来て、事務連絡をしたり、紅茶を入れてくれたりした。

「そう言えば、今朝商店街の人達と話したんですけど。」
「そうですか、どうかしたのですか？」
「いやですね？　風紀委員の人がチンピラをボコす時の被害が店にまで及んで営業出来なくなるって言って困ってて、私が昨日被害を出さずにボコッたのを感謝されたんですよ。」
「そうでしたか。」

そう言って、草壁さんがバツの悪そうな顔をした。

「そう言った事は前々から確認していたのですが、何分うちの委員

達は血の気が多い者達ばかりで・・・。」
「あぁやっぱり？　じゃあ恭弥君が直接言えばすぐに改善されそうじゃないですか？」
「いや・・・それがその・・・。」

横目で恭弥君を伺う草壁さん。
私もつい目を向け、恭弥君が視線に気付いてコチラを見る。

「なに？」
「風紀委員が商店街の店に被害出してるから、恭弥君が注意してくんない？」
「いやだ。」
「何故に・・・。」
「面倒。」

並盛全体の情勢にまで関与する癖に、なんでこの程度が面倒なの？

「じゃあ私が言うから皆集めてくんない？」
「別にいいよ、放課後に体育館に集めるから。」
「それはいいんだ・・・。」

集めるついでに一言って発想は無いのか。
これがヴァリアークオリティならぬ雲雀クオリティなのか。

「ありがとね～。　よし！　終わりっと？」
「えっ！　もう終わったんですか！？　一週間分の仕事だった筈なのですが・・・。」

おい、罰則じゃなかったのかい？

「満流はこうでもしないと必要最低限の仕事しかしなさそうだからね。」
「なぜそれを・・・。」

バレていたなんて。
書類仕事はそこそこに、チンピラ教育を最優先するつもりだったのが見抜かれていたとは。

「でもまぁそう言う事なら暫く書類仕事な無いってこt・・・。」
「何言ってんの？　仕事はいくらでもあるんだから明日もちゃんとあるよ。」
「・・・・草壁さん、日本はいつから労働基準法を廃止したんですか？」
「今もちゃんとご存命ですよ。　すいません。」

入れたての紅茶が入ったカップを私の机に置きながら謝ってくる。
なんて出来た副委員長さんなんだ。
置かれたカップを手に取り、紅茶を一口飲む。

落ち着くねぇ～。

「さぁてと～、仕事も終わったしぃ、どうしよっかな～？」
「授業は受けないのですか？」
「いや～何かもう受ける気分では無くなってしまってですね？」
「そ、そうですか。」
「はい。　ん～～～～～、とりあえず屋上にでも行ってみますか。」

室内よりはあそこに居る方が気分も晴れるだろうし。
紅茶を飲み干し、応接室を出て階段に向かう。
勿論だが廊下に人気はなく、校庭から体育の授業を受ける生徒達の

声が聞こえてくる。
階段を昇り屋上への扉を開く。
心地いい風が肌を撫で、なびく髪を無意識に抑える。
「ふぅ～、仕事で疲れた心が癒される様だ～～？」
棒読み混じりに呟き、屋上の真ん中辺りまで歩を進め、目を閉じる
先程よりも校庭の声がよく聞き取れ、風が少し強くなる。
強めになびく髪を、今度は抑えずに身を委ねる。
「さってと・・・・そろそろいいよね？」
少しの間沈黙が続いた後、私は目を開けて、大きめの声を出して呼びかける。
「話したいから、気付きやすい視線を送ってたんでしょう？　ここなら二人っきりでお話できるよ？」
「そいつはありがてぇな。」
「でしょ？」
振り向いて、屋上の出入口の上、給水タンクの方に目を向ける。
そこには懐かしのマーモンを思い出させる様な、黒いスーツ姿の赤ん坊がいた。
「それで私に何か用かな？　赤ん坊君？」

夜月満流。
ツナの昔の友達で、小学校三年の時にイタリアへ渡る。
そこから妙にあちこちの国を転々として、時々消息が解らない時期が多々あった。

この時点で一般人じゃねぇ可能性は大きかったが、昨日コイツを見てそれは確定した。
雲雀と互角に戦える中学生なんざ、そもそも凡人じゃねぇ。
俺が今こうして見ていても、隙なんて全くねぇんだからな。

「ちゃおっす。　初めましてだな夜月満流。　俺はツナの家庭教師のリボーンだ。」
「ツナ君の？　家庭教師なんて雇ったんだぁ～。　リボーン君は赤ん坊なのに家庭教師やってるの？」
「見た目は赤ん坊だが、俺は超一流の家庭教師だぞ。」
「ハハッ、そうなんだぁ～？　ツナ君もこれで安心かな？」

雰囲気こそ子供に対する態度だが、コイツの目には子供の話に付き合ってる様な感じはねぇ。

つまりは俺の言ってる事を真実だと思ってる。
大概は子供のお遊びと思う話をだ。

つまりコイツは、俺が只の赤ん坊だとは思ってねぇって事だ。
そうでなけりゃただの馬鹿だが。

「それで、超一流の家庭教師さんが私に何のご用でしょう？」
「単刀直入に言うぞ。　夜月、お前ツナのファミリーに入らないか？」

瞬間、夜月の眉がピクッと動いた。

「ファミリーってなに？」
「マフィアの事だぞ。　ツナはボンゴレファミリーの次期ボスになる、だから今仲間を探してるんだ。」
「ふぅ～～ん、次期ボス・・・ねぇ・・。」

考えている様子の夜月、しかし口元は先程からつり上がっている。
どっちかっつうと好感触みてぇだな。

「だから昨日から私を観察して見定めてたのかな？」
「やっぱり気付いてたか・・。」
「気配だってそんなに消してなかったじゃない？」

そう言って笑う夜月。
それだけ見れば普通の女子中学生だが、目だけは俺から逸らさずに観察してやがる。

「で、どうだ？」
「う～ん、面白そうだから入ってもいいけど。　条件があるかな～

?」
「言ってみろ。」
「面白そうなバトルがある時は必ず呼んでくれればそれでいいよ？
めっちゃ強い人がいるなら文句なし！」
親指をグっと突き出してくる、思ったよりマトモな条件だったな。
「それくらいなら問題ないぞ、他にはないな？」
「う～～んと・・・あっ、それとこれは言っておきたいんだけどぉ・・。」
「なんだ？」
次の瞬間、場の空気がガラリと変わった。
変わらず笑みを浮かべる夜月。
だがそれは先程までの無邪気な笑顔とはまるで違う。
獲物を狙う獣のような、森の中で息を潜める狩人のような。
犠牲者を嘲笑う殺人鬼のような、敗者を踏みつける勝者のような。
他者を下し、上へ先へと歩みを止めない。
民を見下す王女のような、どこか冷たく鋭く、そして妖艶な笑みを浮かべている。
「私はいつも、味方とは限らないからね？」
自然と、口元がニヤけるのを感じる。
俺はどうやら、想像以上の奴を見つけたみてぇだ。
「あぁ、それでいいぞ。　よろしくな、満流。」
「うん、よろしくねリボーン君？」

空気が霧散し、元通りの無邪気な笑顔に戻る。
丁度四時間目の終了のチャイムが鳴り、昼休みになった。
「なら丁度良いからファミリーに紹介するか。」
「オッケー？　お弁当食べながら皆で親睦を深めよっか！」
満流が屋上を出て、俺はその肩の上に飛び移る。
周りから奇異の視線を受けながら、ツナの教室へと向かった。

「と言うわけで新しくファミリーになった満流だぞ。」
「よろしくー？」
「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーー！！！？？」
「なっ！？」
「おぉ。」

昼休みのチャイムが鳴った後、獄寺君や山本と昼を何処で食べるか迷っていた時に、みーちゃんはようやく帰ってきた。
しかも、肩にリボーンを乗せて。

リボーンに話があると言われ、五人で屋上に来た。
この時点でもう嫌な予感しかしなかったけど、希望は捨てたく無かった。
たまたま意気投合したとか、風紀委員と取引したとか？
とにかく何でもいいからみーちゃんがマフィアに関係する事以外の何かであって欲しいと。
だけど、無情にもそれは打ち砕かれた。
信じたくない事実を突きつけられ、思わず大声を出しちゃった。

獄寺君も驚いていて。
山本は驚いてはいるけど仲間が増えてラッキーみたいな空気だ。

「という訳で、じゃないよリボーン！！　あれだけ駄目だって言ったのに！」
「それは聞いたが、諦めるなんて言った覚えは微塵もねぇぞ。」
「なぁっ！？」

た、確かに言ってないけど！
じゃあ昨日の苦労は最初から・・・無駄。
薄々分かっていたけれど、切ない・・・。

「待ってくださいリボーンさん！　俺は反対です、雲雀んとこの奴をファミリーに入れるなんて！！」

そ、そうだ！
まだ獄寺君が居た。
みーちゃんとの不仲はどうにかしたいと思っていたけど、今回だけは助かった。
どうにかリボーンを説得してくれれば！！
「風紀委員のスパイかも知れません！　十代目の身に何かあったらどうするんですか！？」
その調子、頑張って！
「まぁまぁ、落ち着いてよ獄寺君とやら。　そう邪険にしないでよ。」
「うるせぇ！　お前はすっこんでろ！！」
笑って話し掛けたみーちゃんに、獄寺君が吠える。
こ、怖ぇぇ。
でもみーちゃんは涼しい顔で話を続ける。
「聞きなって。　私もね、ツナ君にボンゴレのボスになって欲しいんだよ。」
「な、なんだと？」
あれ？
「マフィアの世界で誰もが恐れ、敬意を表するボンゴレファミリー。
そんな強大なボンゴレを継ぐ資格を持つのはこの世でツナ君だけだよ。」
「わ、わかってんじゃねぇか・・。」

え？　みーちゃん？

「それにね？　リボーン君から聞いたよ、そんなツナ君をいつも傍で支える獄寺君の事。　まさにボスの右腕の理想の姿だって思ったよ！」

「ま、まぁな！　十代目の右腕は俺にしか務まんねぇからなぁ！」

ご、獄寺君？

「今はまだまだ未熟な私だけどね？　そんな獄寺君の下で勉強させて貰って、少しでもツナ君の為に何か出来たらなぁって思ったんだよ？」

「し、仕方ねぇなぁ！　そこまで覚悟があんならちっとは教えてやらねぇ事もねぇけどなっ！」

そ・・・・・んな・・・・・

「さっすが獄寺君！　いよっ、右腕の鏡！　ツナ君の最も頼りにする男！！」

「へへっ、当たり前ぇだぜ！！」

完全に懐柔させられた獄寺君。

山本はそんな光景を面白そうに見ているだけ。

リボーンは俺と目が合った瞬間、ニヤッと口元だけを歪ませた。

「嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

俺の叫びが、屋上に虚しく響いた。

第二十四話（後書き）

少しづつテンションが回復してきました！

速く投稿すためにがんばります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1273x/

家庭教師ヒットマンリボーン　　－宵の口－

2011年11月8日04時10分発行